
勇者様にいきなり求婚されたのですが

富樫 聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者様にいきなり求婚されたのですが

【Nコード】

N4278U

【作者名】

富樫 聖

【あらすじ】

魔王に攫われた美しい姫君を救い出して勇者が凱旋した。二人の間に恋が芽生えたに違いないと、ベタな王道を期待する人々を目の前に、勇者は求婚した——姫の侍女Aに。「貴女を愛しています」「わ、私モブキャラなんですけど!?!」。モブなのに一躍主役級に引き上げられてしまった侍女Aのお話。

プロローグ

美しいと評判の大国シュワルゼ国の姫君が魔王に攫われた。

王はすぐさま兵隊を派遣して姫を救い出そうとしたが、魔族の圧倒的な力によって兵隊は蹴散らかされて失敗。

進退極まった国王は、神の神託を受けたと評判の勇者に力を貸してもらうことにした。

城に招かれた勇者一行に国王は、

「どうか、どうか、姫を救い出して欲しい。もちろん、褒美はそなたらの好きなものを与えると約束しよう」

「わかりました。命に代えても姫は救い出しましょう」

頷いた若者——勇者は、金髪碧眼の驚くほどの美貌の持ち主だった。

彼だけではない。

彼の仲間の魔法使い、エルフ、女戦士、神官、女盗賊の全員がハツと人目を引くほどの容貌を持っていた。

え？ 顔？ 顔で選ばれた？

この場に居合わせた宰相、大臣達、そして姫の侍女Aは思わずそんなことを頭の中で突っ込んでいた。

だが顔も良ければ実力もあるパーティーだったらしい。

勇者一行は人々の——主に女性の——歓声を受けつつ意気揚々と

出発し、しばらくの後、姫君を救い出して凱旋したのだ。
しかも——魔王まで倒して。

「おお！ よくぞ無事に姫を取り返してくれた！」
娘と感動の再会を果たした王は上機嫌で言った。
「嘘偽りは申さん。そなたらの望む褒美を与えよう！」

この時、広間に集った人々は期待をしていた。
三国一といわれるほどの美貌を持つ姫君と彼女を魔王の手から救い出した勇者。

並んでいる姿はまるで絵のように麗しく、誰もがお似合いだと感じただ。

きつと、物語のように二人の間には恋が芽生えたに違いない。芽生えないわけがない。

だから、勇者は褒美として姫を求めてくるだろう。
そして二人は結婚していつまでも幸せに暮らしました、となるに違いないと。

王の言葉を聞いた勇者は、光の具合で青にも緑にも見える瞳をきらめかせ、真剣な眼差しを玉座の王に向けて言った。

「では、この国から花一輪、私が持ち帰ることをお許しください」

キター！

と誰もが思った。

もちろん、ここで言う“花”は姫君のことだ。

「うむ。許す。許すぞ」

王は何度も頷いた。

「もちろんですとも」

王妃も顔を綻ばせる。

「ありがとうございます」

柔らかな笑みを浮かべて勇者は優雅に玉座の王と王妃に一礼すると、愛する女性の元へ向かった。

そして彼女の前で歩みを止めると、碧の目に愛しさとやさしさを込めて言った。

「貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」

——と。

——姫の侍女Aの手を取りながら。

勇者様の求婚

初めまして、こんにちは。

アーリアと申します。侍女Aです。

子爵家の娘で、行儀見習いを兼ねてこのシュワルゼ国の第二王女ルイーゼ様の侍女を勤めております。

つい先ごろ魔王に攫われた姫様が勇者の手によって救い出されて、無事に城に帰還しました。

大変よろこばしいことです。

姫さまの無事を祈って毎日毎日神に祈りを捧げていた甲斐がありました。

——ですが。

どうなっているのでしょうか、この状況は。

目の前にはキラキラと後光が差すくらいに麗しい容貌の男性。

勇者である彼——グリード様がどういいうわけか私の手を取って言ったのです。

「貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」と。

周囲はビックリです。

王様など仰天のあまりに玉座から立ち上がっているくらい。だけど、一番ビックリしたのは私でしょう。

貴方は姫様にプロポーズするんじゃないかったですか!?

それなのになぜ私の前に立って、手なんか握っているのでしょうか……。

——姫様。

そこで私はハッとなりました。

そうです。この場面を見て姫様はどれほど衝撃を受けていることでしょう。

好きになった勇者様が自分をスルーして自分の侍女にどういうわけか求婚しているのですから。

私は手を取られたまま、グリード様の肩越しに姫様の方を伺いました。

するとどうでしょう。

姫様はこちらのことなんて見てません。

ひたすら、勇者様一行の魔法使い——長い黒髪に茶色の瞳を持つこれまた美形な男性——と何やらじっと見つめあっているではありませんか！

うつすらと頬を染めたそのお顔は恋してる乙女そのものです。

ちよ、なぜ王道の勇者様を飛び越して魔法使いと恋に落ちてるんですかあ！？

わけがわからなくなって、思わず周囲に視線に走らせた私は気付きました。

広間にいる者が全員この事態に仰天しているのに、勇者様ご一行の方々は誰も驚いていないことに。

それどころか、皆様こつちを見ていらして、

「頑張れよ、グリード」

「そうそう。ガンガンいっちゃえ！」

「結婚式はぜひとも僕に執らせてくださいね」

とか何とか煽っています。

ちなみに発言は上から女戦士、女盗賊、神官（男）の順です。

私は彼らのこの言葉を聞いて、どうやら勇者様パーティの間ではこのことが既知の事実であることを悟りました。

どうやら突発的に、おかしくなつての行動ではないらしいです。

……困りました。

魔王の呪いで何かでトチ狂って私なんぞに求婚しているという理由の方が何倍もマシです。

正気に戻れば、このプロポーズはなかったことにできるのですからね！

ですが、彼らの様子ではそれはなさそうです。

勇者様は正気で、それも本気らしいです。

私は恐る恐る勇者様を見上げました。

「あ、あの正気ですか？」

わずかな希望を求めて聞かずにはいられませんでした。

……即答されましたが。

「もちろんです。貴女を愛しいと思うこの気持に嘘偽りはありません」

——嘘偽りであつて欲しかったです、勇者様。

だが、どうやら勇者様の“花”は自分らしい。

さっきはキラキラの後光に邪魔されて気付きませんでした。その長い睫毛の下からのぞく碧色の目は蕩けそうに熱い何かを浮かべて私を見下ろしています。

本気で困りました。

なぜなら、私は———その他大勢のキャラの一人。
モブキャラなのだから———。

勇者様の求婚（後書き）

息抜き作品です。馬鹿話ですいません。

侍女Aの困惑

モブ。

それは幾多の物語には必ずいる雑魚キャラ。
脇役ですらない、名前すらない存在。

私もそんなモブキャラクターの一人なのです。
もちろん、勇者物語には名前はなくても、実際には名前は存在
しますけどね。

この勇者物語において私に与えられた役割は姫の侍女A。

ルイーゼ姫が魔王に攫われる場面を目撃して、

『姫さまあああ!』

と絶叫し、

王様や大臣たちに、

『姫様が、姫様が魔王に――!』

とルイーゼ姫が魔王に攫われた事実をパニックになりながら報告
するのが役目。

実際にその通りにしました。いや、なりましたというべきでしょ
う。

ちなみに、魔王は人型ではありませんが、美形ではありませんで
した。

はつきり言っただけです。

普通は美形を持ってくるでしょう?　なんで中年の冴えないオッ
サンなの!?

と、姫さまを抱きかかえている自称「魔王」を見て私が思っ

まっただのは誰にもナイシヨです。

ついでに言うなら、普通魔王なら部下に命じて攫わせるだろうに、なぜ自ら単独で攫いに来てるんだろつかと内心ツツコミ入れてしまったのもナイシヨです。

まあ、それは置いておいて、私の勇者物語においての役割はそれではば終了しました。

あとはひたすらルイーゼ姫様の無事を神に祈りつつ、主人のいない部屋をいつ帰ってきてでもいいように整えているだけの毎日。

だってモブですもの。

やれることは限られてるんです。

でもそんなモブ生活に満足していました。

だって、主役や脇役である勇者様一行は私が心を痛めつつのほんとと過ごしている間、姫様を救うべく魔王の城目指して戦う日々だったに違いありません。

考えてもゾツとします。

戦うスキルもステータスもない私はモブで十分なんです。

ええ、誰がなんと言っても、侍女Aでいいんです！

だから、勇者様に求婚されるのは非常に、非常に困るのです。

だって、平凡そのもので、勇者様の妻になるスキルもステータスも持ち合わせていないのですから！

私は勇者様に手を取られたまま、ダラダラと冷や汗が出るのを感じました。

周囲の視線も驚愕から『あの女は何だ？』という何やら陰のある視線に変わってきたような気がします。

それはそうでしょう。

美しい姫様に求愛するのかとばかり思っていた凛々しくも麗しい勇者様が選んだのが、平々凡々を絵に描いたような冴えない侍女なのですから。

「あ、あ、あ、あの、どうして私なのでしょうか……？」

ルイーゼ姫様は国一番の美女。

その美女と国に凱旋するまでしばらく一緒に旅をしていたのですから、姫を好きになるのが当然の流れというもの。

なのに、この目の前の勇者様は姫様には目もくれず、容姿も器量も普通の侍女に求婚しているのです。

誰しもが思ったことでしょう。

なぜ私なのだと。

その言葉に勇者様は淡い笑みを浮かべて私を見下ろして言いました。

「この城に招かれた折、ルイーゼ姫を心配する貴女を見て一目で惹かれました。正直、魔王に関する情報が少なく、あの段階では直接魔王とやり合うのは時期尚早だと思っていたんです。ですが、貴女の姫を救って欲しいという言葉に私は決心しました。貴女の為に姫を救い出そうと」

姫を救って欲しいという言葉……。

ええ。確かに言いました。言いましたとも！

城に到着してすぐの勇者様に、

『お願いです！ 姫様を、姫様をお救い下さい！』
って、縋ったのでしたっけ。

実際、勇者様と直接言葉を交した——と言えるのはどうかはともかく——のは、あれだけです。

王様と謁見したときの広間には私もいましたけど、あの時の私に個人的な発言権はなかったのですから。

ということはあの縋った時に見初められたということでしょうか……？

……あれも侍女Aとしての役割のうちだったのですが……。

まさかあんなテンプレ発言で恋愛フラグが一方的に立つとは。まして、勇者様がやる気を出して、姫様を救いに行ってくれるとは。

——世の中何があるかわかったもんじゃありませんね。

「旅をしている間、ずっと思っていました。姫を救い出すことができたなら、貴女を……」

勇者様——グリード様の目がひと際甘く私を見つめてきます。

私の背後にいる侍女仲間——モブ仲間とも言っ——がザワついて「勇者様、素敵」とか何とか言うのが耳に入りました。

至近距離にいる彼らにも、この勇者様の魅惑術チャームにも等しい美形キラキラ光線が見えるのでしょうか。

でもツツコミ入れていいですか？

……あの時だけしか話してないのに、いきなり求婚だなんて早くないですか？

何かをものすごくすっ飛ばしてないですか？

「ひ、姫は、姫はどうなるのだ？」

いきなり王様が完全に玉座から腰を上げて叫びました。
どうやら驚愕からようやく立ち直ったようです。

そして、勇者様に姫様を嫁がせる気満々だったのに、完全に梯子を外された状態になり、王様は何やら憤慨されている様子です。
きっと勇者様が姫様の気持を弄んだように思ったのでしょうか。
でも、肝心の姫様の様子は見えていないようです。いまだに黒髪の魔法使いと頬を染めながら見つめ合っているというのに。

勇者様は王様の言葉を完全にスルーしました。
私を熱心に見つめるだけで、聞こえているだろうに王様の方をちらりとも見ません。

「ルイーゼ姫？ ルイーゼ姫なら、リュファスがいるでしょう？」
代りに答えたのが、エルフの青年です。

彼は持っていた杖でホラとばかりに見つめ合う魔法使い——リュファスという名前だそうです——とルイーゼ姫様を指しました。
そこでようやく王様は姫様たちの様子に気付いたようです。

「ひ、姫、これは一体……？」

その王様の言葉に、姫様たちはようやく顔を上げました。
だけど、すぐに再び視線を交し——不安そうな表情になるルイーゼ姫様に、魔法使いが安心させるようにやさしく微笑みました。

美形が微笑むとその効果は凄まじいです。
侍女仲間が私の背後で「キヤー」と黄色い声を上げているのが聞こえました。

貴女方は美形ならなんでもいいんですか……？
いえ、勇者様に手を取られて求婚されているという状況でなかっ

たら、私もあの黄色い声をあげる集団に交じっていたかもしれない。なのでツツコミ無用です。

魔法使いはもう一度姫様に微笑むと、その手を取って二人して玉座に向き直りました。

勇者様に負けず劣らずの美形な魔法使いです。姫様と並ぶとそれはまるで絵のよう。

他の人もそう思ったらしく、二人並んだ姿を見て「ほう」とため息のような感嘆がさざ波のように広がりました。

そんな中——魔法使いが言った言葉に、広間は騒然となりました。

「私はエリユーシオン公国の皇子、リユファス・リクリード・エリユーシオンです。シュワルゼ国王陛下、ならびに王妃陛下にお願い申し上げます。どうか、私とルイーゼ姫の結婚をお許しください」

私の手を取ったままの勇者様の背後で、ベタな話が展開されたのでした——。

侍女Aの困惑（後書き）

主人公はツツコミ属性あり。

関係のないところで王道展開

魔法使い——リュファス様の言葉が広間に朗々と響き渡りました。その直後、彼の言っていることの意味を理解した人々がざわめき始めました。

なんとリュファス様はエリューシオン公国の皇子だということです！

それが本当なら、なんておいしい……ではなくて、素晴らしい話なのでしょう。

私は主の僥倖がうれしくなってルイーゼ様に目をやりました。が、そこでビックリです。

いえ、ビックリなのは私だけではありません。当の姫様までもが目を見開いて驚愕の視線を傍らの自分の手を引いているリュファス様に注いでいるではありませんか。

ちょ、もしかして姫様も今の今まで知らなかったのですか？

だけどそれなら先ほどの不安そうな姫様の表情も頷けます。

きつと姫様は身分のないただの魔法使いだと思っていたので、王様たちが自分たちの結婚に対してどんな反応を示すか不安だったに違いありません。

神の神託を受けた勇者様ならともかく、一介の魔法使いに嫁ぐのを王様は良しとしなかったでしょうから。

「エリューシオン公国の皇子、だと？」

王様が信じられない、といった風に驚愕の視線でリュファス様と、その彼に手を引かれているルイーゼ様を見ました。

エリユーシオンは同じ大陸にあるこの国より大きなとても力のあ
る大国です。隣り合っていないため、わが国との国交はそれほど
盛んではないようですが。

そういえば、勇者様——目の前にいるグリード様もその出身だ
という話をどこかで聞いたような気がします。

「エリユーシオン公国の皇子がなぜ、勇者の一行に魔法使いとして
参加しているのだ？」

王様が誰しもが疑問に思っていることを口にしました。

「そういえば、聞いたことがあります。かの国の第二皇子であるリ
ュファス皇子は魔法の長けた人物であると」

そういきなり発言したのは、外務大臣でした。

彼は長年外交官をしていて、外国の事情にも通じている人物です。
その彼がそう言っているなら、目の前にいる魔法使いはエリユー
シオンのリュファス皇子であってもおかしくないのです。

「説明しましょう」

そう言ったのは、当のリュファス様でした。

「私は勇者であるグリードとは幼友達なのです。エリユーシオンの
夏の離宮がある場所の近くの村に彼は住んでいましたから。です
から魔族が台頭してきて、グリードが勇者として神の神託を受けた
と聞いた時、私にも何か彼を手伝えることがないかと思ったのです。
幸い私には魔力があったので、魔法使いとして彼の一行に加わるこ
とができました」

リュファス様はそこまで言って、ルイーゼ様に向き直って愛しそ
うに見下ろしました。

「皇子であることを黙っていてすいませんでした。姫。ですが、勇

者パーティーの一員である私は皇子ではなく、あくまで魔法使いリユファスという立場であつたため名乗ることはできなかったのです。それに……すいません。これは私のわがままです。貴女に大国の皇子ではなく、リユファスとして愛して欲しかったのです。皇子としての自分ではなく、ただの男としての私を……」

「リユファス様……」

ルイーゼ姫様の大きな目にたちまち涙がつかび、真珠のようなその雫がぼろりと零れました。

ですが、私にはわかりません。

あれは悲しんでいるわけではないのです。

その証拠に、姫様はその顔に笑みを浮かべようとしているではありませんか。

「わたくしが好きなのはリユファス様その人ですわ。皇子でもただの魔法使いでもどっちでもかまいません。そんなことは些細なことです。ここにいたただの男の貴方を、わたくしは愛しているのですから」

「姫……！」

リユファス様は感極まったようにつぶやくと、姫様をぎゅうと抱きしめました。

そのリユファス様の背中に、おずおずと姫様の手がまわり、きゅっとロープを握り締める様が初々しさを伴って私の目に、そして人々の目に映りました。

私はそれらを勇者様に依然として手を取られたまま、その勇者様の肩越しに全て目撃しておりました。
すごいです。

主役であるハズの勇者様の背後で、その主役の座が危なくなるよくなベタで王道的な恋物語が展開されているのですから。

そう。要約するとこんな感じで。

『魔力を持った皇子が、幼友達の為に皇子としての自分を捨てて魔法使いとして勇者の一行に加わった。

そして、出会ったのが魔王に攫われていた美貌の姫君。

勇者一行は姫君を救うために魔王と死闘を繰り広げ、ようやくのことで姫を救い出すのです。

その過酷な旅の中で、魔法使いと姫君は恋に落ちました。

皇子という身分は名乗れないまま、惹かれあう二人。

やがて、姫の国に凱旋して、魔法使いは姫の父親である王様に姫を請います。

その時になってようやく魔法使いは身分を明かすのです。自分は皇子だと。』

おおお、なんたる王道展開なのでしょう！

一気に場の主役があっちに移ったのが判ります！

というか、もう主役あっちでもいいんじゃないかという気になります！

だって、侍女Aに求婚する勇者様より、あっちの方がどう考えても王道じゃないですか？

勇者様の肩越しに視線をやりつつそんな事を考えていたら。

不意に、私の手をつかむグリード様の手に力が入りました。

「痛っ」

顔を顰めた私に、勇者様が言いました。

「見てはダメです」

「は？」

不遜なことを考えたのがバレたのかと思わず勇者様——グリード様を見上げた私の目に飛び込んできたのは。

真剣な眼差しで私を見下ろすグリード様の表情でした。
相変わらずの美形です。

ですが、その瞳はさっきまでの甘い表情とは違っていて、今は別の炎が渦巻いているような気がして仕方ありません。

きゅっ。

また手に力が入ります。今度は痛くはありませんでしたが、妙に力のこもったその手に何か圧力みたいなものを感じずにはいられませんでした。

「私を見てください。その瞳に、別の男を映してはいけません」
「——は？」

一瞬何を言われたかわかりませんでした。

だけど、勇者様を目の前にして肩越しに余所見をしていたのが気に入らないのだということはかろうじてわかりました。

いえ、いえ、いえ、リユファス様を見ていたわけではないのです
が！？

「ル、ルイーゼ姫様とセットで眺めているだけなのですけど……？」
恐る恐る言った私に、グリード様はふるふると首を横に振りま
した。

「セットでもダメです。他の男は見ないで下さい」

他の男って……。

貴方の仲間で幼友達じゃないんですか……？

——どうやら勇者様は思いのほか嫉妬深いらしいです。

空気は読めますが、返事は玉虫色です

グリード様の嫉妬なんだかよく判らない妙な圧力のおかげで私はリュファス皇子やルイーゼ姫様を見ることができなくなりました。もちろん、それに対する王様たちの反応も。

ですが、勇者物語の主役が目の前にこうして私の手を握ってジッと見下ろしている間にだって、物語は進んでいくものなのです。

「まことのリュファス皇子なら、反対する理由がない。いや、もし王族でないとしても、娘が嫁ぎたいと望んだ者のところに送り出してやるのが親というものだ」

王様がその言葉が広間に響き渡りました。

その言葉に呼応するように、王妃様の優しい言葉が続きます。

「そうですね。姫。貴女を救い出してくださった方々ですもの。たとえ、皇子でもないただの魔法使いであっても、わたしは貴女の恋を応援しますよ。リュファス様。娘をどうかよろしくお願い致します」

「お母様、お父様……」

「国王陛下、王妃陛下。ありがとうございます」

この様子だと姫様と魔法使いリュファス様の結婚は許されるようです。

さすがに賢王、賢妃と呼ばれる国王夫妻。懐がデカイです。

……まあ、本当にただの一介の魔法使いだったなら、こうして諸手をあげて賛成したかどうかはちょっと怪しい気もしますが、そこはそれ、こんな喜ばしいことにケチはつけずに素直に喜びたいと思います。

広間のあちこちらから「姫様おめでとうございます」「お幸せに」

という言葉が姫様たちに掛けられました。

歓声や拍手まであがっています。

すっかり広間中、リユファス皇子様&ルイーゼ姫様の結婚大歓迎ムードです。

ほんの少し前の戸惑いや驚愕の雰囲気は一体なんだったのかという感じで、今はこの王道恋愛ストーリーがまさに成るべくして成ったような、それを待ち望んでいたかのような晴れやかで和やかな空気が流れております。

みんな切り替えが早いです。さすが城勤めをしているだけありますね！

かく言う私もグリード様に手を取られていなければ、率先して拍手をしていたと思います。

だって、私は侍女暦六年ですから。
空気を読むのは得意なのです。

たけど……私の目の前にいらっしゃる方は空気は読まないみたいです。いえ、もしかして読めてもスルーですか？

食う気嫁！

あ、間違えました——空気読め！

私はそう念じました。だけど、魔力ゼロの私の念は勇者様には届かなかったようです……。

背後では幼馴染でもある仲間——しかも自国の皇子——が伴侶を得ようとしているのに、ちらりとも視線を向けません、勇者様。

ずっと私の顔をガン見です。穴が開きそうです。

平凡モブ顔を見ても何の面白みもないと思うのですが……毛穴の

数でも数えているのでしょうか？

ええ、それなら私の顔を舐めるように見ている理由として納得いきますよ！

それ以外納得しませんから！

——と、いささか私が現実逃避しているのは、はっきり言って恐いからです。

私が視線をリュファス様（と姫様）に向けなくなってから、グリード様の私を見つめる目に甘さが戻ってきたのですが、さっきの妙に昏い炎を宿した瞳を見てしまった身としては、こう申しては何ですがそれすらも「恐えええ！」という感じです。

蛇に睨まれたカエルのような心境です。

なのに、ああ、なんと言うことでしよう。

空気を読めてしまう自分のスキルが初めて煩わしく思えてきました。

姫様とリュファス様の王道展開を堪能した人々の関心が再び私と勇者様を集ってきているのが分かるのです！

『そつえばこの二人はどうなった？』

みたいな感じで！

勇者様以外見てなくても空気ですれを感じ取れます。

王道展開を見てめでたい雰囲気に触れちゃった人々の頭の中で、こつちも王道であるべきだ、みたいな期待する空気が！

きつと皆様の頭の中では『姫を心配する心優しい侍女と、その彼女の為に魔王を倒して姫を救い出した勇者の恋物語』みたいな話が

できちゃっているのでしょうか。

なんてお花畑な……いえいえ、ベタな——王道ではありませんが——展開でしょう。

その“心優しい侍女”が自分でなければきつと今頃私の頭の中でお花畑が咲いていたかもしれませんね。

心の中でツツコミ入れつつ、空気を読んで周りに迎合していたことでしょう。

でもこんな空気は読みたくありませんでした！

あああ、私がまだ返事をしてないことに気付いて『よもや断るわけないよね？ 勇者の求婚を』『まさかね』『勇者様を公衆の面前でフルわけないさ』みたいな視線がチクチクと！

そして、そんな空気を王様までもが読んだのか、
「そういえば、勇者殿の方はどうなったのだ？」
なんて事を玉座で言ってくれちゃったではありませんか！

広間にいる人たちのほぼ全員の視線が私と勇者様に向くのが分かりました。

ピンチです。

私は勇者様に手を取られたまま、冷や汗がダラダラと顔と背中を流れていくのを感じました。

間違いなく生まれてから今が一番の危機です。窮地です。

私の本音としてはこの求婚を綺麗さっぱりお断りしたい。

けどそうすると私は国中の総スカンを食らうでしょう。これは間違いなしです。

だって、私が勇者様の妻に納まれば、この国は勇者様と確かなつながりができたことになります。

神と精霊たちの祝福を受け、魔族を倒す力を持った勇者様とのつながりは、他国に対して政治的にも有利になるでしょう。

だからこそ、はじめ王様や大臣の方々もルイーゼ様を勇者様に嫁がせようと思っていたのです。

勇者様と縁続きになることは国益をもたらすのですから、勇者様が貴族でもなんでもない一般庶民出であつても問題ではないのです。まあ、結局は姫さまはエリューシオン公国の王族と結ばれることが決定したので、別の方面から国益をもたらしたことになりますがね。

でも、それは置いておいても、勇者様とも依然としてつながりが欲しいところなのは変わっていません。

そんな勇者様をフツたなんてことになったら……。

想像するだけでお先真っ暗な気分になります。

だけど、勇者の妻になる自分を想像しても、お先真っ暗な気分になるのはどうしてでしょうか……。

困りました。最大限に困りました。

断れません。

でも勇者様の求婚は受けたくありません。

「アーリア」

私を見つめる瞳の甘さの中に一瞬だけ焰を燦らせた勇者様がいきなり私の名前をその唇に乗せました。

その声は大きくはありません。ですが、なぜか広間中にその涼やかな声が響き渡ったように感じられました。

「改めて言わせて下さい。貴女を愛しています。どうか私の妻にな

って下さい」

……どうして今になって空気を読むのですか、グリード様……。

注目的になっっている中で再度求婚するとは……。

あれですね、絶対わざとですね！

狙って言ってますよね、私が断れないように！

前にも増して汗がダラダラ出てまいりました。

そんな折、縫いとめられたように勇者様から視線を外すことができないうる私の視界の端で、勇者様の仲間たちが彼の背後から一生懸命——というより必死の形相で私に向かって合掌したり目配せしたり、念を飛ばしているのが見えました。

あの冷静そうなりユファス様ですら。

残念ながら魔力ゼロの私には、彼らが伝えようとしていることを明確にすることは出来ません。

ですが——どうしてでしょうか……。

私にはなぜか「断らないでくれ！ この国が滅びてもいいのか！」と懇願しているように感じられました。

……そうです。空気は読めるのです、私。

何だか分かりませんが、滅亡フラグまで立っている模様です。

困りました。ますます断れないじゃないですか！

私はグルグル考えました。

その時、ふっと、頭の中で我がミルフォード家の家訓を思い出したのです。

もうこれに従うしかありません！

私はすうつと息を吸って口を開きました。

「勇者様……」

周りの人たちが固唾を飲んで私の返事を待っているのが感じられました。

勇者様一行はなぜか神に祈っているようです。

グリード様……一体どういった方なのでしょう。疑惑が芽生えました。

しかし今はそんなことを考えている場合ではありません。

疑惑は頭の片隅に置いておいて、私は意識を目の前の勇者様に戻して恐る恐る返事を口にしました。

「……私は勇者様のことをよく知りません。グリード様も私の事をご存じないと思います。ですから……返事はお互いのことをよく知ってからということでもいいでしょうか？」

これぞ、ザ・先送り！

ミルフォード子爵家の家訓の一つ『難しい問題が起きたら先送りにするべし！』です。

言った後、私はややがっかりな空気が蔓延する中、じっと勇者様の反応を窺いました。

勇者様は感情を窺い知ることのできない眼差しで私をじっと見下ろしていましたが——何を思ったのか、不意にふわりと笑みを浮かべたのです。

とたんに私の背後にいる侍女仲間が「キャー！」と黄色い声を上げました。

美形の笑顔はもはや兵器ですね。

私も一瞬虚を衝かれたような気がしましたよ。

そんな喧騒の中、勇者様は華やかな笑みを浮かべながら頭を下げ
て私の手にキスを落としました。

またもや黄色い声があがります。

「そうですね。私も貴女のことを知りたいし、私のことを知っても
らいたいです」

手に軽く唇を触れながらグリード様は言いました。

金色の輝く前髪の間から覗くその海色の瞳で、私を射抜きながら
――。

その目と肌に触れる感触にゾワツと背中に悪寒が走ったのは、気
のせいだと思いたい私でした。

姫様と侍女

広間でなけなしのHPを大幅に削られた私は、ぐったりと疲れた様子でルイーゼ姫様と姫様の部屋に戻ってきました。

「やっぱり自分の部屋は落ち着くわね」

見慣れたはずの自分の部屋を見回して、姫様が微笑まれます。

その様子に、私はハッと背筋を伸ばしました。

そうです。姫様はずっと魔王に囚われの身になっていたのです。ずっと恐ろしい思いをしていたのです。

ここで過ごす日常が恋しくて泣いたこともあったでしょう。

それなのに、侍女である私が、この城で安泰に過ごしていた私が、これしきのこと動揺している場合ではありません。

私はいつも読書をするのに使っていた椅子を感慨深げな顔で撫でている姫様に、声を掛けました。

「いつ姫様が戻られてもいいように、毎日整えていました。姫様が無事に戻ってくると信じておりましたから」

姫様は椅子から視線を私に向けて、にっこり笑いました。

その笑みはまるで後光を差しているかのように、華やかで美しいものです。見慣れている私ですら、一瞬心を奪われるくらいです。

「ありがとうございます。アリア。戻ってこられて嬉しいわ。わたしも攫われて初めてここでの何気ない日常がどんなにすばらしいものだったかに気付かされたの。お父様やお母様、兄姉たち、大臣や、あなたたちみんなが何事もなく過ごせることこそ、大切な宝物なのだよ」

「姫様……」

私は何だか姫様が急に大人になったような気がしました。攫われる前はどこか少し幼い感じを残していた姫様。それが今で

は立派な淑女です。

過酷な環境に追い込まれて、苦勞したせいでしょうか。
いえ、きつとリュファス様に恋をしたことも作用しているの
でしょうね。

姫様は椅子に腰を下ろして、しばらくその感触を堪能した後、不
意に私を見て笑いました。

「わたくしが囚われている間、心が折れずにすんだのはあなたのお
かげでもあるのよ、アーリア」

「はい？」

「以前、魔王についての話題が出たとき、あなた、力説していたじ
やないの。『魔王は美形に違いありません！それが王道つてもん
です！お約束です！』って」

「あ、はは」

私は乾いた笑いを浮かべました。

確かに言いました。だって、それがお約束だったのですもの。

だけど、実際見た魔王は――。

短く刈り上げた黒髪に、魔族特有の赤い目。

筋肉隆々な立派な体躯の――マッチョな中年の大男、でした…

…。

魔力の高さが実力の高さである魔族なのに、なぜマッチョである
必要が！？

――と、いろいろツツコミ所満載でした。ええ。

「……残念な容貌でしたね」

私がつぶやくと、姫様は楽しげに笑いました。

「ええ、そうね！でも魔王に嫁になれと脅されるたびに、恐怖に
心が竦むたびに、どうしてだかあなたのあの時の言葉を思い出して

不思議と笑えてきて怖さが薄れたの。あの言葉がなければ恐怖で心が壊れていたかもしれないわ。わたくしがこうして無事にここにいられるのは、勇者様たちとあなたのおかげよ」

「そ、そんな恐れ多いです……」

何しろ魔王が若くも美形でもないと知った今では、あれは黒歴史のうちの一つに入ると私は思っているのですから……。

私は気を取り直して言いました。

「私は何もしてません。姫様が無事だったのは、勇者様たちのおかげです。感謝してもしきれません」

……あの求婚だけはいただけませんが。

そう心でつぶやいたのが聞こえたのでしょうか。急に姫様が興味深げな顔になって私に尋ねてきました。

「グリード様のことはどうするの、アーリア？」

私はうつと内心呻きました。

親しくしていただいている姫様には本当の気持ちをぶちまけてしまいたいのですが、部屋の外には警備の兵士や、隣の控えの間には別の侍女たちが待機しているこの状況では迂闊なことは言えません。

誰が聞いているか分かりませんからね。

私が嫌がっていることを王様や大臣たちに知られたら、王様命令で即生贄……いえいえ、結婚させられてしまうかもしれません。

そんな危険は冒せませんとも！

私はゴホンと咳をすると答えました。

「ええと、私もグリード様もお互いの事をよく知らないので、返事

はそれからにしたいかと思っております……」

ええ、そうですね。広間で勇者様に言った答えとまったく同じです。

もっ心の中以外ではこの対外的な返答以外口にしないと決めたのです！

だから、やや声の調子が平坦になってしまっているのは許していただきたい！

「でも少なくとも、グリード様はあなたの事をよく知っているわよ？」

姫様が不思議そうに首をかしげて言いました。

口元に手を当てるその仕草は大変可愛らしいです。

——ですが、次に姫様が言った言葉は私を恐怖のどん底に落しました。

「わたくしと話すことはあなたの話題ばかりでしたもの。名前はもちろん、出身地、年齢、家族構成、スリーサイズ、城に勤めだした日付まで知っていたわよ、あの方」

「——は？」

「だから、わたくしはグリード様たちが救出の旅に出る前にあなたがそんな情報を教えるくらいに親しくなったのかとばかり……」

「え、ええ？ と、とんでもありません！」

私は激しく首を横に振りました。

「私が話したことは、姫様を助けてくださいってその一言だけです！ 名前すら名乗っていませんよ！？」

なのに、名前はともかく出身地、家族構成。おまけに——スリーサイズだ！？

とこで、いつの間にそんな情報を……？

ゆ、勇者様、恐えええええ！！！！

私は心の中で大絶叫です。

ぞわぞわつとしたものが背筋を這い上がってきています。
ひいひい。

「……え、えーと、ほら、アレではなくて？ 勇者様が持っているという相手のレベルとスキルが判るというアレ」

姫様がやや青ざめながらフォローらしきことを言いました。

が、私は同じく青ざめながら、その言葉は否定させていただきました。

「『分析』のスキルですか？ でもあれって、敵や準主役達のステータスを見る能力であって、モブキャラのステータスを開けるなんて話は聞いたことありません」

村人とか侍女とか旅人とか、敵でもない仲間にもならないどうでもいいキャラは、ステータス見れても仕方ないですからね！

——それに。

仮に私のステータスが見れたとしても、さすがにスリーサイズは載ってないハズです！

ましてや、城に勤め始めた日なんて、私自身も覚えてないものを――。

あああ、もう一度言います。言わせて下さい。

——勇者様、恐ええええええ！

「……どうしてグリード様はあなたのことをそんなによくご存知な

のかしら……」

「……私の方が知りたいです……」

主従二人して青ざめた顔を見合わせながら、ここにはいない人物に思いを馳せて、背筋を凍らせる私と姫様でした。

勇者様は歩く天災？（前書き）

ラスボス戦があっけない……それを人はクソゲーと言う。

勇者様は歩く天災？

姫様が無事に帰還したというに、背筋が寒くなるような話で場はすっかり盛り下がっております。

私たち勇者様の話をしていたのですよね？

そして勇者様は私たちの最後の希望ですよね？

魔族の脅威から私たちを救ってくれるはずの、神に選ばれた人ですよね？

なのにどうしてこんなに寒々しい思いをするのでしょうか。

スリーサイズとか……聞かなかったことにしたい！

……そうです。聞かなかったことにするのです。

ミルフォード家の家訓にもあるじゃないですか！

——都合の悪いことは聞かなかったことにしろ、と！

家訓ですから、これは守らないといけません。是非そうせねば！

というわけで私は何も聞・き・ま・せ・ん・で・し・た。

無理矢理私は自分に言い聞かせると、話を軌道修正するべく鬱蒼とした思いを振り払って笑顔を作りました。

「姫様、私、リュファス皇子のことが聞きたいです。どんな風に出会われたのですか？」

とたんに姫様の顔がうつすらと赤に染まりました。

その頬を染める様子といったら、もう！

白い滑らかな頬をうつすら桃色に染めて、そこに節目がちになっ

たその緑色の瞳を覆い隠す長い睫毛が影を作っているのですよ。

私が男だったらこれで落ちているくらいの可憐さです。

まったく、この姫様としばらく行動を共にして私に求婚する勇者様の気がしれませんね。

姫様は頬を染めてモジモジしながら言いました。

「魔王城の高い塔に囚われていたわたくしを助けに来てくださったのが、リュファス様なのです」

……あ、あれ？

勇者様ではないのですか？

王道では囚われの塔に姫様を救いに現れるのは、勇者様ですよ？

腑に落ちない顔をする私に気付かず、姫様をうつとりとした顔で続けました。

「リュファス様は『私たちが来たからにはもう大丈夫です』と、魔王が気付いていつやってくるか恐怖に怯えるわたくしをやさしく気遣ってくださったの。足が震えて満足に歩けないわたくしを背負って塔から下ろしてくださったのもリュファス様で……。あ、あと、塔を出た直後に魔族に襲われた時に、わたくしを背中に庇ってくださったのもリュファス様なのよ。『絶対貴女を守ります。傷一つ付けさせません』って。とても素敵だったわ。それに、それに」

わあ、姫様が惚気てます。

このまま延々とリュファス様との思い出を語ってくれそうです。ですが、私はリュファス様が姫様を助けに行った時、肝心の勇者様たちがどこに行っていたのか確認したくて仕方ありません。

帰りの道中、偶然寄った街で祭りがあり、興味深げに見ていた姫

様に気付いたリュファス様が祭りに連れ出してくれた話が終わったところでようやく口を挟めた私は、ともすればリュファス様との惚気話になる姫様を軌道修正しつつ、ようやく救出劇の顛末を聞き出すことに成功しました。

それによると、どうやら魔王の城に入った勇者様一行は二手に分かれたようです。

リュファス様と女盗賊と女戦士のルイーゼ姫救出部隊と、勇者様と神官とエルフの派手に動いて敵の注意を引きつける部隊とに。

姫様の惚気の言葉ではリュファス様だけが姫様を助けに来たように受け取れてしまいますけど、実際は他に二人もいたわけです。戦闘時背中に庇ってくれたのはリュファス様だけではないらしいです。

……言葉の使用方法是適切にお願いしたいのですが……無理そうですね。今現在の姫様の頭の中の80%はリュファス様で埋まっているみたいですから。

私は頑張つて残りの20%から詳しい話を聞きだすことにしましょう。

それで、姫様が囚われていた魔王城の高い塔——ここだけは王道ですね。でかした、中年マッチョ魔王！——から脱出した姫様とリュファス様たちの一行は、それに気付き襲ってくる雑魚魔族を蹴散らしつつ城から脱走することに成功しました。

城から少し離れた森の入り口までやってきた時には、もう彼らの後を追ってくる魔族の姿はなかったそうです。

なんでも途中で何かの異変を感じたかのように魔族たちが慌てて姿を消していったとか。

「グリードたちがうまくやったようだな」

ちょうど横にいた女戦士がそうつぶやいたのが姫様の耳に入ったそうです。

リュファス様の勇姿にポウツとなっていた姫様は、そこで初めてまだ勇者様たちが城に残っていることを思い出しました。（遅い！遅いです、姫様！）

遅ればせながら姫様が彼らの心配をしていると、リュファス様と女盗賊が実に爽やかな笑顔を浮かべて言ったそうです。

「彼らなら大丈夫です。グリードがいますから」

「そうそう。何しろグリードは“歩く天災”なんだから、心配することナイナイ」

その言葉に女戦士がうんうんと頷いていたそうです。

……ちよつとお待ち下さい。

歩く天災って何ですか？ 話の流れからいって勇者様のことですよね？

そうツツコミ入れたかった私ですが、あいにくと突っ込む相手がありません。

姫様もここでもう少し突っ込んで話を聞いてくださっていたらよかったのですが、捕らわれの身からようやく解放されたばかりですからね……。くう。

しかも、リュファス様にポーツとなって、勇者様に興味なしなご様子だったようですしね。くう。

諦めて話を元に戻しますと――彼らから少し遅れて勇者様たちが城から出てきたのだそうです。

と、同時にどういうわけか、轟音を立てて魔王の巨大な城が崩れていきます。まるで何かの支えを失ったかのように。

仰天する姫様を尻目に、グリード様たちは驚きもしないでその崩れる城を背後に、森の入り口でリュファス様たちと合流。

「魔王は？」

「討った。あっけなかったな」

そのリユファス様とグリード様の会話で、姫様は魔王が勇者様の手によって討伐されたことを知ったのでした。

めでたしめでたし——って。

……ちよつとお待ち下さい。

三人で魔王を倒しちゃったのですか？

……確かに、魔王城の崩壊はそれらしい王道なエンディングです。

——が。

ツツコミ入れていますか？

ラスボス戦は総力戦でしょうおお！？

合流して全員集合して、力を合わせて巨大な敵をやっつけるんでしょう！？

なのに、どうして二手に分かれて合流する前にあっさり殺るんですか！

六人パーティーの意味ないじゃないですかあ——！

ってか、それ、本当に魔王なのですか？

あんな中年マッチョが二人もいたら嫌ですが、魔王の影だったりとか、中盤のラスボス——ということもアリですよ？

フェイクで、実は生きていたなんてオチなのは……。

でも仮にフェイクだとしても、ラスボスその一には変わりないから強いハズです。

その魔王（仮）をあっけなかったと称するグリード様。

……本当にどういった方なのでしょう。

知りたいような、知らない方がいいような……。

女盗賊さんが言った『歩く天災』の意味も気になります。そして広間での彼らの態度も気になります。が、同時に本能が警鐘を鳴らしてもいるのです。関わってはならない、と。

うーん、どうしたらいいやら……。

やや悩んだ末、魔王討伐の顛末を話し終えた姫様が再びリュファス様との惚気話に戻ろうとする前に、私は尋ねました。

「あ、あのグリード様は姫様から見てどんな方なのでしょう？
帰りの道中は一緒に過ごされたのですよね？」

……知りたい気持ちには勝てませんでした。

嫌な予感しか感じられません

「グリード様？ うーん、そうねえ……」

頬に手を当てて、なぜか難しい顔をする姫様。

そんなに答えづらいことを聞いたのでしょうか、私は。

ちなみに、私の少ない接触の印象だと、勇者様は――

無駄に美形。

キラキラオーラを背負っている。

微笑を無駄打ちする。

だけど妙に嫉妬深い。

そして得体の知れなさMAX。

――という感じなんですけど。

ところが！

「わたくしも詳しく語れるほど、あの方を知っているわけではないのですけど」

と前置きしつつ姫様が語ったグリード様は、まるで違った人――
――でした。

常に冷静。殆ど笑顔なんて見せない。

表情がないわけじゃないけど、無表情に近い。

言葉は丁寧だけど、淡々としている。

女性に騒がれても見向きもしない。

もちろん、微笑むことも皆無だ――ただ一つのことを除いては。

私は思わずポカーンと口を開けてしまいました。

……ええと、それは誰ですか？

勇者様ですか？ グリード様ですか？

ですが、広間で私の手を握ったグリード様は常に微笑んでおりましたよ？

笑顔の無駄打ちしてましたよ？

でも言われてみれば、最初にこの城に来たときの勇者様はあまり表情を変えたりしなかったような気がします。

私はそれを緊張によるものだと勝手に解釈しておりました。

だって、城に到着したばかりの勇者様に思わず「姫様を助けて下さい！」って縋った時に、あの方は笑顔を浮かべて言ったのです。

「大丈夫です。貴女の姫君は必ず助けますから」
って。

確かにその時、グリード様は笑っていました。

それをこの目ではっちりと拝見させていただきましたとも。

「だからそれよ！」

と私の主張を聞いていた姫様が急に大きな声を出しました。

「あの方が唯一笑顔を見せるのは、あなたの話題が出た時だけなの！」

——はい？

「少なくともわたくしが一緒にいた間はそうだったわ。グリード様と話をする機会はそれほど多くはなかったけど、貴女の話が出た時だけやさしい笑顔を浮かべるの。いつもは無表情に近いのに。わたくしもそのギャップにビックリしたけど、仲間のリュファス様たちなんか、グリード様が笑顔になるたびに大騒ぎよ。気味悪そうに遠

巻きにしたり、神官のレナス様は『女神よ。我らを護りたまえ』なんて祈りを始めてしまうし。エルフのルファーガ様なんか青ざめて『天変地異の前触れか』なんて言うの。わたしくの大切な侍女のことでグリード様が笑顔になるだけでこの反応は大袈裟だなとちょっと呆れたものよ」

——あの、それって……………。

「少なくともわたくしはグリード様のその態度が好ましく思えたわ。あなたのことだけ感情を露にするってことは本気で想っている証拠ですもの」

「そ、そうですか」

につこり笑う姫様に、私は乾いた笑みを浮かべることしか出来ませんでした。

……姫様、もう少し疑問に思っして下さい。

普段無口でクールな彼が、好きな女性の前でだけホットでシャイになるのを、友人達が大騒ぎで冷やかしているのとは訳が違うんですよ。

どう考えても皆様の態度は何かを恐れているじゃないですか！

私のことで笑顔になる勇者様に怯える仲間たち——。

……どうしましょう。嫌な予感しか感じられません。

それに勇者様に特別に思われていることに対して、ほんつつの一欠けらも嬉しい気持が湧いてきません。

むしろ恐いです。恐怖です。

私は知りたいと思ったことを後悔しました。

知れば知るほど……何でしょうか、何かの深みに嵌っていく気がして仕方ありません。

もうこれ以上は知らないほうがいいのかも……。

そう考えた時でした。

私のそんな防衛本能的な考えのまるで真逆をいく台詞を姫様が仰ったのは。

「もっと詳しくグリード様のことを知りたいなら、リュファス様がミリー様かレナス様に尋ねるといいわ。彼らはグリード様の幼友達らしいから」

ちなみにミリー様は女盗賊の名前で、レナス様は神官の方です。

「いえ、それは……」

「お呼びにより参上したわ！」

遠慮します。そう続けるはずだった私の言葉は不意に掛けられた第三者の台詞によって遮られました。

ぎょっとして振り返った私たちの目の前に、女性としてはめずらしく短髪の燃えるような赤い髪と、鮮やかな緑色の瞳を持つ美人さんが満面の笑みをたたえて立っておりました。

勇者様の仲間の一人である“職業：女盗賊”のミリー様です。

い、いつの間に、この部屋に！？

「へ、部屋の外には護衛の兵士が立っていて……」

私は呆然とつぶやきました。

彼らは訪問者があれば、扉の向こうでそれを知らせてくれるはず

です。決していきなり人を中に入れることはありません。
それに、私たちの耳には扉を開ける音なんて全く聞こえてなかったのです。

「ふふふ。あたしの前に開かない扉はないのよ」

ミリー様は不敵に笑いました。

そういえばこの方は女盗賊でした。

女盗賊という職業名ではありますが、本当の盗賊さんではありません。

ギルド（職業組合）に所属する特殊技能を持った方なのです。

察するところによると、彼女は『扉の解除』のスキルを持った方なのでしょう。

この方の手にかかれば、どんな頑丈な鍵を付けられた扉だろうが、魔法が掛かった宝箱だろうが金庫だろうがたちまちに開けることができるのです。

そして、兵士に咎められずに部屋に入れたのは、多分『ステルス』（別名：隠密）のスキルも持っているからでしょう。

「まあ、実はアーリアちゃんに会いに部屋まで行っただけで、姫様のところだと言われてね。それでここまで来たんだけど、姫様の部屋には兵士が立っててさ、いちいち面倒なので能力使って入ってきちゃった」

テへと舌を出す様は美しさの中に可愛さがありました。

侍女としては姫様の部屋に許可なく入り込んだ人間を咎めなければなりません、悪気のなさもあいまって何でも許せてしまいそうです。

美人は得ですね。私がああ『テヘ』をやっても誰も何も許してくれなさそうですもの。

——つて、私に会いにとか言いましたか、今？

……どうしてでしょうか。またまた悪い予感しかしないのですが。

「わ、私に何か御用でも？」

99%は勇者様がらみなんだろうなと思いつつ、尋ねた私にミリー様はにっこり笑って言いました。

「うん。だって、ほら、長い付き合いになるんだから、仲良くなっておきたいじゃない？」

……ツツコミ入れていいでしょうか。

長い付き合いになると、断定ですか？

彼らの中で私が求婚を受けることはもう決まっている事なのか？

断るという選択肢はないのですか？

……いえ、実際問題として断る余地はないかもしれませんが。

「——それにさ」

不意にミリー様は笑顔を消して、真剣な眼差しで私を見つめました。

「話しておきたかったことがあるの。今まさに二人が話していたこと——グリードのことで。アーリアにはグリードの取り扱い方を間違っほしくないから」

取り扱い方？

取り扱い方とは何でしょうか？

「何しろあいつは歩く天災……いや、最終兵器のようなものだから」

⋮
⋮
⋮
。

⋮
⋮
⋮
最終兵器の取り扱い方です。

精霊と勇者様と天災（前書き）

説明が多いです。

精霊と勇者様と天災

勇者様は最終兵器だそうです。

——つて、そう簡単に『はい。そうですか』と納得するほどおめでたくはありません。

最終兵器って一体ナニでしょうか。

勇者様っていう対魔族に対する切り札の存在………というのを指しているのではないようです。

……何かヤバイ響きがあるのは気のせいでしょうか？

「……えつと、ミリー様？ 最終兵器とはどういうことですか？」

私は後で絶対聞かなければよかったと後悔するのは分かっているが、聞かすにはいられませんでした。

「んー、そうだね……」

ミリー様は頬をぽりぽりと掻きながらそう言つと、軽くため息をつきます。それはどう話したらいいのか考えあぐねているようにも見えました。

でも「順を追って話すほうがいいか」と独り言のように言つと、私と姫様にいきなりこう言いました。

「二人はさ、グリードが歴代勇者の中で最強だといわれてるのは知ってる？」

私は唐突に質問されたことに少し驚きながらも頷きました。

そうです。グリード様は女神の神託を受けた歴代の勇者の中でもっとも強い力を持っていると言われているのです。

現にグリード様の前までの勇者様たちは光の女神であるレフェリ

ア様の神託と加護を受けた後、授けられた力を使いこなすためにしばらくの間修行をしなければならなかったそうです。

ですが、グリード様は修行もなしにあっさり女神様の力を使いこなし、雑魚ではない幹部クラスの魔族を初戦にして討伐してしまうくらいの実力の持ち主。

ですから歴代の勇者の中で最強と噂されるのも無理はありません。

「今までの勇者は女神の宣託と加護を受けてから力を使っていたけど、グリードは違う。もう根本からして違うんだよ。何しろ生まれた時から全属性の精霊の加護を受けていたんだから」

「全精霊の加護、ですか？」

私は信じられない思いで目を見開きました。

世界には水・土・風・火に光と闇の六つの属性の精霊が存在しています。

光の女神レフェリアと闇の神アーティラードが新しい世界を作ろうとした時に最初に生まれたのが、この六種族の精霊王たちで。彼らは光の女神と闇の神と共にその力を使って世界を創造したのだそうです。

つまり、精霊王は神様たちの眷属であり、この世界を構成する存在なのです。

根幹を成す力でもあるので、この六種の力は世界を遍く流れなければならぬのですが、さすがの精霊王たちにも世界全域で力を循環させるのは荷が重かったようです。

彼らは自分たちの力の欠片から、眷属を誕生させて世界に配置しました。

それが精霊です。

その存在を感じ取れない凡人の私たちにとっては精霊＝自然の力みたいなものとして捉えています。

精霊たちは非常に気難しくてめったに人前には姿を現しません。姿を見たり声を聞いたりすることができるのは、神官のみ。

たまに気に入った人間に加護を与えることはあるのですが、それも稀有なことだと聞いてます。

でも例外が勇者様です。

勇者様は女神に選ばれた人間。その加護と力を受けた勇者様には精霊たちも友好的で、例外なく『精霊の加護持ち』になるのですが——それでも一つの属性が、せいぜい二つの属性がいいところ。

それですら奇跡なのです。いかに精霊に加護を受けるのが難しいか分かるというものです。

なのに、グリード様は——全属性ですよ。

それも女神様の神託を受ける前から。

……はつきり言いましょう。その時点で規格外です。反則です。

ちなみに二百年前に存在した先代勇者様は火の精霊の加護持ちだったそうです。

歴代の勇者様に加護を与える精霊は火か光の属性が殆どで、まれに風に加護があったそうですが、かつて例のない闇と土と水の属性の加護も持つグリード様がどんなに人外……いえいえ規格外の勇者様がお分かりいただけるかと思います。

「すごいんですね、グリード様は」

隣で姫様が感嘆の声を上げます。

「グリード自身は勇者の宣託を受けるまで、精霊の力はほとんど使わなかったけどね。まあ、使う必要がなかったというか何と云うか

……」

「おや、いきなりミリー様の語尾が弱くなりました。しかも視線を外してます！」

「ハキハキしているミリー様がこのように言いよどむなんて。」

「……悪い予感がバツチリです。」

そして視線をよそに向けたまま、ミリー様は言葉を続けました。

「精霊たちはさ、その、グリードを好きすぎなんだよね。だから暴走するというか、本人の意思に反して勝手に力を使うというか」

「わあ、何かとんでもない言葉を耳にしましたよ。」

「暴走とか、意思に反して勝手に力を使うとか！」

「……何となく『歩く天災』と言った意味が分かってきた気がします。」

「言いにくそうに話すミリー様の話を要約しますと――」。

グリード様が幼少の頃からグリード様の役に立ちたくて仕方ない精霊たちが、彼の感情に合わせて様々な力を行使していたそうです。彼が嬉しい、楽しいといった陽の感情を持つと、翌日には花が咲く季節じゃないのに、一斉に花や草木が芽吹くとか。

反対に彼が悲しいといった感情を持つと、雨が降り続いたり、嵐が来たりとか。

「だけど、その中でも最もやっかいだったのが、怒りの感情でした。」

「あれはあたしが十二歳くらいの時だったかな。あたしとレナスと、ちょうど夏の離宮に来ていたリュファスとグリードの四人で遠出をしたことがあったの。エリユーシオンの南の方にマイナウ湖といって比較的大きな湖があつてね。そこに遊びにいったのよ。で、マイ

ナウ湖の傍にはファンゼルという村があるんだけど、その村長の息子というのが絵に書いたような馬鹿息子でねえ。見栄っ張りな上に権力を笠に着る、横っ面を張り倒したくなるような男だった。で、運悪く子分を連れたその馬鹿息子と湖の辺でばったり遭遇しちゃってね。ほら、こっちは腹が立つくらい美形揃いで、しかもあたしという美少女を連れているじゃない？　それが気に入らなかつたらしくて難癖つけてきたあげくに子分どもと一緒に襲い掛かってきたのよ。もちろん、遅れを取る彼らじゃなかったけど、ほら、その当時はあたしもまだ普通の村娘だったからさ。安全なところに逃げようとしたけど、捕まって人質にされちゃったのよ。やつら、あたしを盾にして彼らの抵抗を封じようとしたわ」

絵に書いたような王道展開です。

きつとその馬鹿息子はこう言っただに違いありません。

『この女を傷つけられたくなければ、武器を捨てろ！』とか。

ミリー様を人質に取られて動くに動けないグリード様たち。彼らに襲い掛かる馬鹿息子たち。

「リュファスが魔法を使おうと詠唱を始めたけど、間に合わなくてレナスが殴られた時だったわ。グリードがぶつつり切れたのは。震えるような怒気が辺りを一瞬支配したと思ったら、背後の湖からドーンという音と共に大きな水柱が上がって、それが襲い掛かってきたの。あたしたちを避けて、馬鹿息子と子分たちだけに。木々をなぎ倒して奴らは村まで押し流されていったそうよ。だけど、それで終わりじゃなかった」

精霊たちはグリード様を傷つけようとした——実際にはグリード様はかすり傷一つ負わなかったそうですけど——村長の馬鹿息子たちを許せなかったようです。

精霊の声を聞くことができるレナス様によると、怒りは息子たち

だけじゃなくて、彼らの横暴を放置した村そのものにも向いていた
ように、湖と生活が密接に結びついている村への報復として彼らは
——湖を取り上げてしまった。

水柱が上がって、馬鹿息子たちを村へと押し流したのち、ミリー
様たちがふと気付いてみると、湖があつた場所には水一滴もない盆
地が広がっていたそうです。

「いやあ、あれにはビックリよ。水の精霊の仕業だろけど、湖がす
っかり干上がって、魚があちこちでビチビチ飛び跳ねてるんだも
の。だけど、精霊も大量の魚を殺すのは気の毒だと思つたのか、い
きなり巨大な竜巻が現れて魚を全部吸い上げてどっかに消えていつ
たわ。後に残つたのは何にもないただのクレーターよ」

アハハハとミリー様は明るく笑い声を上げましたが、私はとても
笑える心境ではありませんでした。

一瞬のうちに湖の水全てが干上がるって、どんだけ——！？

「そ、それ全て勝手に精霊たちが……？」

私の言葉にミリー様は頷きました。

「そう。グリードがやれと命じたわけじゃないわ。グリードはただ
怒っただけ、怒りを覚えて、許せないと感じただけ。その怒りを感じ
取った精霊たちが自らの意思で力を揮つたのよ」

私は目の前がクラクラツとするのを感じました。

とんでもないことを聞かされて許容範囲を超えたのでしょうか。

ええ、そうに違いありません。

私はこめかみを押えながら今聞いたことを思い返して、咀嚼して
——思わず遠い目になりました。

……ミリー様が言っていた『歩く天災』の意味が分かりました。
ええ、骨の髄までズズイっと理解しましたとも。

本人の意思も指令もないのに、その感情を察知して暴走する精霊
たち――。

まさに『天災』以外の何物でもありません！

そして同時にミリー様やレナス様、そしてリュファス様が今まで
の生活を投げ出してまでグリード様に付いてきた理由も何となく察
せられました。

そうですね、こんなの放置できませんよね。
歩く天災ですもの。

下手をすれば魔族や魔王が滅びる前に人間が滅びてしまいそうで
すよね。ハハ。

遠い目をして内心乾いた笑いを浮かべる私はこの時、すっかり失
念していたのです。

まだ話が終わりではないことを。

そう。もう一つの通り名の最終兵器のことを――。

勇者様は最終兵器

「あ、今はそういうことは殆どないのよ？ グリードも勇者になってから精霊の力を積極的に使うようになって、彼らを制御できるようになってるし」

私が遠い目をしていたせいでしょうか。怯えてると思ったミリー様は慌ててグリード様のフォローに回りました。

ですが、今更のような気が……。

「ミリー様、グリード様が普段表情があまりないのは、もしかして精霊が感情に反応して暴走しないようにするためなのですか？」

黙って聞いていた姫様が不意に言いました。その言葉にうなずくミリー様。

「それもある。普通じゃない環境で育ってきたから元々感情の乏しい男ではあったんだけど、あの湖の事件以降は本当に感情を見せなくなっただね。ほら、あいつ敬語で話すじゃない？ あれも、自分を律するためにわざと本来とは違った口調で話してるんだよね」

「わざと、ですか？」

「そうそう。リュファスみたいに皇子として育ってるならともかく、あたしやレナスやグリードはエリユーシオンの片田舎の村出身だよ？ 普段あんな言葉遣いをするほど上品なヤツはいないよ。グリードだって昔は自分のことを“俺”って言ってたし言葉遣いももっと粗野だったよ」

粗野な言葉遣いのグリード様。

……想像つきません。

なぜなら初めてこの城を訪れた時からずっと彼は丁寧な言葉遣いでしたから。

それこそ、私が姫様のことで縋りついたときも、宥める口調はともやさしくて穏やかでした。

それに、勇者様のあの容姿に粗野な言葉遣いは似合いません。

勇者様は金の髪と青とも緑ともつかない瞳をお持ちの非常に美しい方です。

男性に美しいとは失礼かもしれませんが、すっと通った鼻筋に、絶妙に配置された顔のパーツはまるで芸術品のよう。

その端正な顔立ちを縁取るのは極上の金糸。黄金色ではなくて透き通った淡い光を放つ髪がその背中を流れる様はまるで月光のようです。

これは後から聞いたことなのですが、精霊たちはグリード様のその髪がいたくお気に入り、切ろうとすると嫌がって煩いそうなんです。なので本人は長い髪が邪魔で仕方ないそうなのですが、折衷案として後ろで括っているとのこと。

そんなこととは露知らず、さらさらでツヤツヤの髪に女として何かが負けた気分になった心の狭い私がハサミを手にした途端、突然振って湧いた超局地的豪雨にさらされて全身ずぶぬれになったことはまた別のお話でございます。

それは置いておいて、そんな美しい容貌を持つ勇者様はとも田舎者には見えません。代々勇者様だけが着けることのできる伝説の銀色に輝く甲冑アイマーを着けた姿は優美かつ、気品に溢れていて、その丁寧な言葉遣いとあいまってまるでどこかの王子様のようなのです。ですから、私を含めた皆様は姫様とお似合いだと思ったのです。今だってお二人が並んだところを想像すると、頭の中にお花が咲きそうなの……。

「姫様やアーリアなんかは城で生活しているから、日常的に丁寧な言葉遣いをするだろうけど、あたしたち田舎者にとっては敬語を話すってのはそりゃ疲れることなんだわ。こう、頭の中で言葉を考え考え発する必要があるというか。でもグリードにとってはそれが感情を抑えるのにちょうどいいみたい。確かに丁寧な言葉遣いをするようになってから、精霊が勝手に力を揮うこともなくなったわ。こっちもグリードがキレそうなときは言葉遣いで判るようになったから一石二鳥だし」

「え、ええとつまり……」

「そ、キレそうになると、言葉遣いが昔の口調に戻るから、こっちも心の準備が——って、それは勇者の神託を受ける前のことだけだね」

ミリー様は陽気にアハハと笑い声を上げました。

「今は多少キレても精霊の力を制御できるから、暴走はないから安心して。存在自体は相変わらず天災みたいなものだけど、勇者の力を授かってからうまく精霊の加護の力もコントロールできるようになったみたい。以前にグリードとある領主とその娘に腹を立てたことがあったけど、その際も精霊の力をきっちり制御してたよ。だから城は、まあ、潰れたけど、けが人は一人もいなかった」

……城は潰れたけど……？

——今、何か不穏な単語を聞いた気がしますよ！

ですが、私は突っ込みません。

本能が詳細を知らないほうがいいと訴えてるんです！

なのに。

「城は潰れたとはどういうことですか？」

姫様がツツコミ入れてしまいました……。

私の聞きたくないという空気を読んで欲しかったです、姫様！

そして律儀に姫様の質問に答えるべく語り出すミリー様。

「リンガール国の端にチンケな領主がいたのよ。そいつには娘が一人いてね。性格は最悪だけど、美人は美人だったから、ある日魔族に攫われちゃったわけ。で、領主はちょうど近くを通りかかったあたしたちに救出を依頼したの。重税を取るは逆らう者を投獄するわで評判が悪い領主だったから関わり合いたくなかったんだけど、報酬がよかったからさあ、引き受けることにしたのよ」

そう。女神様に魔族の脅威を取り除くように神託と力を授かった勇者様ではありますが、無料報酬ではないのです。

物語と違って彼らだって食事はするし眠らなくてはならないのですから。

感謝の気持だけでは腹は膨れないし、寝床は確保できません。

家主が居ない間によそさまの家を家捜しして、見つけたアイテムやお金を我が物にするような泥棒行為をするわけにはいかないですしね！

だからきちんと働いた分の報酬は請求します。もちろん、わが国も姫様を救ってくださったお礼に払うことでしょ。

「領主の娘を攫った魔族はたいしたことなくて、簡単に救い出すことはできたんだけど、大変なのはそれからよ。例によって娘がグリードに熱をあげちゃってさ。グリードはいつもの無表情でスルーしまくっていたんだけど、それに業を煮やしたのか、領主の城に送り届けたとたんあの馬鹿娘は父親にグリードと結婚の約束をしたとか嘘八百並べ立てたのさ。領主は領主で娘の嘘なんてわかってるだろうに、勇者と縁続きになると得だと思ったのか、それに便乗しようとして大騒ぎ。もちろん、こっちは拒否したよ。冗談じゃないもの。」

「ただ、グリードが拒否したとたん、領主は『娘を弄んだ。責任取れ』なんて難癖つけてきたのさ。あんな馬鹿娘は助けられないで魔族にくれてやればよかったと心底後悔したね」

その当時のことを思い出したのか、顔をしかめるミリー様。

やっぱり勇者様と縁続きになりたいと思う輩は多いようです。

私はこの話を聞いて、ちょっと身につまされました。

……だって、姫様を連れて帰還された勇者様に、私たちは勝手に姫様と恋仲だと思い込んで盛り上がりすぎてしまったではないですか。

馬鹿領主の時は娘がその気になっていたから状況は違うとはいえ、彼の話を聞かないで姫様たちをくっつけようとした点では同じではないでしょうか。

まあ、その直後に勇者様が侍女Aである私に求婚するなんて、斜め上の展開になるとは思ってもよらないことでしたが。

「それでどうなりましたの？」

「馬鹿領主に『勇者に娘を弄ばれたと広められなくなったら、大人しく結婚しろ』と言われて、さすがのグリードもイラッときたらしくてね。『ウザイ』と言い放ったとたん、城が崩壊を始めたんだわ」

「……制御できてないじゃないですか」

私は思わず突っ込んでおりました。

「とっさに私たちも暴走だと思ったわ。でもそれはグリードの感情に反応した精霊の暴走ではなくて、彼の意味でやったことなの」

私のツツコミに笑って首を横に振ったミリー様はサラッと恐いことを言いました。

「城のあちこちが崩壊していく中、慌てるあたしたちや領主をよそにグリードはその場で領主が犯してきた罪を淡々と言い連ねていつ

たわ。国にだまって税金を上げて、その分を懐に入れていたとか、逆らう民を城の地下牢に投獄したり殺してきたりしたとか、気に入った娘を無理矢理攫って妾にしたとか、悪徳商人から賄賂を受け取ってそいつの犯罪を黙認したとか、そんなことを。グリードは『分析』の能力に地（土）の精霊と風の精霊の能力を組み合わせ、過去の記憶というか必要な情報を吸い上げることができるんだよね。それを知らない領主はそりゃあ、恐ろしい者でも見るような目でグリードを見てたっけ。誰も知らないはずの犯罪を見てきたかのように言い当てられたんだから。あたしたちは逆に落ち着いたわ。だってグリードが腹を立てつつ精霊を制御しているのがそれで判ったからね」

——結局城は崩壊。

だけど、けが人は誰もいなくて、城で働く人や兵士はみんな瓦礫の山と化した領主の城の前で唾然としていたそうです。城を崩壊させつつ、グリード様はその精霊の力で彼らを護ったのでした。

ちなみに、馬鹿領主や娘や、領主に加担して領民を苦しめていた連中はまとめて崩れていなかった地下牢にいつの間にか押し込められていたそうです。

生きてはいるものの、瓦礫を撤去して救い出されるまでさぞ恐怖を味わったことでしょう。

でも助け出されたものの、彼らはすぐに再び投獄されることとなりました。

グリード様が精霊を使って女神大神殿に領主の情報を届け、神殿がそれをリンガル国に伝えたからです。

もちろん、領主の地位は剥奪となり、今では新しい領主がその地を治めているそうです。

その新しい領主はまともなきちんとした方で、領民はようやく安心して生活できるようになりました。

めでたし、めでたしです。

……私の心中以外は。

城を崩壊させ、『分析』と精霊の力を使って必要な情報を吸い上げ、かつ、その崩壊から人々を怪我ひとつないように護る。

それをほぼ同時にこなした勇者様。

それはもう規格外どころか反則というか、人外の域では……？

私はいよいよ本格的にクラクラしてきて、片手で顔を覆いました。

精霊が感情を汲み取って暴走する。それは天災。

だけど、自然の力そのものである精霊の力を意思を以って使うのはそれはもうすでに天災ではありません。

それは——兵器です。

間違いなく兵器です。

……ああ、あの大広間で勇者様のお仲間の方々があそこまで必死になった理由がわかった気がしました。

たしかに勇者様の力があればこの国を崩壊させることも簡単でしょう。

さすが『歩く天災』。

さすが『最終兵器』。

——つて、あれ？

私は顔から手を離しました。

「……最終兵器？」

兵器のことは分かりましたが、“最終”が付くのはなぜでしょうか？

そう思つて問いかけると、ミリー様は事も無げに肩をすくめて仰いました。

「ああ、だって、全精霊の力を使えるってだけでも無敵なのに、勇者としての力も持つてるんだよ？ 世界最強で敵う相手いないんだよ？ そのグリードがもし暴走したらどうなるか考えてみてよ」

魔王ですらあっさり倒せるグリード様の上に行く相手はもはや神か精霊王レベル。

そのグリード様が我を忘れるくらい暴走したら……？

勇者様の暴走＝世界の崩壊、ですね！

——確かに『最終兵器』

発動したら世界が終わりますね、アハハハ。

ハハ……。

ハ……。

……。

「姫様」

私は背筋を伸ばして姫様に向き直ると、深々と頭を下げました。

「申し訳ありませんが、私、本日限りでお暇を頂きたいと思います」
「アーリアア！？」

姫様が仰天されているのに構わず私は続けました。

「今日まで大変お世話になりました。リュファス様とお幸せになる姿を拝見できないのは心苦しく思います^{わたくし}が、姫様の幸せを遠い空の下で祈ります。ああ、つきましては、私、^{わたくし}両親に挨拶をし次第、この国を出奔したいと考えております。では、支度がありますので、

「この辺で失礼します」

私はもう一度深々と頭を下げると、扉に向かって歩き出しました。
が！

「逃げようつたってそうはいかないわよ」

なんと、いつの間にかミリー様が扉の前に立ちはだかつて通せんぼです！

「あのグリードが女に惚れるなんて、女神が人類、いや、世界のために起こしてくれた奇跡に違いない！ だからアーリアにはどうあっても生贄……いえいえ、グリードのストッパーになってもらうわよ！」

「——無理です！」

最終兵器のお嫁さんとか本当、無理！
レベル1のモブ侍女にそんな大役は無理！ 絶対無理！

「無理だろうが、そんなことは大事の前の小事よ。人類の未来はアーリアの手に掛かってるんだから！」

逃・が・さ・な・い・わ・よ。

と、顔は笑っていても目が笑っていないミリー様ががっしりと私の両肩を掴みます。

逃亡失敗です。生贄一直線です。

「——ひいいい、無理ですううう！」

その日、私の絶叫が何度も姫様の部屋に響き渡ることとなりました。
——。

評価は下降線をたどる

姫様が無事に戻られた次の日。

姫様のお茶の用意をしていた私は王様に呼び出されました。

王様の呼び出し。

普段は国王陛下が一介の侍女Aである私を呼び出すことなんてほとんどありません。

この六年で片手で足りるほどです。

しかも理由は例外なく姫様に関することでした。

何しろAと称しているからお分かりの通り、私は姫様の第一侍女。最も姫様に近く仕えている人間なのです。……一番長く勤めているというだけなのですけどね。

それはともかく、今まで王様に呼び出された用件は姫様に関することのみ。

一番最近の呼び出しがアレです。勇者様に姫様救出を依頼したあの謁見の時です。

あの時は王様はもうすでに私が勇者様に取りすがって姫様の救出をお願いしていたことも知らずに、魔王に攫われた時の状況を説明させるために私を謁見の間に呼び出したのでしたっけ。

もう全部聞いていたのも関わらず、また一から私の説明を神妙に聞いてくださった勇者様には感謝したものです。

それどころか、謁見の間を出る時、わざわざ私の傍まで来て、「貴女の大事な姫君は必ず私が救出しますから。信じて待っていてください」

と言ってくださいったのです。

……思わずときめいてしまいました。

ええ。だって私も十八歳の乙女ですからね！
あの美貌でそんな事を言われて平静でいられるほど枯れてはいないのです。

——ああ、思えばあの時は勇者様への評価は上がる一方でした！

そのピークは姫様を救出されて戻ってきた時です。あの時は勇者様の前にひれ伏したい気持ちでいっぱいだったんです。さすが勇者様、素敵だと思っていたんです。

……あの時私は若かった……。
いえ、一日前のことですがね！

まさか平々凡々な私に求婚するとか、天災だったり兵器だったりとかが、王道の斜め上を突き抜けてるだなんて思ってもみなかったです。

おかげであれ以降は下降線といいますが、評価をどっちにもっていつていいやら分からない状態が続いております。

そして再び王様の呼び出しです。
姫様のことじゃない予感がぶんぶんします。昨日の今日ですからね。

……断るわけにはいきませんか……？

え？ そうですね、王様の呼び出しですものね、断れるわけないですよ……ハア。

「おお、アーリア。よく来たな。待っていたぞ」

呼ばれたのは執務室でした。

扉を開けて中に入り、お辞儀をした私の目に映ったのは、大きな窓の前に立つ国王陛下。笑顔で私を迎えます。上機嫌です。

王様が上機嫌なのは臣下としては喜ぶべき事柄なのだろうが、私にとっては嫌な予感しか抱かせない状況でしょう。

……これが姫様が無事に救出されたから上機嫌だったというのならいいのに。

いえ、もちろん、王様は娘を愛してるし可愛がっているので救出されて喜んだし安堵もしたでしょう。

でも今この場で王様が考えているのは娘が無事でよかった喜ばしいという思いだけじゃないと思います。

「椅子に座りたまえ」

と王様はナイスミドルなお顔を綻ばせて執務室に端に置かれている豪華なソファを指差しました。

王様が一介の侍女に椅子を勧める。

普通ならあり得ないことです。立つまま用件を申し渡すのが通常のことですから。

——もうこれで決定です。

私を呼び出した用件は勇者様のことに違いありません。

私は内心『イヤアア』と喚きながら、言われた通りソファに腰を下ろしました。

王様はすかさずテーブルを挟んで私の向かいの席に座り、まっすぐ私を見て口を開きました。

「さて呼び出した件は分かっているとは思いますが、勇者殿——グリード殿のことだ」

私はキターーーーー！と思いました。

「グリード殿の求婚は私も皆も、そしてそなたも驚いたことと思う。だがわが国にとっては大変名誉なことだ。リュファス殿とルイーゼのことといい、大変喜ばしい」

王様は上機嫌で言いました。

それはそうでしょうよ。ケツ。

私はいささかヤサグレ気味に思いました。

エリユーシオン公国の皇族と縁続きになるのが決定している上に、勇者様とも縁ができれば、他国に対してこの国は断然有利になりますからね。

王様としてはウハウハでしょうよ。

「返事は保留にしているようだが、国王としてはそなたに命令をしてもグリード殿の元に嫁いでほしい気持ちだ……」

王様は私の心臓がドキッとするようなことを言っ言葉を切りました。

私の顔が引きつったのは言うまでもありません。

国王命令キター！という感じです。

これが来たら逃れられません。逆らったら反逆罪ですからね。

膝の上で拳をぎゅっと握って、私は申し渡されるのを覚悟しました。

国のことを考えたら王様はそうするしかないのですから、恨んではいけません。

いけません……。ウ、ウラミタイデス……。

ところが。

「だが、グリード殿に決して無理強いはしないで欲しいと言われたのだ」

勿体ぶって溜めた拳句の王様の言葉に私はハッと顔を上げました。

グリード様……そんなことを言うてくださったんですね。

——にわかに私の中で勇者様への評価が上がりました。

「よって、そなたの気持に委ねることにした。が、わが国としては是非ともグリード殿と縁を持ちたいということくれぐれも心に留めておいて欲しい」

私の気持に委ねると言いつつ、後半は何かを強要しておりますよ、陛下……。

「それとグリード殿の求愛について、そなたの父親であるミルフォード子爵に意見を聞かないといけないと思ってな。さっそく伝令を飛ばしたのだ」

ほれ、と言わんばかりにテーブルに上等な封筒が置かれました。

その洋紙で作られた大きな封筒はすでに開封されているようです。ですが、私が気になったのは封蝋に押された印でした。

あれはまぎれもなく、我がミルフォード子爵家の紋章。

私は目を見張りました。

なぜなら——

「あまりに早すぎませんか……？」

勇者様の求婚を受けたのは昨日です。

伝令を飛ばすにもミルフォード子爵領はこの国の端のド田舎にあつて、早馬で駆けても最低片道三日はかかるでしょう。

往復で六日はかかるはずなのに、どうして父の手紙が昨日の今日でここにあるのでしょうか？

「実は王族専属の魔法使いファミールにミルフォード子爵邸まで飛んでもらったのだ」

満面の笑みを浮かべて王様は言いました。

いい仕事をしたと言わんばかりの表情です。

魔法使いは相対的に数は少ないですが、もちろんこの国にもおります。

仕事内容は城の結界の維持や、魔法がらみの事件の解決などです。その魔法使い達の中でも一番力をお持ちの方が、王家専属の魔法使いとして王様に仕えているファミール様——壮年の男性——です。

普段は王族の守護や魔法や魔族に關しての相談役をしているのですが、今回の姫様の誘拐騒動で一番の被害を受けたのは彼でした。

中年マッチョ魔王は城の結界を強引に破って侵入し、姫様にかけられたファミール様の守護の魔法を力づくでねじ伏せて姫様を攫ったのです。

さすがに腐っても魔王。マッチョでも魔王です。

そのねじ伏せられた魔法はファミール様に跳ね返ってきて、彼はダメージを受けました。数日間は無意識不明だったくらいです。

最近ようやく復活したのですが、休む間もなく城の結界の強化やなんやかで大変だと聞いています。

そんなファミール様を伝令代わりに使うとは……。

そんな無言の私の非難に気付いたのか、王様は慌てて言いました。「ファミールしかミルフォード子爵邸を知っている魔法使いはいなかったのだから、仕方なからう」

魔法使いは転移の魔法で世界中のどこへでも一瞬で飛べます。

ですが、これには欠点があつて、術者の知らない場所には行けないのです。彼らの行ったことがある場所、知っている場所、認知できる場所でしか魔方阵を展開することができません。

どうやらファミール様以外の魔法使いは、あまりにド田舎すぎてミルフォード子爵領を知らない模様。

田舎で悪かったですねえ、と思いかけて、私は問題はそれじゃないことに気付きました。

「どうしてそんなに魔法を使ってまで急ぐ必要があるのですか？
どうせ父の返事なら聞かなくてもわかっていているでしょうに」

普通に早馬の伝令でもよかったのではないのでしょうか。

勇者様たちはしばらくこの城に滞在されるのです。返事の方かっている手紙が一週間後になろうが特に問題ないはず。

そう思った私でしたが、王様の答えを聞いて仰天してしまいました。

「実はグリード殿の依頼なのだよ。そなたの親に結婚の許しを頂くために、グリード殿の書簡を届けて欲しいと頼まれてな。一刻も早いほうが望ましかろうと思って、ファミールに頼んだのだ」

……勇者様の評価が一気に下降線をたどりました。

私はまだ返事をしていないというのに、親に結婚の許しを頂くて……。

無理強いはいしないで欲しいと言った舌の根も乾かないうちに、何をやらかしているのですか、勇者様！

……アレですね、外堀を埋めようとしてますね！？

他人からは無理強いはいして欲しくないとか言うくせに、自分自身はガンガン攻めていこうっていうヤツですね？

ですが、はつきり言いましょう。

それは強要です！

なぜなら国王陛下を通じて求婚の許しを頂く書簡って言ったら、それはもはや国家公認。

『陛下も望んでいる結婚を、よもや断るなんてことはないよね、ああん？』と言っているも同様な立派な脅迫強要なのです。

たかが子爵家がどうやって断れましょう——。

ああ、とお先真つ暗な気持で私は思いました。

家出ならぬ城出して、このまま行方不明になりたい、と。

——後日。

国家権力を使って結婚の許可を貰ったのはグリード様の本意ではないことが判明しました。

グリード様は王族経由ではなくて単独で書簡を送ろうとしていたらしいのです。

ところがそれを聞きつけた宰相が、普通に求婚の許しを得ようとしたらあのミルフォード子爵なら面倒を理由に断ってしまうかも、と懸念して王様に奏上。

同様の懸念を示した王様が、ファミリー様を使ってグリード様の書簡を父に送ることに決めたのです。

グリード様個人としては普通に早馬での伝令でもよかったそうです。

……ですが、私の勇者様に対する評価は下がったままです。

私の返事がまだなのに、親に結婚の許しを得ようとしたことに変りはないから。

そして、こんなのは勇者様の私への求愛活動の数々の、ほんの序の口でしかなかったのだから。

ミルフォード子爵家

逃げ出したのはヤマヤマです。
ですが――

『逃げてても精霊が世界に遍く存在している限り、グリードには居所知られるから、多分、無駄？』

ミリー様が昨日仰った言葉が頭の中をグルグル回りました。
そんな風に断定されてしまったら、それはもう世界中のどこに言っても逃れる術はないということでしょう。

勇者様から逃れるには死ぬしかないかもしれません……。

本当は広間での出来事以来姿を見ていない勇者様が自分の勘違いに気付いて求婚を取り消してくれないかなと藁をも縋る思いで願っていたのですが。

親にまで求婚の許しを頂く書簡を送るだなんて、何かこう、グリード様の並々ならぬ決意が感じられてしまうのは気のせいでしょうか。

四方八方を壁に囲まれていくような、しかもそれが狭まっていくような、そんな感覚を覚えるのです。

勇者様は美形。

勇者様は強い。

勇者様は将来性バツチリ。

そんな勇者様に望まれる私は世界一幸運な乙女。

逃れられそうにない未来に、せめてもとそう自分に暗示をかけようと思いました。がダメなようです。

背中に冷たいものが走るのを止めることができません。

王様の執務室のソファに座って私は暗雲漂うわが身の将来のことを考えて戦々恐々としていました。

「そなたの父の返事だぞ。気にはならないのか？」

何時まで経っても、父から送られてきた書簡に手を出さない私に王様は言いました。

私は鬱々とした気分のまま、首を横に振って暗黙にその質問に答えると、我がミルフォード家の封蝋印付きのその書簡に苦々しげな視線を送って言いました。

「読まずとも返事はわかっております。『面倒なので、娘の意思にまかせます。ハハハ』といった内容でしょう？」

王様は私の言葉に苦笑しながら言いました、

「『ハハハ』はなかったが、飾り言葉と婉曲した表現を取っ払えば、まさしくそれに相違ない内容だ。……さすがあのミルフォード子爵だな」

——あのミルフォード子爵。

私は自他ともに求めるモブ中のモブで平々凡々を絵に書いたような普通の子爵令嬢です。

ですが、私の家族——特に父と兄——は多少普通ではありません。王様や他の貴族に“あの”という冠詞をつけて呼ばれるくらいには。

ミルフォード子爵家はシュワルゼ建国の折から存在する、古い家柄です。ですが、本当にただ古いだけ。

その実態は、国の南端に位置する特に産業も特産品も持たない領地を治める、田舎貴族なのです。

しかも、ずっと建国から子爵の位。浮き沈みもなければ可もなく不可もないというのを地でいつております。

そんな我が一族がなぜ“あの”付きで名前を呼ばれるか。それはすべて当主の性格によるものなのです。

面倒くさがり。事なかれ主義。

自分の趣味以外のことにはいつさい興味を示さず、『今日できることでも明日に回せ』をモットーに適当に生きる——代々の当主はそんな気質の持ち主だったのです。

家訓にも現れていますね、思いつきり。

『難しい問題が起きたら先送りにするべし！』

私が勇者様に返事をする時に思い出したアレですよ、アレ。

そんな言葉を家訓にしているくらいだから、代々の当主の性格も推して知るべしですね。

似たり寄つたりの面倒くさがりだったのでしょう。

ただ、そんな面倒くさがりでもやるときはやる当主もいて、時々には王様の覚えめでたいこともしていたようです。

隣国とのあわや戦争という場面で手柄を立てて、争いを回避したりとか。

ところが——ここが“あの”といわれる所以でしょう。褒美としてもつと上の爵位をと王様が仰ってくださいなのに、面倒だからの一言で断ってしまったのです。

きつと伯爵の爵位なんてもらったら、城での行事に頻繁に参加しなくてはならないから面倒だと思ったのでしょうかね。

やるときはやるけど、権力欲もやる気もない、毒にも薬にもならない変わり者の子爵家。そう認識された瞬間でした。

それ以来、ミルフォード子爵家は“あの”とつけられるようになったらしいです。

そんな冠詞がくっ付いているなんて、城に来て初めて知りましたよ、私は。

ええ。

『あのミルフォード子爵の令嬢？ 城勤めなんてできるの？ 面倒とかいって投げ出すのでは？』

とか言われたんですよ。考えてみれば失礼な話ですよ。

面倒くさがりなのは父と兄だけ。

母と私はごくごく普通の無個性のモブです。

どうも一族の男性にだけ例の性格が顕著に出てくるようなのです。呪いでも受けているのではないかと思うくらいに、見事に男だけが事なかれ主義。

侍女としてお城に上がって、王族専属魔法使いのファミール様と知り合いになった時、思わず調べてくれと懇願してしまったのは、今となつては懐かしくも痛い思い出です。

だって、ファミール様ってば、

『呪いはかかってない。あれは遺伝子に組み込まれた気質だろう』
と言ったのですよ。

遺伝子レベルの面倒くさがりとは……！

呪いであつたほうが何百倍もマシでした。

情けないやら馬鹿馬鹿しいやらで本気で父と兄と縁を切ることを

検討したくらいです。

だって、遠巻きに見るくらいなら話のネタとして丁度良くても家族となれば話は別。

そんな面倒くさがりと一緒の生活が楽しいわけありません。

「えー、面倒くさい」

が口癖の男どもに私がどれだけイラツとさせられたか。私のツッコミ属性は絶対あの二人のせいだと思います。

そんな面倒くさがりの父と兄が、王家から圧力受けようが私に結婚を強制するはずもなく。

面倒だから判断は本人（娘・妹）に任せるとばかりに全部を丸投げしてくるのは火を見るより明らかです。

ちなみに、勇者様が単独で申し込んだ場合『えー、勇者の親類になるなんて面倒くさそう』という理由から断っていた可能性もありますね。

今から考えると、断っていたら、ミルフォード子爵領が無事であったかどうかあやしいので、王様の判断もあながち間違っていたわけではないと思われます。

「まあ、そういうわけだから、アーリア、全てはそなたの判断にかかっているのだ。善処してくれたまえ」

「……はい……」

やはり何かを強要しているような王様の言葉を背に受けつつ、私は王様の執務室から退出しました。

なけなしのHPやMPも全て削られた気分です。

いつそのこと、王様命令で結婚を強要されたほうがマシだったかもしれません。

それなら腹も括れますから。

私はハアと大きなため息をつきながら姫様の部屋に向かいました。途中、すれ違った兵士だの侍女だの下働きだのから、好奇の目で見られたりヒソヒソ話をされたりするのが感じられて、更にため息が出ました。

どうやら昨日の一件は瞬く間に城中に広がったようです。すっかり時の人です。

まさかこんなことで私の地味生活に終止符が打たれようとは……。自分と同じような普通の人と出会って結婚して、地味に平凡な幸せを掴む予定だったのに。

予定は未定とはこういうことを言うのでしょうか……。

鬱々とした思いで姫様の部屋に向かう私を、更に衝撃が襲ったのはそれからすぐのことでした――。

姫様の部屋に入って、

「姫様、ただ今戻りました」

その声を掛ける間もなく、一枚の大きな紙を片手に姫様が私に駆け寄ったのです。

「アーリア、大変！ 『勇者タイムズ』の号外が出て、求婚のことが……アーリアのことも載っているわ！」

叫びながら、私の前にその紙を突き出す姫様。

「――はい？」

目の前にかざされた新聞のトップページを見た私は目を剥きました。

『緊急号外！

勇者グリードについて熱愛のお相手が……！？

相手はシュワルゼ国のルイーゼ姫の侍女を勤めているAさん。

当国のルイーゼ姫が魔族に攫われて我らが勇者が救出に向かう折に出会ったようだ。

見事姫を救い出した勇者は公衆の面前で彼女にプロポーズしたらしい。

いよいよ結婚間近か！？

勇者タイムズでは引き続きこの喜ばしい情報を追っていくつもりである』

記事の横にはでかでかと私らしい女性の似顔絵が載っていました。ただし、その絵は——目の部分を黒く四角く潰したものです。

平素の私だったら、ツツコミしまくりの状況でしょう。

ですが、この時の私は思考停止状態でした。

「……………」

「アーリア、魂抜けているわ。しっかりして！」

姫様の声が聞こえ、身体をガクガク揺さぶられる感覚がしました。それでにわかに抜けた魂が戻ったようです。

……………。
……………。
……………。

なんですか、これは……………？

——数瞬後、私の絶叫が姫様の部屋に響き渡りました。

ミルフォード子爵家（後書き）

『勇者タイムズ』についての説明は次回（笑）

世界と勇者様（前書き）

説明が多いです。

世界と勇者様

勇者様は過去に何人もいました。

魔族の中に魔王が誕生するたび、女神が勇者を選定するからです。

魔族は基本、単独行動を好む種族で、群れることはありません。

もともと人間の前に姿を現すのは人型の姿を取れないほどの弱い魔族ばかりだったこともあり、普段、魔族が悪さをしてもらえど甚大な被害はなかったのです。

単独行動を好むということは、数もあまり増えることもなく、絶対数で言えば人間には及びもせん。

ですから通常だと魔族はそれほど人間にとって脅威ではありませんでした。

それを一転させるのが、魔王という存在。

なぜか数百年に一度、魔族の中から強い力を持った魔王が誕生するのです。

いえ、もしかしたら力の強い者が魔王を名乗るのかもしれませんが、そのところの真実は今ひとつわかってないのですが……。

とにかく、魔王が誕生すると、状況が一転します。

魔王の号令のもと、単独でも組織だつても人間を襲うようになるのです。

群れるようになるからでしょうか、魔族の個体数も増えていきます。おまけに魔族全体の力もどうやら強くなっているようなのです。

魔王がいるいないでは、こんなにも違う種族——それが魔族なのです。

そして、魔王が誕生するたびに、女神によって選定されるのが勇者様です。

まるで対のように、魔族に魔王が起つなら、人間に勇者という存在が女神によってもたらされるのです。

そして選ばれた勇者様は行く先々で魔族を打ち破りながら、やがては魔王を討伐するか、封印するかします。
するとどうでしょう。

歴代勇者様が魔王を倒した後、不思議なことに魔族の個体数はほぼ魔王が誕生する前の水準に戻っているのです。

力のある魔族の幹部たちもあらかた勇者様が倒してしまいますから、残った魔族を束ねる存在もいません。

そして結局、もとの状態に戻っていくことになるのです。

——勇者はバランスをとろうとする世界のシステムのひとつ。

そう言った人物がいました。

先々代の勇者様の仲間である『白き賢者』こと、レン・シロサキです。

彼はこことは違う世界から偶然この世界に落ちてきたと言われている、今ではほぼ伝説化した人物です。

本当のところはわかりませんが、彼が今までこの世界にはなかった概念をもたらしたことは確かです。

システムという言葉もそのひとつ。

彼の著書『勇者というシステム』によると、システムとは“個々の要素が相互に影響しあいながら、全体として機能するまとまりや仕組みのこと”だそうです。

難しいことはよく判らないので、単純に仕組みのことだと私は理解しているのですが……。

レン・シロサキによれば、魔族は数百年に一度周期的に群れを形成する個体群であるらしい。

理由は不明ですが、種としての保存本能か、遺伝子に組み込まれたものではないかと『白き賢者』は考えていたようです。

群れは一番強い個体（魔王）を中心に形成されます。

魔王がいるから群れを形成するのか、群れが形成されるからリーダーが必要なのか、それはわかりません。

確かなのはこの時期の魔族の行動は魔王の意思によるものが多いということだけ。

それがいわゆる人間への攻撃です。

レン・シロサキが言うには、繁殖のための群れ行動でもあるのでその時期は攻撃的・凶暴化するのは致し方ない部分もあるのだとかもつとも、人間にとつては厄災以外なものでもないですが。

そして、魔族が増えるのは、人間以外にとつても脅威になるので

群れて繁殖するのは、魔族の種としての本能。

だけど、魔族は魔力が高く、その力は様々な影響を与えます。――

――主に世界そのものに。

世界は精霊の力によって生み出されたもの。

だけど、魔族が使う魔力と人が使う魔力は、精霊の力とは異なる力であるため、世界全体量の魔力が増加すると精霊の力とのバランスが保てなくなるのだそうです。

つまり、魔族が増えれば人間が滅亡の危機に晒されるだけでなく、世界のバランス自体が崩れることにも繋がるのです。

そこで世界――女神？――が生み出したシステムが勇者という存在。

世界がバランスよく回るように群れのリーダーである魔王を消滅させ、魔族の個体数を淘汰させるための仕組み。システム

だから魔王が誕生すれば、世界は勇者を誕生させる。

まさしく彼らは表裏一体であり、対になる存在と言えるでしょう。

……とまあ、『白き賢者』の言っていることが本当かどうかはわかりませんが、この世界では魔王と勇者という存在が定期的に現れるのは確かなことです。

記録に残っている勇者様は二十人。

彼らの勇姿は『勇者物語』として、広く世界中に知られています。もつとも、記録に残っていると言っている通り、おそらく記録にない大昔にもきっと勇者様はいたんだと思います。なにしろそういう世界の仕組みだそうですので。

さて『白き賢者』が残したのはシステムの概念だけではありませんせん。

他に遺伝子だの、円周率だの、三平方の定理だの、地動説だのと限らない概念を持ち込みました。どうもここよりずっと文明が進んだ世界だったらしいのです。

そして、彼が持ち込んだものの中で一番大陸中で広く知られているのは「新聞」というものでした。

彼が新聞という考えを持ち込むまで、一般の国民が情報を知るのは旅人から聞いたり、口コミだったり、王家から流布される掲示板でしか知ることが出来ませんでした。

でも、その情報が確かなのか判らなかつたし、貴族や王族からもたらされる掲示板は彼らの都合のよいように操作されていたため、国民には不評だったそうです。

そこで『白き賢者』は新聞ギルドなるものを立ち上げて、情報を記事という形で人々に広めることにしたのです。

貴族や王族と言う権力の介入のない、第三者が調べた情報誌――

「新聞」は瞬く間に大陸中に広がっていき、ギルドの支社があちこち誕生して、その地方、国に密着した新聞が作られることになりました。

ちなみに、我がシュワルゼ国にも『シュワルゼウィークリー』という歴史の長い新聞が存在します。

週に一度刊行されるその新聞は、もちろん王様の方々も定期購読していて、読み終わったあとに私にも読ませてくださるのです。娯楽の少ない城の生活の中で私の楽しみの一つでもあります。

問題の『勇者タイムズ』はレン・シロサキ本人が創刊した新聞でした。

といっても、彼が新聞ギルドを立ち上げたのは当代の勇者様が魔王を討伐した後だったので、その当時の記憶を元に書いた手記に近い期間限定の新聞だったそうです。

その新聞はもちろん好評を博し、後に刊行された『勇者物語』の当代勇者様の巻の元になったようです。

さて、『白き賢者』の『勇者タイムズ』は期間限定でしたが、それから二百年の後、再創刊されることになりました。

そう。先代勇者様の時代です。

人々は勇者様の情報を求め、新聞ギルドはそれに応える形で発行を決めました。

『勇者タイムズ』の担当の記者たちは危険を顧みずに勇者様たちに付かず離れずに取材を敢行し、大陸中に勇者様の活躍を知らせたのです。

これも大人気となったようですよ。

そして、我らが勇者グリード様の時代である今、再び『勇者タイムズ』は刊行され、記者たちはグリード様の情報を集めて走り回っている、というわけです。

かくゆう、私も『勇者タイムズ』で勇者様の年齢とか、出身地を知った口です。

——ですが。

まさか自分がその紙面を飾るとは夢にも思わなかったです。

「なんですか、これは——！！！」

私は姫様の前だというのに大絶叫してしまいました。

記事の内容もさることながら、この絵姿！

目の部分が黒く塗りつぶされているため、怪しさMAX！

しかも露出している部分——唇は何が楽しいのか弧を描いています。

何でしょうか、このスマイル絵姿は！

侍女服姿なのに、零れんばかりの笑顔だなんて、違和感はないではないですか。

私はこんな笑い方はしませんよ！……多分。

「アーリアの特徴も書かれているわよ。……茶色の髪に茶色の目。

落ち着いた容姿の持ち主で、十八歳。長く姫の侍女を勤め上げていて、嫁にするなら最適の人物かもしれない。……ですって。とりあえずはアーリアに好意的ではなくって？」

「……そうですか？」

落ち着いた容姿だなんて、平凡を婉曲した苦肉的な表現ではないでしょうか。

「でも、いつかは知られると思ったけど、思った以上に早かったわ

ね、新聞ギルド」

「……そうですね」

「きつと昨日、広間にいた誰かが新聞ギルドの記者に漏らしたに違いないわ。でないと今日すぐに号外なんて出せないでしょうから」

各新聞ギルトの支社が発行する各地の新聞とは違い、『勇者タイムズ』は大陸のどの国でも一律に発行される全国紙。

それが一斉に号外を出すとなったら、半日かそこらで準備することとは恐らく不可能。

つまり、昨日広間の出来事の情報我非常に短時間で新聞ギルドにもたらされ、慌てて準備して今日の発行にこぎつけたということになりますね。

……少し恐いことを考えてしまいました。

『勇者タイムズ』は大陸中に発行される新聞。そこに載るってことはわが国だけでなく、大陸中の国々が、人々が、勇者様の求婚を知ってしまうということです。

となると、私はますます断れなくなるのではないのでしょうか！

そして、まさかだとは思いますが、私の外堀を埋めるために、勇者様が彼の仲間たちの誰かがわざと新聞ギルドの記者たちに情報を流した……なんてことは……。

ま、まさかですよ？

いくらなんでもまさかそこまでするはずはないですよ？

「それはないと思うわ」

私が懸念を口にすると、姫様は即首を振って言いました。

「グリード様やリユファス様たちは、『勇者タイムズ』の記者たちがあまり好きではないみたいだから。わたくしを救出してくださった帰りの道中、後をつけてきてくわしい情報を知りたがる彼らに皆

さん辟易していましたもの」
「そうですか」

私はホツと息をつくのと同時に、疑ってしまった自分を恥じました。

どうも、無断で父に書簡を送ろうとしたことを王様から聞いてしまったせいで、穿った見方をするようになっていているようです。

考えてみたら、後をつけ回して自分たちのことを記事にしようとしている記者に、勇者様が友好的であるわけはありません。

よっぽど自己顕示欲の激しい人ではない限り、自分のことをアレコレ書かれて気分が良いはずないのですから。

「アーリアはきつと昨日からのゴタゴタで疲れているのよ。今日はもういいから休みなさい」

私に同情の目を向けた姫様が仰いました。

もちろん私は大丈夫ですと答えましたとも。侍女がこれしきのことで休めるはずはございません。

ですが、

「これはわたくしの命令です」

ときっぱり言われてしまつては、下がらないわけにはいきません。お言葉に甘えて私は姫様の前を下がり、私室に戻ることにになりました。

精神的疲労が激しかったからです。

実を言うと、身体だけは丈夫な私が昼間に部屋に戻ることはほとんどありません。

基本や姫様の部屋か、その隣の控え室にこもっているかのどちらかで、ここへは寝にもどってくるだけです。

ですから、今のよう働いているはずの昼に自分の部屋に帰って

きていることに、妙な違和感を感じました。

あ、侍女といえども貴族の令嬢でもある私は上級侍女。一応個人部屋も与えられております。

……非常に狭いですが。

あるものといえば、箆笥にベッド、姿見と小さな机といったシンプルなものだけ。言い換えれば殺風景ですが、寝るだけの空間ですからあまり気にはしません。

これが可愛いものの好きで裁縫好きであつたなら、レースやら小物で狭い空間が埋まっていることでしょうけど、あいにくとその手の可愛い趣味は持ち合わせておりません。

シンプルイズベストです。

そのシンプルなベッドに座って私は「ふう」と息を吐きました。

姫様がああ言われたので、今日はもう呼ばれることはないだろうと考えて、侍女服は着替え済みです。

かと言っても夜着に着替えるのも、病人ではないので抵抗を感じる所。

なので、私が今現在着ているのは、私服の簡単なワンピースです。よく休暇の日に街に出て買い物をする時に着ているもので、これを着た私はモブらしくもはや生まれつきの町人娘にしか見えないでしょう。

貴族だからとぼったくられることもなく、大変都合が良いのです。
地味顔万歳！ モブ万歳！

……ですが、目は塗りつぶされていたとはいえ、全国紙に絵姿が載ってしまった今は、簡単に外を出歩けないかもしれませんね。

私は再度深いため息を付きました。

本当にどうして私なんて好きになったのでしょうか、グリード様は。

あんなに美形なら女性は選り取りみどりでしょうに。

……そしてどうして私は素直に喜べないのでしょうか。

顔と肩書きだけみれば申し分ない相手です。

まあ、天災とか最終兵器だったりしますけど、それでも良いという女性はいるハズなのです。

なのに、あんな美形に好かれて感じるのは当惑した思いだけとは、これ如何に。

例の『勇者様は美形』から始まる自己暗示をかけようとしても、欠片ほどもときめきも思慕も生まれないと、女として何か終わっているのでしょうか……。

もったため息をつくしかありません。

私は自分が面食いではないことを、残念に思いました。

勇者様の王子様然とした物腰と顔に惑わされていればもつと話は簡単だったでしょう。

広間での求婚にばーっとなっているうちに結婚が決まっていたに違いないし、後から歩く天災だとか、最終兵器だとか聞かされようが問題はなかったと思います。たぶん。

好きになっってしまう、もろもろのことは愛で乗り越えられるに違いないのです。たぶん。

だって、恋愛物語は『二人に降りかかる困難に愛で乗り越えていく』のが王道ですからね。

……でも愛がない私には乗り越えられそうにありません。

ああ、いつそのこと、ファミール様に頼んで惚れ薬でも処方してもらったほうがいいかもしれませんね。

そうすれば相思相愛、ベタベタイチャラブ新婚生活の開始ですよ。ケツ。

思わず自暴自棄からくるヤサグレモードに入りかけたその時でした。

コンコン。

と私の部屋の扉が叩かれたのは。

同僚が心配して様子を見に来てくれたのかも知れません。

そう思った私はベッドから立ち上がって相手を確認することもなく扉を開けました。……開けてしまいました。

そして100%後悔しました。

だって、扉の向うにいたのは、柔らかな笑みをたたえた勇者——グリード様その人だったのだから。

世界と勇者様（後書き）

エセRPGの世界ですが、なぜか異世界トリッパーが存在します。
本編には全く関係ありませんが（笑）

＊＊

白崎廉：異世界トリッパー。大学生。現代っ子。おそらくジャーナリスト志望。名前に『白』という字があったから『白の賢者』と呼ばれるようになったらしい。

閑話 空っぽの心（勇者様視点） 前編（前書き）

次のエピソードでまたもやアーリアの評価を落すことになる予定の勇者様なので、その前にフォロー？を。

三部作の勇者様視点の過去話です。

閑話 空っぽの心（勇者様視点） 前編

生まれた時から自分に、話しかけ纏わりつく存在がいた。

その存在は一見自分と同じような人間の姿形だったが、半分透けて見えてる上に空を飛ぶ、明らかに人外の生き物で。

種類に合わせてそれぞれ“色”を持っていた。

自分を『風』だという存在は緑色。

自分を『土』だという存在は茶色。

自分を『火』だという存在は赤色。

自分を『水』だという存在は青色。

自分を『光』だという存在は金色。

自分を『闇』だという存在は黒色。

同じ色の髪に同色の瞳。種族によって異なった色を持つ彼らは、常に傍にいて常に煩く話しかけてくる。

『グリード！』

『ねえグリード、こつちを見て！』
と。

「なに？」

と応えると嬉しそうに笑う彼ら。

何がそんなに嬉しいのか分からない。

だけど、物心ついた頃にはなぜか煩いその彼らが自分にしか見えない存在だと分かっただけ。

「彼らは何なの」

と聞いたのが最初の古い記憶だ。

なぜか父親の反応まで鮮明に思い出せる。

食事の席だったのだろう、問われた父親はなぜか疲れたような吐息を吐いて、手に持っていた匙を静かに机に置くと言った。

「それはおそらく精霊だろう。……グリード、お前には特別な力があるんだ。神様から授かった大きな力だよ」

母親も食事の手を止めて、俺と父親を交互に見ていた。

「その力を持って生まれたのは、何か意味があることに違いない、と俺たちは考えてるんだ。でなければこんな田舎の百姓夫婦にお前のような力を持った子どもが生まれるわけではないのだから。……いいかい、グリード、いつかその力を役立てる時があるだろう。そのためにきつとお前は生まれてきた。いや、それがお前が力を持って生まれた意味なのだから」

とまどうように、まるで己に言い聞かせるように父親が言った言葉。

それが俺がお物心ついた時に最初に記憶した言葉。

そして呪縛の言葉でもあった。

——『それがお前が力を持って生まれた意味なのだから』

言い換えれば、意味がなければ存在する必要のない人間。

俺は漠然と自分をそうだと感じた。

巨大な力を持つ自分は何か理由があつてこそ存在するのであつて、その理由がなければ生まれる必要もなかったのだと。

だからこそ、両親は俺の力を恐れながら存在を容認しているのだと。

他の幼馴染の親は自分の子どもを抱きしめる。悪戯をすれば叱る。何かいいことをしたら笑顔で褒める。

だけど俺の親はそれをしたことがない。

抱きしめたら何が起こるかわからないから。叱れば何をされるかわからないから。どうやって褒めたらいいのかわからないから。分らないから何もしない。できない。

あの子のことは精霊が守るし、彼らが何とかしてくれるだろう。彼らはそう考えたのだ。

特別な人間に、普通である自分たちができることは何もないと。

……それはある種の育児放棄に近かった。

成長した今は、両親が自分をどう扱っていいかわからずに戸惑っていたのが分かる。

片田舎の村で農業を営む、字こそ読めすれ教養のない自分たちの元に生まれた、過度の精霊の加護を持った子ども。

泣く度に小さいとはいえ竜巻や地震を起こす息子を恐れられないようにするには、あまりに彼らは普通過ぎた。

腫れ物を触るような態度で接していたのも無理はない。

それに、そんな態度は両親だけじゃなかった。

村の大人は似たり寄ったりの態度で俺を遠巻きにしているだけ。同じ年頃の子どもも親がそんな状態だから、近付いてくることも

ない。

何の忌憚なく接してくるのは、レナスとミリーと彼らの親ぐらいなものだった。

ただ問題は、そんな境遇に寂しい悲しいとかいう感情をいっさい覚えなかった自分だ、と思う。

両親に対しても、ただただ自分という子どもも持って運が悪かった、申し訳ないと思う気持ちがあるだけ。

それすらもうすばんやりとした感情にすらならないもので。

心の中の大部分を占めているものは、何もないからっぽの感情だけだった。

レナスやミリーは『あんな両親に育てられたから、感情が乏しく育ったに違いない』と言っているが、俺はそうは思えない。

例えば親に捨てられ、孤児院で育った人間が全員自分のように育つだろうか。

何物にも興味を持たず、レナス達に感じている友情すらどこか遠いことのように感じる自分。

喜びも、悲しみも、怒りも、すべて心の一部、ほんの表層の部分で感じているだけ。残りの部分は乖離し、冷静に淡々とそれらを見つめているだけだ。

感情が凍りついているのではない。

ただ単に————— ないのだ、何も。

ぼっかり穴が開いているかのようにからっぽの状態。

それが俺だった。

自分はどこか壊れていると思う。

人間として欠陥品だ。

加護を持つて生まれたから壊れているのか、壊れているから加護をもつて生まれたのかはわからないが。

……分かるのは、自分がほぼ人形とかわない程度の心と感情しか持ち合わせていないことだけだ。

他人の痛みがわからない。哀れみもわからない。

どうしてみんなそんなに笑ったり泣いたりできるのか理解できない。

レナスやミリーがお互いに感じている恋情も、なぜこの人を“特別”だと思うのかも……さっぱり分からなかった。

だからマイナウ湖での一件以来、自分の感情を伏せるようになったのも、実は都合がよかった。

それまではレナス達に合わせて、ある意味感情を装っていた部分があったからだ。

彼らが笑えば自分も笑い。彼らが楽しければ、自分も楽しと感じ、彼らが嘆けば悲しいと感じ、彼らが怒れば腹立たしいと感じる。心の一部分が彼らを雛形として、感情を同調させ共有していたのだ。

自分だけの感情ではなかった。

だがそれすらにも、精霊は力を揮った。リュファスとミリーの感情を共有する自分に反応して――。

精霊の暴走によって湖を失ったファンゼルの村人全員が土下座して許しを請う姿を目の当たりにして、感情とはつくづくやっかいなものだと俺は悟った。

だから、装うのをやめたのだ。

レナスの父親であるライエル神官との約束を破ってしまうことになるが、その方が誰のためにもなると思った。

人形のように空っぽでいれば精霊は暴走しない。

この力が他人に迷惑をかけることもないのだから。

ただ――その頃になると村での状況も多少変化していた。

遠巻きに見ていたはずの同世代の女性から、なぜか纏わりつかれるようになった。

うつとうしくて無視していたが、それは女性だけに留まらなかった。

女性に付き纏われるようになったと平行して、今までこつちを無視していた同世代の男たちに敵意をむけられて絡まれるようになったのだ。

もちろん、それも一切無視したが。

レナスはそれは嫉妬だよ、と言って笑う。

「グリードが女の子にモテるから。それに何をやらせても誰よりも上手くこなせるから、やつらは嫉妬してるのさ」

似たようなことを実際絡んできた男も言っていた。

「むかつくだよ、すかした顔しやがって。剣だってお前より先にやってた俺の努力をあざ笑うかのように上をいって……なのにそれも当たり前のような顔してるのが更に腹立たしい。こんな気持お前には分らないだろうよ、何でもできて、何でも持っているお前にはな！」

確かに剣も魔法もどいうわけかたいして努力もしないうちに身についた。

反対に、どうしてみんなが出来ないのかと不思議に思うくらいに簡単だった。

———
だけど———。

この時ばかりは男の言葉に少しだけ笑いたくなった。

———
何でも持っている。
その言葉に。

確かに持っているだろう、あの男の欲しいものを全部。
容姿にしろ、剣術にしろ、魔力にしろ、自分のそれは桁外れだ。

———
……。
それに何の意味がある？

存在する意義を与えられない力に、^俺何の意味が？

それに価値を見出せない自分は、本当は何も持ってなどいないのだ。

まるで底のないコップのように、空っぽの自分。
与えられても注いでも、すべてはすり抜けていくだけ。

底のないコップにいくら何かを注いでも何も残らない、残っていない。
ない。

……残るはずもない。

そんな自分が何でも持っている？
否。

……俺が持っているのは壊れた空っぽの心だけだ。

閑話 空っぽの心（勇者様視点） 前編（後書き）

勇者様の心の中の一人称は“俺”です。

「私」なのは対外的なもの。

巨大な力の代償が、育ちなのか、ミリーとレナスが考えているより、グリードは壊れているらしいデス……。

閑話 空っぽの心（勇者様視点） 中編

父親の言うとおり、力を持って生まれた意味を、存在する意義を見い出したとき、この空っぽな心は埋まるのだろうか。

……分らない。

だけど、十八歳になったある日突然、女神の神託とやらを聞いた時にすべてが動き出したのは確かだ。

——勇者として起ち、世界に安定を。

女神の神託というが、あれは伝説で言われているような敵かなものではない。

前触れもなく突然に降りかかった災難に近い。

光の精霊とは違った種類の強烈な“力”と“意思”を突然ぶつけられたのだ。

ある日の森の中で。

だけどその間にいわゆる選定とやらは終わっていたらしい。

気がついた時には、欲しくもなかった“勇者”としての力も授かっていた。

歴代の勇者が持っていたスキルの継承がそれだ。

——それと同時に理解した。

与えられたのは、言われているような魔族と魔王を倒すための“力”ではなかった。

それを内包したもつと別の力。

——“創造”。

精霊の力でも、魔力でもない——第三の力。

つまり、女神から与えられた勇者の力とは、光の女神ではなく創造主である女神の力の一部。欠片なのだ。

だから基本的に出来るのは何かを“創造”することだけ。

なのに魔王を倒せる力を内包しているのは、おそらく最初の頃の勇者が女神の力を授かった時、魔王を倒せる力を女神の力を使って“創造”したからなのだろう。

この力の本質が分かってやっていたのかは不明だ。

だけど、女神の宣託を受けて力をもらったのだから、この力は魔王を倒すためのものだという思い込みがあるいは創造させたのかもしない。

勇者が持つ様々な特殊のスキルもそうだ。勇者の持つ剣も、鎧も全てが。

——歴代の勇者が“創造”していったもの。

女神が魔王を倒す力を授けたわけではない。

全部が勇者が女神の力を使って“創造”したものだ。

だからこそ、それらのアイテムは勇者にしか使えない。同じ“創造”の力を持つ人間にしか。

なぜなら、使いこなすために必要な力は勇者の持つ“創造”の力だからだ。

そして女神が選ぶ『勇者』の条件は、その“創造”の力に耐えるだけの器を持っているかどうか。その一点だけだ。

志でも、人格でもない。

ましてや魔王を倒せるかどうかでもない。

言い換えればその力を受け入れるだけの器を持っているなら誰が勇者になってもいいのだ。

……そのことを歴代の勇者が理解して使っていたのかは分からない。

あるいは女神の選定を受ける以前に光の精霊の加護を持っていた勇者だったら気付いていたかもしれない。

女神の力の異質さに。違和感に。

俺だって全精霊の加護があつて、その力を知っていたからこそ、分かったのだ。

——光の女神から授かったはずの力が、光の要素を全く含んでいないことに。

勇者の力は光の精霊の力はおろか、魔族や人間の持つ魔力とも違う、全く異質のものだったのだ。

では勇者の力の本質とは？

そう考えた時に思い当たったのが、光の女神レフェリアのもう一つの側面——創造神としての面だった。

腑に落ちた。

これは創造の力の欠片なのだと。

——だけど。

『グリード、勇者だ！』

『勇者になったのよ、グリード！』

『すごい。やっぱり私たちのグリードだわ！』

精霊が歓喜に震える。

煩い。

何が楽しいのか分からない。

だって勇者の力を授かって、相変わらず自分は空っぽのままだ。
埋まらない。注がれても流れ出るだけ。

それなのにこんな力を貰ってもただ煩わしいだけだ。
魔王も魔族も知らない。勝手にやっていればいい。

そう思っていた。

—— だけど変化は起こった。

勇者に選ばれたと知った両親が、恐らく初めて嬉しそうな顔を俺に向けて言ったのだ。

「そうか、やっぱりお前が力を持って生まれたことに意味はあったんだな」

「きつと、勇者になるために、魔王を倒すために、女神様があなたという子どもを私たちに預けたに違いないわ」

—— 自分の子どもが巨大な力を持って生まれた理由が分かって彼らは安堵していた。

ずっとただの農夫である自分達に力を持った子どもが授かったことを認められなかった両親。

『なんで俺たちの子どもが？』

『なんで普通の子どもに生まれてくれなかったの？』

そう陰で嘆いていたことも知っている。

ようやく明解な答えを見つけることができ、彼らは俺を認めた

のだ。

女神が魔王を倒すために、地上に遣わせた子ども。

自分たちは単なる借り腹に過ぎないのだとそう思うことで初めて彼らは俺を——グリードを一人の人間としてみることができるようになったのだ。

息子としてではなく——勇者として。

「きつと魔王や魔族を倒して地上に平和をもたらすためにお前に力を与えてくださったのだろう。やっぱりそうだったんだ。それがお前が生まれた意義に違いない」

嬉しそうに言う父親の言葉に、昔の古い記憶が蘇った。

——『それがお前が力を持って生まれた意味なのだから』

“魔王を倒すことが力を持って生まれた俺の存在する意味であり、理由”

ストン、とその考えが頭の中に納まった。

だからこそこんな力を持って生まれたのだと納得できた。

「それは違うわよ、グリード！」

「そうだよ。力とグリードが生まれたことはまったく別の話だよ！」

「自分の存在意義を魔王を倒すことに見出してはダメだ。君は道具ではないんだから」

ミリーもレナスもリュファスもそれを否定する。

俺は俺であればいいのだと。存在する“理由”なんて必要ないの

だと、彼らは言う。

だけど、それならなぜ自分は人形のようなのだろう。
力なんて関係なく、ただ自分であればいいというなら、どうして
こんなに空っぽのままなのだろう。

ただ単に『魔王と魔族を倒すというシステム』だから心は必要が
ないということなのではないだろうか。

そんな考えがこびりついて離れなかった。

だが、いずれにしろ、女神の力を受けてしまった以上、勇者とし
て起つしか道はなかった。

そんな俺を心配して幼馴染たちが旅についてくるという。
危険だからと止めたが、彼らは一步も引かなかった。

———そこから、長い旅が始まった。

魔族との戦いは思った以上に簡単だった。

今までの勇者たちが“創造”した武器やスキルのおかげもあるだ
ろう。

初めは四人の旅立ちだったのが、今では女戦士のフェアやエルフ
のルファークがメンバーに加わってそれぞれの特色を合わせてうま
く回っていた。

降りかかる火の粉は払いのけ、依頼を受けて魔族を倒す。
自分たちからこっちにちょっかいを出す魔族もいる。

そういったのは大抵幹部クラスで、探す手間も省けるからこちらとしても大歓迎だった。

もちろん、叩き潰した。

——そしていつしか、俺たちは歴代勇者の中で最強と言われるようになっていた。

『最強だって、グリード!』

『やっぱりすごね、グリードは』

嬉しそうに笑いさざめく精霊たち。

相変わらず煩い存在ではあるが、積極的に力を使うようになったせいだろうか。

以前よりはずっと気にならなくなった。

——おそらく、それも変化の兆しだったのだろう。

最強と言われるようになった頃からだろうか。

俺は終わることに漠然とした恐れを抱くようになった。

“恐れ” “不安” どっちでもいい。だけど、生まれてこの方感じたことのない感情なのは確かだ。

そんな自分に驚いたものだ。

だけど魔王と戦うことに恐れをいだいたのではない。

魔王を倒して、終わりが来ることに不安を感じたのだ。

自分が存在する理由を失うことに——。

閑話 空っぽの心（勇者様視点） 中編（後書き）

女神から贈られた“力”は魔王を倒す力ではなくて、創造の力。それがなぜ『魔王を倒す力を贈られた』と言われているかといえば、歴代の勇者の思い込みのせいです。

女神から授かった力Ⅱ魔王を倒す力だと思い込み、無意識のうちに自分たちで「魔王を倒す力」を創造していったわけです。

思い込みが思い込みを生み「女神から勇者に贈られる力Ⅱ魔王を倒す力」という風に固定されていってしまった。

……という設定です。

閑話 空っぽの心（勇者様視点） 後編

“魔王を倒すことが力を持って生まれた俺の存在する意味であり、理由”

だから世界から魔王を消すことは、すなわち自分の存在する意味を失うことだった。

世界や人間の為に戦ってきたなら、魔王を討伐することは悲願であり、必ず達成しなければならなかっただろう。

だけど、俺は世界や人間の為に戦うことを選んだわけではない。自分の存在理由のための戦いだった。

達成しなければならぬことは確かだが、戦うこと自体が生きる意味だった自分がそれを失ったら――？

何が残るだろう。

――からっぽの自分。

――存在する意味も、生きる理由すらもない自分。

ああ、と思った。かつての自分に戻るのだ。

壊れた空っぽの自分に。

戻るだけ。

だけど――それになぜか恐れを抱いた。戻りたくはなかった。生きる意味がある自分でいたかった。

だから魔王を倒すことを躊躇した。

まだその時期には至っていないと理由をつけて。

魔王と対峙するのを避けた。

かつての魔王と同程度の力の持ち主だったなら、十分倒せると分かっていながら――。

「歴代最強の勇者が聞いて呆れる」
思わず自嘲する。

何も持つてなかったはずなのに。
失うことを恐れる。

……本当に、感情というものはやっかいだと思った。

——そんな時だった。
シュワルゼ国の使者が泊まっていた宿屋を訪れたのは。
第二王女のルイーゼ姫が魔族に攫われたので、それを救って欲しいという依頼だった。

……攫ったのは魔王かもしれない。
そう告げた言葉に、誰よりも勇敢で最強であるはずの勇者一行が動揺していたなんて、使者は気付いただろうか。

その夜、対応を決めるために俺の部屋に集った仲間の表情は思わしげだった。

終わることに恐れを抱いているのは、俺だけではない。
彼らもまた、俺が魔王と魔族を倒すことを存在理由としているのを知っている。
だからこそ恐れる。

魔王を倒してしまったその後を。

「断ろうか」

レナスが言った。

「シュワルゼの国には悪いけど、まだ魔王とやりあうのは時期早々だと思う」

「そ、そうだよ！ まだ早いと思う」

ミリーもレナスに同調する。

「だが、本当に魔王なのか？ 配下を使わずに自分で攫うなんて、今までの歴代魔王にはない行動だ」

そう言ったのはリユファスだ。

「だが、今回の魔王は変り種だと聞いている。自ら赴くこともあり得るかもしれない」

と、エルフのルフアーガ。

仲間の意見は分かれた。

断るか、確認をしてから判断するべきか。

「グリード、どうする？」

ひとしきり意見を交換した後、ずっと黙っていた俺に女戦士のフアラが静かに問いかけた。

意見が分かれた場合は、リーダーである勇者が決める。

そういうルールだったからだ。

俺はしばし考えたのち、口を開いた。

「話だけは聞くことにしよう。……目撃された魔族が本当に魔王かどうか判断してから今度のことは決めるということで」

翌朝、使者と共に馬車でシュワルゼに向かった。
そこで出会いが待っているとは思えないで。

シュワルゼは豊かだが小さな国だ。

城もエリューシオンの宮殿に比べれば規模は小さい。

だが、国王の人柄のせいか全体的に柔らかな印象を与える佇まいで、リュファス以外は一般民である仲間たちは気に入った様子だった。華美でないところがことさらに。

この国の宝である姫が攫われてしまったので全体的に沈んだ様子なのは仕方ないことだが、それでもただ悲しみに暮れるのではなく、自分達に及ぶ範囲内で出来ることはやろうという気概のようなものが感じられた。

精霊も、この人間には好意的だ。

穏やかで善良な国民性なのが見て取れる。

「今応接室にご案内致します」

城の中庭で馬車から降りて周囲を見回す俺たちに、使者がその声を掛けた直後のことだった。

「勇者様？ ……勇者様、ですよ？」

使用人用の小さな出入り口から出てきた人物に声を掛けられたのは。

とつさに振り向いた俺の目に映ったのは、茶色の髪を結い上げ、紺色の侍女用のドレスを身に纏った小柄な女性だった。

……なぜか心臓がドクンと鳴った。

「お願いです、勇者様……！」

その小さな身体が弾かれたようにこっちに向かってくる。
とつさに俺は『分析』を使ってこちらに走ってくる女性を視た。

というのも、魔族に操られてこっちを害そうとしている可能性があつたからだ。

魔族は魔法を使つても隠すことのできない赤い目という特徴があるので、俺においそれと近付くことはできない。だからたまに魔法で人間を操るという手を使ってくるのだ。

だから不用意に近付く人間を捜査する習慣がついていた。

『分析』のスキルが発動し、脳裏に文字が現れる――。

【アーリア・ミルフォード

種族：人間

職業：ルイーゼ姫の侍女A

身分：ミルフォード子爵令嬢

年齢：十八歳

出身地：シュワルゼの南、ミルフォード子爵領

LV：1

HP：10

MP：0.01

ステータス異常：なし

保有スキル：ツツコミ

どうやら操られてはないようだが……スキルの『ツツコミ』とは何だろうか。

そう思っているうちに懐に入られた。

飛び込んできたその身体をとつさに受け止める。

……なぜか再び心臓がドクンと鳴った。

「お願いします。勇者様！」

腕の中で縋るような目で見上げる女性。

その涙を湛えた濃い茶色の目を覗き込んだ瞬間——世界が変わった。

心が波立つ。

魂が、震える。

——見つけた。

強烈な思いが押し寄せる。

今まで剥離していたものが、ストンと胸の中に納まるのを感じた。

それと同時に、流れ出る一方だったものが止まるのも。

留まり、残り、何かが溢れ出る。

歓喜。

そう“喜び”だ。

……からっぽだった心に、何かが埋まっていく。満ちていく。

「姫様が、姫様が魔王を名乗る魔族に攫われてしまったんです！」

腕の中の女性が訴える。

「アーリア。気持は分かるがここは中庭で……」

使者が咎めるような口調で言うのを、俺は手で制した。

もつと彼女の声が聞きたかった。

彼女を腕の中に置いておきたかった。

「私が、私が傍にいながら姫様を……！」

胸に縋る彼女の身体は暖かくて柔らかくて——その感触に心と身体がズクリと疼いた。

同じように女性に縋られたことがある。好きだといわれたことも、ただ、空っぽの心は何も反応はせず、理解できない恋情はただ煩わしいだけだったのに。

彼女には何もかもが違った。

腕の中に囲って離したくないと感じた。

この茶色の瞳に自分が映っていることにゾクゾクとした“喜び”を感じた。

それでいて決して“俺”を映しているのではないその目に、自分を焼き付けたいと思った。

ああ、と理解する。

溢れるような、この思い。これが感情か。

これが他人を“想う”ことか、と。

——見つけた。

感情を覚えた、空っぽだったハズの心が叫ぶ。

——見つけた。欲しいもの。手に入れたいものが。

——そして、生きる意味が。

「お願いです。勇者様！」

彼女が縋るように見上げる。

その濡れたような瞳に、視線に、心が、身体が疼く。

「姫様を、姫様をお救い下さい！　魔王の手から！」

——魔王。

魔王と聞いても、さっきまであった恐れも不安は今ももう何も感じられなかった。

それどころかもう要らないと思った。

なぜなら、もう自分は見つけたから。

だから、魔王は必要ない。

さっさと倒してしまおう——彼女の為に。

俺は宥めるように、彼女の背中にそつと触れた。

手に感じるその暖かな感触に、心が満ちる。

「大丈夫です」

知らず知らずのうちに微笑んでいた。

目の端にぎよつとしている仲間の姿が映ったが、それはどうでもよかった。

大切なのは目の前の彼女だけ。

「大丈夫です」

微笑みながら穏やかに再度そう言つと、彼女の瞳に希望が生まれようだった。

それを見て、自然と笑みが深くなるのを感じた。

生まれて初めて愛しいと感じた存在。

貴女の為に、魔王も魔族も倒してみせよう――。

「貴女の姫君は必ず助けます」

――貴女が、俺の生きる意味になってくれるのなら。

閑話 空っぽの心（勇者様視点） 後編（後書き）

こうしてロックオンされた主人公……。勇者様視点の過去話はこれで終了です。

アーリアが考えているよりずっとグリードの彼女に対する思いは深いです。

深いというより重い（笑）

勇者様と私と小部屋（前書き）

本編再開です。

勇者様と私と小部屋

柔らかな笑みをたたえたその方は扉を開けたまま硬直している私の姿を見て言いました。

「貴女に会いにルイーゼ姫の部屋に行ったら、自室に戻られたと聞いたので」

ああ、きらきら後光が。

後光がグリード様の笑顔を照らしております。

「そ、そうですか……」

私は顔を引きつらせました。

昨日、広間で会って以来、勇者様が私の前に姿を見せることはなかったので、考えを改めたのかとちょっと期待したのですが。

……グリード様の青碧色の瞳に宿る熱っぽい光を見れば、全然変わっていないことがわかります。

何でしょうか、この甘い甘い蕩けるような視線は！

「な、何の御用でございましょうか？」

私はごくんと息を飲みながら聞きました。

ですが、言っただけでそれは愚問であつたことに気付きました。

求婚している相手に会いにくる理由としたらこれしかないでしょう。

勇者様がにっこりと後光もまぶしい笑顔を浮かべて言いました。
「貴女の顔が見たくて」

やっぱりそうですか。そうですね！

「それに、忘れましたか？ 昨日、お互いのことをよく知ろうということになったじゃないですか。貴女と顔を合わせずにどうやって知り合うというんですか？」

爽やか笑顔で言われた言葉に、私は内心ギクンとしました。

—— お互いをよく知る。

…… 言いましたね。確かに。
問題を先送りするための言葉でしたが！

まさかここで自分の言ったことが跳ね返ってくるとは思いも寄りませんでした。

あの時の自分に喝を入れたいです。
いいえ、背後から蹴りも入れてやりたい気分です！
なんてことを言ってくれたのかと！

たった昨日のことですが、あの時の私は無知でした。
あの時点でグリード様がいろいろ私のことを——スリーサイズも含めて——ご存知だったとか、勇者様が歩く天災で最終兵器だなんてことは思いもよらなかったのです。
知っていればお互いを知ろうとか、そんな自爆的な言葉を言うこともなかったのに。

…… いえ、できれば何もかもが永遠に知りたくなかったです。
何も知らなかったまっさらな自分に戻りたいです。切実に。

「ところで、扉の前で話すのも何ですから、部屋に入っても？」

内心嘆いていた私はその促すようなグリード様の言葉にハツとしました。

そう、私たちは未だに部屋の前で、扉を開けている状態で話をしていたのです。

ここらへん一帯は使用人達の部屋がある場所。

今は昼でほとんどの人が仕事に就いているため、人の気配はありません。

ですが、多くが出払っているとはいえ、全く人がいないわけではありません。非番の人や夜勤の人はまだ部屋にいるし、その人たちがいつ廊下を通りかかってもおかしくないのです。

そして、城勤めをしている人間は得てして噂好きです。

昨日のことがあつという間に城中に広まったのがその証拠。あつちこつちで昨日から今日にかけて私たちの噂話に花が咲いたに違いありません。

そんな彼らが勇者様が私の部屋を訪ねたことを知ったら——ああ、ゾツとします。

絶対どこかで話を窺うに違いありませんからね！

「すいません。狭い部屋ですが、どうぞお入り下さい」

私は慌てて、横に身体をズラしてグリード様を部屋に通しました。

が、扉を閉めて、グリード様を振り返った瞬間、ハタツとこの状況に気付いたのです。と同時に警鐘が頭の中に鳴り響きました。

——若い男女が誰もいない部屋に二人きり。

冷や汗がたらーりと流れました。

相手は勇者様です。

が、昨日大勢の前で私に告白し、求婚した人です。その人と狭い部屋で二人きり……。

し、しかもおあつらえ向きにベッドが目に入ってくるじゃないですか、グリード様の背後に。

といっても、この狭い部屋、大部分をベッドが占めているからですが！

……これは、もしかして貞操の危機とかいうやつですか？

いや、まさか、勇者様に限って！

だけど、相手は全精霊の加護持ちだろうが、健康な男性。当然の欲求もありますよね？

私のような平凡なモブ女でも、その気になってしまうことは十分あるってことですよね……？

ひいひい。

私を見つめるグリード様の熱っぽい視線が恐いです！

ヤバイ気がすごくします！

はつきり言って現実逃避したいです！

——という訳で現実逃避の為に勇者様の格好でもご紹介いたしますよ。

今日のグリード様はアーマー姿ではありません。腰に剣——恐らく聖剣——を差しているだけです。

魔族が入ってこられないように結界が張ってある城の中では、さすがに完全武装する必要はありませんからね。

だから今日の彼は本当にシンプルな白いシャツと黒いズボンを身に纏っているだけです。

ですが、美形は何を着ても似合うもの。

王族や大貴族が身につけるような高価な服ではなく、本当にどこにでもある——はつきり言ってそのへんの町民が着ているレベルの——シンプルなシャツなのに、気品を全く損なっていないのです。それはもう、高貴な方がわざと一般人の服装をしたかのような。

しかも、はだけた襟元からのぞく素肌がやけに色気があると申しますか——なんか、こうドキドキゾワゾワします。

フェロモンとやらが出ているに違いありません。

でもそれは女性的なものではなく、あくまで男性的な色香。

城の兵士に比べると細身に見えるのに、しなやかな動作に発達した筋肉がうかがわれます。

女性をひきつけてやまない力強さに溢れているのです。

「アーリア」

その色気漂う勇者様が蕩けるような笑みを浮かべて近付いてきたところで、私の現実逃避は終了しました。

ひえええ！

私は思わず後ずさりし——すぐに進退窮まりました。

どんつと背中に壁が——いや、扉がぶつかったからです。

あー、何で扉閉めちゃったんでしょうね、私！

閉めなければ逃亡できたのに！

いえいえ、勇者様と会っているのを人に見られなくなかったからです！

そうしてプチパニックになっている間にも、勇者様は——。

「アーリア、愛しい貴女^{ひと}」

前にも後ろにも逃げる事が出来なくなった私は、フェロモンを
大放出しながら近付いている勇者様を、成す術もなく見つめるのみ
でした。

——これってやっぱり貞操の危機ですか……？

貞操の危機？

「えっと、えっと、グリード様、落ち着いて下さいな」

私は扉に背中を張り付かせながら、目の前に立ったグリード様に言いました。

そして言いながらも内心自分にツッコミ入れました。

とりあえずお前が落ち着け、と。

確かに密室に二人きり。しかも片方はもう片方に求婚している関係。

だけど、すぐ貞操の危機と疑うのはあまりに短絡的というものです。

相手は勇者様です。

世界の救世主です。

熱っぽい目で見られています！ フェロモンたつぶりですが！
それがすぐに貞操の危機と考えるのは自意識過剰だと思うのです。

……だからっ、だから、落ち着け、私！

私は自分に言い聞かせました。

ですが、グリード様のシャツの合わせ目から覗いた素肌がバーンと視界を覆っている状態では無理というもの。

グリード様の背は高く、私の目線がちょうどグリード様の胸の位置なのです。おかげでベッドは見えなくなりましたが、別の意味で非常に心臓に悪いことになってます。

シャツから覗く鎖骨とか、ちよっと視線を上げると見える喉仏とか！

……この無駄な色気は一体なんなんでしょうかね。

ですが、顔を上げてグリード様の顔を見る勇氣はありません。
想像してみてください。

あの麗艶なお顔を間近で拝見することになるのですよ？

美しいお顔は姫様で慣れているとはいえ、異性はまた別です。絶対に慣れません。

正直に申しますと、この城ではモブ顔率が高くてあまり見目麗しい男性はいないのです。ですから、勇者様一行に同僚たちが色めき立ったわけですが。

そんな免疫のない状態で、キラキラ後光が差す美貌を至近距離で拝見するのは私の精神衛生上、得策とは思えません。

確かに広間では間近で手を取られましたけど、あの時は周りに大勢人がいたし、求婚に動揺していたからそこまで頭が回らなかったのです。

今は耐えられるかどうか……。

モブが、主役オーラに勝てるわけありませんからね！

とりあえずこれ以上の接近を阻むために私は手を前に突き出しな
がら言いました。

「そ、その、とりあえず話し合いましょうおおお！？」

……語尾がおかしくなったのは、突き出した手を突然取られたからです。

これ以上密着するのを避ける為に手を出したのであって、決してお手を繋ぎたいわけではなかったのですが———どういうわけか、広間の時と同じように、勇者様に手を取られてしまったのです。

ひいええええええ！

なんか、なんか捕まってしまいました！

「そうですね、話し合いましょう。……今後のことを」

私の手を両手で包み、やんわり笑みを浮かべたグリード様が何かを含むように言いました。

……最後の『今後』という言葉が『結婚後』のことを指しているように聞こえたのは気のせいでしょうか……？

ちなみに笑みを浮かべているのが分かったのは、ちょっと上げた視線の先に勇者様の非常に形の良い唇がありまして、それが弧を描いていたからです。

でもそれ以上視線を上げて確認しろと言うのはご勘弁下さい。本능が拒否するのです。

あの熱っぽい視線ならともかく——いや、それも破壊力満点ですから遠慮したい気持ち大ですが！——広間で見せた、昏い焰を宿した瞳を再び見てしまったりしたら、悲鳴を上げてしまう自信があったからです。

まあ、それは今は置いておいて、今この場の問題はグリード様のお言葉です。

今後と言われた時に思い出したのです。

勝手に父に結婚の許可を求める書簡を送ったことを。

なので私はそれについて言うことにしました。

もちろん、グリード様の顔は見上げないようにして、です。

あ、言っておきますが——この場で言うことを思いついたのは、決して、決して、勇者様の気を逸らして危険を回避しようと考えたわけではありませんからね！

「あ、あの、グリード様。その、私の父に書簡を送ったと聞いたのですが……」

「ええ」

とグリード様は頷きました。

その態度や口調にも一切の罪悪感は見られませんでした。

「宰相殿が計らってくれました。魔法を使ってファミール殿が届けて下さったようで、さっそく今日返事を頂きました」

ええ、私もその書簡を見ました。……中身は見てませんが！

「お父上は、貴女が選んだ人にとにかく言うつもりはないと言ってくれました。私のような貴族でもない一介の村人が貴族である娘に求婚したのに、貴女の父君は嫌な顔をすることもなく、娘が良いというなら構わないと。すばらしい父君ですね」

につこりと、グリード様は笑いました。

……ものは言い様とはこのことでしょうか。

面倒だから娘に判断は任せるよ的な文言が、勇者様フィルターにかかるそのような解釈になるのですね。

私は一瞬何を言っているのか理解できませんでしたよ。アハハ。

……って、問題はそうじゃありません！

面倒くさがりの父親の意見なんぞどうでもいいのです！ グリード様が勝手に申し込んだのが問題なのです！

「私の返事を聞く前に父に申し込むなんてひどいじゃありませんか」抗議するように、でもあいかわらず顔は見えずに、白いシャツに向かつて私は言いました。

ですが、それに対するグリード様の反応は思いもよらないものでした。

「……あれ？」

と不思議そうに言ったのです。

「貴族の令嬢の場合、本人ではなくまず親に許可を求めるものだとリュファスから聞いていたのですが……。村では本人が申し込みを受ければそれでよかったので、昨日、貴女に直接申し込んだのですが、リュファスが貴女の父君のミルフォード子爵にも許可を得る必要があると……」

「そ、それは……そうですね……」

私はがっくりと脱力しました。

確かにそうです。

貴族は本人達の意味というより、親が婚姻相手を決めることが多いので、求婚をする場合はまず親にお伺いを立てることが慣例になっています。

そして私も一応は貴族の令嬢。

勇者様もリュファス様もそう思うのは無理はないです。

……失念していました。

何しろ私の父親や兄があんな感じで頼りにならない上に、家名は結婚するのにマイナスイメージがありすぎで。

それを凌駕するほどの容姿も器量もない私は、相手は自分で探すか一生独身だと考えていたのです。

結婚に関することはすべて自分の意思によるもの。必要なのはそれだけ。

要するに、自分の結婚に父親の許可が必要という発想がちらりともなかったのです。

私はすっかりそのことを忘れていて、勇者様が勝手なことをしたと思っていました。が、グリード様に見てもらったら私に合わせてくれ

ようとしただけで――。

あああ、申し訳ありません、グリード様！

考えてみたら、衆人觀衆の前とはいえ、直接本人である私にまず申し込んだのは、勇者様の誠意だとも言えるのです。

だって、貴族の慣例通りにまず親に申し込んで、私の意思を確認することもなく婚姻関係を成立させるという選択肢だってあったわけですから。

……まあ、私の親はアレですから、まずそんな無茶ぶりの展開にはならなかったでしょうけど。

勇者様も私に求愛した後でリュファス様から指摘されて書簡を送ることにしたのでしょうか。

だけど、私が考えるほど勇者様に非があつたわけでないのは確かです。

私は申し訳なさに俯きました。

そしてその際、ふと自分の手を包み込んでいる勇者様の手が目に入り、次いで自分の手に伝わるグリード様の手の感触を意識しました。

グリード様の手はとても暖かく――そして少しゴツゴツしていました。

私はそのちよつとごわついた感触が何であるか知ってます。

剣を持つ方特有のものです。

剣を握り、振るっているうちに、たこができたり摩擦で皮が剥けたりします。そして、再生した皮は耐えられるように厚く硬くなっているのです。

城に兵士や騎士たちにみんなあるもの。

長時間頻繁に剣を持つ人間ならほぼ例外なく持っている勲章のよ
うなもの。

……それが勇者様の手にもありました。

それに気付いた瞬間、何だか勇者様に感じていた得体の知れない
者への恐怖がふつと自分の中から抜けるのを私は感じました。

私を包んでいる手はまぎれもなく、人間のもの。

反則的な力があつて、世界最強で、天災だつたり兵器だつたりす
る勇者様——グリード様ですが、何の努力もなくその力を使いこな
せるわけではないのです。

剣を振るう努力をしなければ、こんな風にたごができるわけがあ
りません。

無傷で何もかもを成し遂げているわけではないのです。

……だって彼は人間ですから。
精霊の力を持っていたても、その身が人であることには変わらない
のです。

私にはこの手がそれを物語っているようにも見えました。

そして、このややゴツゴツした手が、姫様を、私たちを護ってく
ださったのです。

今、始めて私はグリード様を勇者様ではなく、一人の男性として
見れる気がしました。

今までは天災とか兵器云々はともかく、勇者様という存在は天上
人のような伝説に彩られた存在で。

ここにこうして立っているのに、私にはどこか遠い存在のように
感じていたのです。

そのフィルターが外れ、今初めて勇者様——グリード様がもつと
身近な存在であると認識できるようになったような気がしました。

私は意を決して、勇者様を見上げました。

……熱を帯びた青碧色の瞳と目がかち合って、ちよつと後悔したものの、精一杯の誠意をこめて答えました。

「確かに貴族は親に許可を取るのが慣例ですけど、でも私は自分で相手は選ぶつもりなので、家族の許可は必要ありません。グリード様もどうか父を気にしたりしないでくださいませ」

——言つた傍からアレ？と思いました。

この言い方や台詞は何だか非常に誤解を与えるのではないだろうか。

そう。

まるで『父が反対しても、私のグリード様への気持は変わりませんわ』的な……。

……。
……。
……。

「アリア」

ややかすれ気味の声が勇者様のその麗しい唇から洩れました。

いえ、それよりも問題は——目です。瞳です、グリード様の！

私の言葉を聞いたとたんに、グリード様の目の奥に熱い何かが宿つたのです。まるで焰のような、何かが……。

い、いやああ、甘いです！ 激甘です！

蕩けるような熱を帯びた視線が私を捉えております！

一気に恐怖が戻ってちゃったですよ、グリード様！

——だって、それは私を絡め取ろうとしている目なんですもの。

なのに。それが判るのに。

どういつわけか、背中には冷汗が流れているのに、視線が勇者様の目から外せません。

まるで縫いとめられたかのようにです。

……いいえ、まるで魅入られたかのように動かないのです。
何かもが。

目も、視線も、足も、身体も——そして思考でさえも。
急にぼうつとして何も考えられなくなりました。

なのに、妙に目の前のグリード様の動きだけは鮮明に感じられるのです。

覆いかぶさるように屈みこんでくるグリード様。

無駄に長い睫毛がそつと伏せられて、形のよい唇が私のソレ目指して降りてきて——。

——ふっと唇に息がかかりました。

……再びピンチです……多分。

貞操の危機？（後書き）

ちよつと絆されかけたのに、台無しにする勇者様……。

ピンチの先に王子様

わぁ、勇者様、殺意を抱くくらいに睫毛が長いんですね！

——いつもの私なら現実逃避して恐らくそんな事を考えていたでしょう。

ですが、今回はダメです。

頭ボケーとしてますからね、ツツコミすることもなく、ただただ秀麗なグリード様の顔が近付いてくるのをポカンと見ているだけ。

おかげで視界いっぱいグリード様の顔です。

さっきまで顔をみれなかった反動のように、グリード様オンリーです。

閉じた睫毛が頬に影を落としているのが見えるくらい——間際です。

唇にふっとグリード様の息が掛かりました。

これから何をしようとしているのか聞くまでもなく、明白です！モブとはいえ、仮にも乙女の唇が奪われようとしていますよ！

私、ピンチ—————！

と、ボケる頭の片隅でそう思った時でした。

あと数ミリで接触——という所で、私が張り付いている扉が声と共に激しく叩かれたのは。

「アーリア、アーリア、いるのか!？」

ドンドン。

扉を叩く音と振動が私の身体に響きます。

勇者様の動きが止まって、チツと小さく舌打ちするのを私は聞き――それと同時に頭の中が急にクリアになりました。

霧が一瞬で晴れるかのように、さーあと思考が戻ってきたのです。

今置かれている状況を理解し――グリード様の顔が離れていくのを見ながら、私は冷汗が出そうになりました。

危ないところだった……！

キスされそうになってましたもの！

寸止めで、ギリギリで触れ合わなかったものの、あと一秒でも遅かったら言い逃れできない状況になっていましたよ。

何しろ、手に接吻なら親愛の情で済ませられるけど、唇と唇によるキスは恋人や夫婦、誓い合った仲でするものと相場は決まっていますから。

少なくとも貴族の間ではそうです。

目撃されようものなら、『婚約成立』の烙印を押されます。

目に見える形では、誓い合った男女は対になる腕輪を嵌めるのですが、人前でキスしあうのも十分意思を表明しているものとみなされるのです。

キスは慎重に！

それが遊びが激しい貴族子弟の標語となっているくらいです。

「アーリア、アーリア、そこにいるんだろう？」

ドンドン。

扉が再び叩かれて、声がありました。

おっと、忘れそうになりましたが、その声が私の救い主です。
感謝しなければ！

「は、はい。居ります！」

私は返事をしながら、しかしアレ？と思いました。
名前を呼んでいるからには知り合いなのは確実です。現に聞いた
ことのある声なのです。

ですが、記憶にあるその声の主は本来ならこんな使用人部屋にな
ど来るはずがない人のもので――。

あれ？

「ここを開けてくれ」

「……いいですよ」

扉の外の主のその言葉に答えたのは勇者様でした。

といっても、外の主ではなく、私が傍らのグリード様に問いか
けるような視線を送ってしまったことへの返事でしょう。

ここは私の部屋なのに、どうして勇者様の許可を得ようとしたの
か自分でもわかりません。侍女根性のせいでしょうか。

でも、勇者様には強烈なカリスマ性があるのは確かです。

場の空気を支配し、あたかもその主であるように思わせるよう
な何かを持っています。それこそ物語の王か王子様のように。

侍女暦六年の私が従わないわけにはいきませんよね。

いえいえいえいえ、もちろん、勇者様は私の主人ではありません
けどね！

と内心ツツコミしつつ、勇者様が私から離れてくれたので私も扉

の前から背中をどけました。

「今開けます」

使用人たちの部屋の扉は全て外開きなため、扉前にいる人に注意を促しつつ、ドアノブを回し扉を開けると――。

そこに居たのは、予想通りのこんな場所にいるハズのない人物。

この国の第二王子であるアルフリード・ラフィア・シュワルゼ様でした。

ピンチの先に王子様（後書き）

王子様登場。

長くなったので話を分けました。

隠密な王子様

この国の王様と王妃様の間には四人の子供がおります。

第一王子エンヴァルト様と、第二王子であるアルフリード様。

隣国の王子に嫁いだ第一王女であるマリアージュ様と、私がお仕えしている第二王女のルイーゼ様です。

エンヴァルト様は軍隊が強いことで有名な大国リナーシュに留学しているので、今現在この国にはおりません。

ルイーゼ様が魔王に攫われたことはエンヴァルト様には隠しているため、何も知らずに心安らかに今この時間も剣を振り回していることでしょう。

マリアージュ様はさすがに隣の国なので、妹姫が攫われたことは知っているのですが、何分、皇太子妃ともなれば好き勝手に故国を訪れるわけにもいかず、姫様救出の知らせに喜んだものの、無事な顔を見に里帰りされるのはまだ先のことになるかと思われます。

つまり、今現在この城にいる王子王女はこのアルフリード様とルイーゼ様だけなのです。

「よかった。無事か」

アルフリード様は私の顔を見てホッと安堵の息をつきました。

無事？

と怪訝に思いはしたものの、一人で廊下に佇むアルフリード王子の傍に護衛の人影すら見当たらないことに、私はまたかと呆れの吐息をついてしまいました。

どうやらまた護衛の目に止まらずに置いてきてしまったようです、この方は。

「アルフリード様、どうしてここへ？ 護衛はどうしました？」

私が問いかけると、アルフリード様は今気付いたかのように、背後を見回して、そこに誰の姿もないことを確認すると困ったように笑いました。

「急いできたから、置いてきてしまったらしい。彼らは私を見つけられなかったのだらう。まあいつものことだ」

「……そうですか」

確かに一度見失うと、再度認識するのは困難ですからね。

私は護衛の騎士たちに深く同情しました。

役目を果たせなかったとしてきつとあとで騎士団長様にこっぴどく怒られるのでしょうか。

でも護衛の騎士たちがこの方を見失うのも仕方ないことなのです。

隠密王子。

それがアルフリード様の密かな呼び名です。

といっても別にスパイ活動しているとかいうわけではありません。

まるで『隠密』のスキルがあるかのごとく、あらゆる場面で存在感がないからなのです。

護衛の騎士はただ廊下を歩いていても目を離したとたんに、存在を認知できなくなる。

女官長や侍従長、はたまた部下達は王子に用事があっても彼を見つけれずに断念する。

気付いたら傍近くまで寄られていて、心臓に悪い思いをした、等々。

挙げればきりがありません。

私も姫様も何度も心臓に悪い思いをさせられました。

知らないうちに姫様の部屋に入っていて、いきなり声を掛けられたりしたのです。

先触れもなく、部屋の外の兵士はきつと認知できなかったのですよ。

私と姫様の寿命はアルフリード様のせいで確実に何年か縮んでいくのではないのでしょうか。

そう。昨日だって。

勇者様が凱旋したあの広間にもきつとアルフリード様は居たと思うのです。

というか居ないわけではないのです。妹が帰って来たのですから。ですが、私は残念ながら一度としてその存在を認識できませんでした。

他の人も恐らく同じでしょう。

その存在の希薄さは城の七不思議にあげられるほどですからね。

そして更にその存在感のなさを決定づけているのは、容姿です。

姫様と同じようなオレンジがかった明るい金髪に、翠色の瞳。

美男美女を父母に持ち、妹と姉は絶世の美女。

なのに——アルフリード様本人は可もなく不可もない顔。

先代国王様（現国王陛下の父君）に似て平々凡々。

すなわち、モブ顔なのです。

造作は悪くはないのですが、特徴がないと言いますか……まるで他人事とは思えない形容の持ち主です。

一般人の格好をさせて街中に放り込んだら同化して見失うこと間違いなし。

私個人はそのモブぶりに親しみを覚えるのですが、王族としては

どうかと思わないではられません。

その存在感のなさはほとんど致命的ではないかと思うのですよ。大きい声では言えないですが。

ちなみに第一王子のエンヴァルト様もわりと平凡顔です。

どうも美形遺伝子はすべて王女様方にいつてしまわれたようですね。

ですが、エンヴァルト様はアルフリード様にはないものを持っています。

すなわち——存在感。

熱血タイプで剣術のことで頭がいっぱいのエンヴァルト様の存在感は半端ではありません。

暑苦しいくらいです。存在感がありすぎて。

きっとアルフリード様が持って生まれるハズの存在感を、王妃様のお腹の中で全てエンヴァルト様が奪ってしまったのでしょうか。

みんな密かに言ってます。

エンヴァルト様とアルフリード様を足して二で割ると丁度いいのに、と。

……私もそう思います。

いろいろな意味で残念な王子様。

それが目の前にいるアルフリード様です。

ですが、付け足しのようで申し訳ないですが、性格は良いのです！
穏やかで誠実で、真面目で。

存在感のなさがそうさせるのか、押しの強いところなどどこにもなく、言動には謙虚感すらあります。

きつと良い文官になったことでしょう——王子様でなければ。

誰が見ても文官肌なのに、エンヴァルト様が留学しているせいで代理で城の警備担当の責任者になってしまったアルフリード様。

そのせいで姫様が攫われた後は非常に忙しく、しばらく顔を見合わせてなかった気がします。

単に存在に気付かなかっただけという可能性もありますが……。

でも、そのアルフリード様はなぜこんな所にいるのでしょうか？

私は廊下に立つ王子を見上げながら首を傾げました。

モブ顔でも王子様は王子様です。

ここは使用人が住む地域なので王族がくるべき場所ではありませんのに。

「ここに、勇者殿が来ていると聞いたのだが……」

真剣な面持ちでアルフリード様が言われました。

私は納得しました。

勇者様に急ぎの用事があるからここまで足を運んだのでしょうか。

「居りますよ」

私はアルフリード様を通すべく、身体を横にずらしました。

アルフリード様は迷わず室内へ。

ですが、その視線は部屋の中で泰然と佇むグリード様にピタッと向けられて離れることはありません。

私は扉を締めて、改めて部屋にいるどっちも普通じゃない男たちに向き直りました。

男二人はなぜか無言で視線を交し合っています。
何なんでしょうか。

……この狭い部屋に大人三人は非常にづらいものがあるので、何か用件があるなら、どこか他所に行って話し合ってもらえないでしょうかね。

観察しつつそう思っていた私でしたが、ふとここにいる二人が対極の存在であることに思い至って、なんともいえない気分になりました。

ただの村民として生まれたが、存在感&カリスマ性バツグン。王子様のような容姿をもつグリード様。

片や、王子として生まれたものの、存在感が希薄でカリスマ性ナニソレ美味しいの？な、モブ顔のアルフリード様。

生まれだけ取り替えれば、王道王子様とモブ村民の誕生じゃないですか！

……運命って皮肉なものですね。
そう思った瞬間でした。

隠密な王子様（後書き）

王道から外れている王子様で申し訳ないです。

勇者様 vs 王子様

やっぱり現実には物語のようにはいかないようです。

狭い部屋で無言で見つめあっているグリード様とアルフリード様を見ながら残念な気持ちになる私です。

それにしても、どうしてお二人は何も言わずに視線を交わしているだけなのでしょうか。

アルフリード様は勇者様に用事があつてこんなところまでいらしたはずなのに。

……まさか私が居るから話せない、とか？

男同士の話や、何か重要な機密について話をしたいのかもしれない。一介の侍女が知る必要のない事を。

それなら狭い部屋ではありますが、喜んでお二人きりにさせてあげますとも！

そう思つてその旨を伝えようと口を開きかけたときでした。アルフリード様がいきなり私の方を振り向いて、

「アーリア、大丈夫か？ 何か変なことをされなかったか？」などと思ひもよらないことを言つたのは。

「は？」

私は何を言われたのかわからずキョトンとしました。

そんな私にアルフリード様は、

「だから、彼に、だ」

と、グリード様を指し示して言われました。

「は？」

私は再度キョトンとしました。やはり何を言われたのかさっぱりわからなかったから。そしてなぜそれをアルフリード様が気にされるのかも。

ですが、言葉の内容が理解するにつけて、先ほどの光景が脳裏に蘇りました。

長い睫毛が影を作っているグリード様の秀麗なお顔のドアップが近付いてくるその光景を。

私の唇にふつと暖かい息がかかったその感触を――。

あああああ、ありました！ 何か変なこと、ありましたとも！
キスされそうになってました！

私は熱が顔にのぼってくるのを感じました。

未遂ではありますが、確かにあの時グリード様は私に……。

その真っ赤になった私の態度に何かピンときたのでしょうか。アルフリード様は血相を変えました。

「まさか、もう何かされたのか！？ ああ、ルイーゼから勇者殿がアーリアの部屋に行ったと聞かされて、二人きりにしてはまずいと慌てて来たのに、遅かったか……！」

「え？ え？」

なんだか矢継ぎ早に言われてよく分からないながらも、どうやらアルフリード様がこんなところに来た理由は思っていたのとは違うらしいのが、おぼろげながらも理解できました。

しかもなにやら私が顔を赤らめたせいで妙な誤解を与えた模様。マズイです。

既成事実とか面倒な事態にならないうちにこの誤解は解いておか

ないといけません！

「あのアルフリード様、私は別にグリード様に何もされていませんよ？」

そう、未遂だったですからね！

私のその言葉を継ぐように勇者様が言われました。

「そうです。アルフリード殿下。私は彼女に何もしていませんよ……まだ」

そう言っつてうつすらと笑みを浮かべるグリード様。

最後の言葉がやけに意味深です。

まだだなんて、これから何かする気満々なのが窺えてしまえますよ！ 恐っ！

——グリード様のような見目麗しい男性に求められる。普通の乙女ならここで胸をキュンとさせるところでしょう。

が、なぜか私に走ったのは悪寒でした。

ちよつとばかり背中にゾクツとくるものが……。

これは以前恋人持ちの先輩侍女が『彼の私を求める視線や言葉にゾクゾクするの』と言っていた、期待交じりの震えとは十中八九違うものだと言致します。

甘美な震え？

糖度はゼロですよ、ゼロ！

などと私が背中をゾワゾワさせているうちに、意味深なグリード様の台詞に同じような不穏なものを感じたらしいアルフリード様は、キツと睨みつけるように勇者様に振り返りました。

「この城でそんな不埒なことはさせない！ それに、アーリアはま

だ返事をしたわけではない。まだ君の婚約者ではないんだ」

「もちろん、それはわかっています。だからお互いを知ることが大切だと思ってます」

「だからと言って、私室に二人きりはダメだ！」

「おや……」

そのアルフリード様の言葉に、グリード様がくすりと笑いました。けれど、目が、目が全然笑っていません！

絶対表面だけの笑みですよ、あれは。

そのニセモノの笑顔を浮かべたグリード様はアルフリード様に意味ありげに言いました。

「貴方にそれを言われるなんて、心外ですね。アルフリード殿下。

……ルイーゼ姫が攫われた次の日の夜のことをお忘れか？」

「……なっ！」

アルフリード様は勇者様の言葉を聞いたとたんに絶句し、次いで顔を真っ赤にさせました。

私には何を言っているのかさっぱり意味が分かりませんが。

ルイーゼ様が攫われた次の日の夜とは何のことでしょうか。

ですが、アルフリード様には何か身に覚えがあつたのでしょうか。

いきなり動揺し始めました。

「ど、どうしてそれを？ い、いや、それは、べ、別にやましい思いで来たわけでは……」

しどろもどろというのはこういうのを指すのでしょうか。冷汗かいてますよ、アルフリード様……。

反対にグリード様は余裕綽々です。

「私も別にやましい思いでここに来たわけではありませんよ」

目の笑ってない笑みを浮かべつつ、さらっと言いました。

さっきキスされそうになったのは私の幻想でしょうか、と思わず内心ツツコミ入れた私ですが、こうも一方的に攻められているアル

フリード様が何だか気の毒になったので、助け船を出すことにしました。

つまり、話題転換です！

「そ、そういえばアルフリード様に会うのは久しぶりですね」

その私の言葉に、動揺を隠せない様子でありながら、振り返ったアルフリード様は明らかに安堵の色を浮かべておりました。

……本当に、ルイーゼ姫が攫われた次の日の夜とやらに何をしたのでしょうか、この方は。

まあ、その当時姫様のことしか頭になかった私には関係ない話でしょうけど。

「そうだね。本当にこうして話すのは久しぶりだ」

苦笑するアルフリード様。

「でも仕方ないですね。アルフリード様は城の警備の責任者ですものね」

私は頷きながら言いました。

対人間である兵士や騎士の警備もさることながら、対魔族用の防備を魔法使いたちと連携して行うのもこの方の役目です。

だから、マツチヨ魔王に結界をズタボロにされた上に、ファミーユ様が使い物にならなくなったあの当時、アルフリード様はすごく忙しかったはずなのです。

それなのに、姫様が目の前で攫われてショックを受けている私に、気にするなと声を掛けてくれたり気遣って下さった、とてもやさしい方です。

王族という以外はいたって目立たない普通の青年という感じが、それを補って余りある人格者だと思ってます。

存在感がなくても、慕っている人は多いと思いますよ。

……エンヴァルト様に比べれば、ですが。

「いや、忙しかったのはそうなんだが……」

アルフリード様は困ったような弱々しい笑みを浮かべて言いました。

「アーリアの様子を見ようと思った時に限っているいろんな事が起こってね。突然水が降って来たり、突風で物がぶつかってきたり、突然足を取られて階段を踏み外したり。あと、いつもより遥かに多くの人に声を掛けられて時間がなくなったりとかね。それで、結局会うことができなかった」

……あ、あれ？

何か今非常に大変なことを聞いた気がしますよ？

水が降ってきたり、突風が吹いたり、突然足を取られたりとか――

何か人外の力が働いているような気がするの、私の妄想でしょうか……？

勇者様 V S 王子様（後書き）

勇者様 V S 王子様は完全に勇者様の勝ちのような……。。

何も聞いてません。知りません。分かりません。（前書き）

モブ王子様の好感度を上げてみました！

何も聞いてません。知りません。分かりません。

……まさか。

……まさか。

でも、確かにあの日以来、今日この時まで私はアルフリード様を全然見かけていませんでした！

「あ、あの、アルフリード様？ それって、勇者様たちが姫様の救出に向かった後のことですか？」

私は背中に冷汗が流れるのを感じつつ、アルフリード様に恐る恐る尋ねました。否定して欲しいと願いながら。

ですが――。

「ああ、そういえば、そうだね。勇者殿が来た前日にアーリアとは会って会話をした記憶があるからね」

と、苦笑しながら仰るアルフリード様。

……：そういえばこの方に限らず、今世の勇者様が全精霊の加護を持つていることは知られていないことでした。

『勇者タイムズ』には何の精霊の加護を持つているのか書かれていなかったですからね。

大半の人間は今までのパターンからいつて火か光の精霊の加護のどちらかだと思っていることでしょう。

だから、アルフリード様はその諸々の“邪魔”に勇者様が関わっているなんておそらく夢にも思っていないハズ。運が悪いというくらいにしか考えていなかったでしょう。

でもそれは明らかに——ですよね？

私は確認するようにアルフリード様越しにちらりとグリード様に目をやりました。

グリード様も私を見ていたようで、がっちりと視線がかち合い——。

ふわりと笑みを浮かべるグリード様。先ほどアルフリード様に向けたものと違って本当の笑みです。

……だから決して腹黒かったり、何かを含んだ笑いではなかったのですが——私はそこに何かしらの満足感みたいなものを感じて確信致しました。

間違いなくこの人です！ アルフリード様に起こったアレコレの原因は！

命令したのだから、勝手にやったのかは分かりませんが、この方の意を汲んだ精霊達が妨害工作に走ったのでしょうか。

明らかに公私混同。私利私欲のために精霊使ってますね、グリード様！

……勇者様がこれでいいんでしょうか？

そしてそれと同じくらい気になるのが、グリード様がアルフリード様に嫌がらせ&妨害をした理由です。

対極にあるとはいえ、そんなわけの分からない理由でグリード様が嫌がらせみたいなのをするハズがありません。姫様を救うため、魔王と対峙しようというそんな時に。

とすれば考えられるのはただ一つ。

——私が原因、ですか？

夢にも思っ
てなかつたことですが、アルフリード様はもしかして
？

そんな自惚れた思考など持ちたくないのですが、どう考えてもそこに行き着いてしまうのです。

確かに他の侍女よりは声を掛けてくださる率が高かったと思います。

ですが、それは私が第一侍女で、常に姫様の近くにいるせいだと思っていました！

まさか、まさか、私を特別に思ってくださってるだなんて、モブにはあり得ないことが起こるなんて、夢にも思っておりませんでしたよ、ええ。女神様に誓って！

だって、モブはモブ。ヒロインじゃないのです！

アルフリード様が私を……。

私の頭の中でいろいろな思いがぐるぐるん回りしました。

その主な感情は困惑です。

王子様に愛される王道ストーリーを夢見る乙女には申し訳ありませんが。

ここで嬉しいがるような思考の持ち主なら、勇者様の求婚にこんなジタバタしているハズはございません。

王子様の想い人——なんて面倒な。

私が第一に思ったことはそれでした。

いくらモブ顔で影が薄いとはいえ、アルフリード様はこの国の王子です。第二王子ではありますが、エンヴァルト様に何かあったらこの国を継ぐ大切な身。

ですから公爵か侯爵、もしくは他国の姫など、結婚相手にはそれなりの身分が必要なのです。

だって、万一のことがあったらアルフリード様の奥方様はこの国の王妃になるかもしれないのですから。

その第二王子が子爵家の娘を娶る——そんなの許されるわけありません。勇者様の場合は訳が違うのです。

みんな反対するでしょう。

私だって遠慮したいです。

勇者様の妻になるスキルだってないのに、王子妃になるスキルなんてどこを探してもあるはずありません！

大切なので何度も言います。

私はレベル1のモブなんです！

戦闘に巻き込まれれば真っ先に昇天するような、そんな雑魚キャラなんです！

王子様の想い人になる？

そんな騒動に巻き込まれるのはゴメンです。

愛人や妾稼業も無理無理。

はつきり言つて——面倒くさい。

ええ、ミルフォード子爵家気質丸出しで言わせてもらいます。

面倒くさい。

——というわけで私は何も聞かなかったことにします。
アルフリード様の想い人が誰であるかとか。

勇者様の妨害工作なんて知りません。分かりません。聞いてません。

全てをなかったことにした私は話題を変えるべくアルフリード様に尋ねました。

「ええと、ところでアルフリード様は何の御用でいらしたのですか？」

ずっと気になっていたことはありません。

最初はグリード様に会いに来たと思ったのですが、それは違うようです。明らかに。

もしかして本当にさっきポロッと言っていたように、狭い私室で二人きりするのはヤバイと思ってこんなところまで来たのでしょうか。

「あー、それは……」

いきなりアルフリード様ははにかんだような弱々しい笑みを浮かべました。

「父上も宰相も、アーリアが勇者殿と結婚することを望んでいるようだ、君が嫌だと思っならはつきり断っていいのだと、それを伝えたくてね。本当は広間でもそう言ったのだが、周りの喧騒でまったく届かなくて……」

ああ、やっぱりあの広間にちゃんと居たんですね、アルフリード様——って、違う！

ツッコミ入れるけど、そうじゃなくて！

——ちよつとだけ胸がジーンとしました、私は。

そう言っ下さつたのはアルフリード様が初めてです。

誰も彼もが内心はともかく国益のために勇者様を繋ぎとめると無言で圧力かけてくる中、断つてもいいとはつきり口にくれたのは。

「アルフリード様……ありがとうございます」

私はアルフリード様につこり笑って言いました。

もちろんアルフリード様が言うように簡単に断れる状況ではないし、断つて、じゃあその後はどうなるんだとツツコミ入りたい部分もあります、ここは素直に私の心情を慮って下さるアルフリード様に感謝の意を表したいと思います。

だって、こんな風に言って下さったのはアルフリード様だけですよ。

モブ顔だけど、本当に良い方です。

これで王子様でなくて、男爵とか子爵や伯爵子息だったらなあと思わないではないですが、こればかりはどうしようもないですね……。

おっと、私は何も聞いてない、知らないのでしたっけ。

「それでだな、アーリア、もし……」

一歩前に踏み出し、顔を若干赤らめながらアルフリード様が何かを言おうとしたその時でした。

「アルフリード殿下」

その声が響き渡ったのは。

……グリード様の声でした。

静かな静かな、凪いでいるような声音です。

ですが――。

私は何かのフラグが立ったような気がしたのです。

何も聞いてません。知りません。分かりません。（後書き）

恋愛フラグを面倒の一言でへし折る主人公……。

夜久珠姫様が勇者様&アリア、リユファス皇子&ルイーゼ姫、アルフリード王子のイラスト描いて下さいました！
興味がある方はぜひご覧になってくださいませ！

夜久珠姫様の運営サイト「Pure moon」

（<http://pure-moon.sakura.ne.jp>

／

「イラスト」置き場に入っています。

隠密王子の秘密？

勇者様は嫉妬深いです。

これは広間での言動でもうすでに判っていること。

私は今現在の状況や自分の言動などを思い出して血の引く思いがしました。

他の男性ににつこり笑いかけてしまった……ですよね、私？
しかもグリード様の目の前です。

……立ったフラグはアルフリード様の死亡フラグでしょうか。それともシュワルゼ国の滅亡フラグでしょうか。

それともしくは——私の拉致監禁フラグでしょうか。

こんな状況にもかかわらずそんなツツコミを内心しつつ、私は恐る恐る勇者様に視線を向けました。

でもそこに見たものは静かな真剣な眼差しを湛えたグリード様。
私が恐れて——そして半ば予想していたあの昏い焰を宿した目ではありません。

その目はとても静かで——というと聞こえはいいですが、要するに何の感情も映さないガラスのような眼差しで、アルフリード様を見据えていました。

私がグリード様を見るのとはほぼ同時に振り返ったアルフリード様はそれを見て、たじろいだようです。

それはそうでしょう。さっきまでニセモノでも笑みを浮かべていた人物が、振り返ったら無表情だなんて恐すぎます。

でも、姫様の言うことが本当なら、これが本来のグリード様なのでしょう。

「アルフリード殿下」

表情と同じく何の感情をうかがわせない淡々とした声で、再びグリード様が言いました。

だけど、次にその言葉から出たのは私もアルフリード様も思いもよらないことでした。

「この城の警備の担当者は殿下だとお聞きしています。ですから貴方に直接申し上げるのが手っ取り早いと思います。ここの対魔族用の結界にはいくつか穴があいてますよ」

「——は？」

アルフリード様はキョトンとされました。

これはアレですね、思いもよらないことを言われて、全くグリード様の言葉が頭に入っていないですね。

……といっても、私も同じようにキョトンな状況ではありますが！

そんな呆ける二人の為に、グリード様は最初から丁寧言い直してくださいました。……淡々とですが。

「この国の魔法使い達が対魔族用に張った結界ですが、所々に甘い部分があります。おそらく魔法使いの個々の実力に差があるからでしょう。堅固に張られてる部分と、守りが薄い部分が混在している。普通の魔族相手ならそれでも大丈夫ですが、幹部クラスの魔族だったらその結界の薄い部分について侵入できるでしょう」

「なんだって!？」

勇者様の仰ることを正確に理解したアルフリード様は仰天しました。

それはそうでしょう。

ここ何日間も寝る間を惜しんで魔法使い達が張った結界に穴があるなんて。警備の総責任者としては看過できることではありません。

魔王は倒されたものの、まだ幹部クラスの魔族が生きている現状ではそれは致命的なのです。だって、逆恨みして彼らがこの国を襲撃することだって十分考えられるのですから。

「すぐにファミール殿と相談して対策を講じた方がいいと思います」
「そ、そうだな。い、いやしかし……」

「城に掛けるほどの結界はすぐに張ることは出来ないのは殿下もご存知のハズ。今は一刻も早く対策を取ることが大事かと思います」

「……う。わかった」

しぶしぶ納得するとアルフリード様は扉の方へ足を向けました。

私も今回の騒動で初めて知ったのですが、城のような巨大なものに一時的ならともかく常時稼働している結界を張るのは非常に大変なことなのだそうです。

だから魔王に壊された後、魔法使いたちが不眠不休で何日もかけて術の構築にあたったわけですが。勇者様に言わせるとそれでも穴だらけだとか……。

何となくアルフリード様をこれから立ち去らせるための方便のようない感じがしないでもないですが、こんなことで嘘を言うはずもないので、実際守りの薄い部分があるのは事実なのでしょう。

確かにこれは大事です。

速急に対策を取るべき事態です。

「いいかい、アーリア、気をつけるんだぞ。何かされそうになったら大声で叫びなさい」

私の部屋から出たアルフリード様は、扉のところで見送る私に最後にこう言いました。

「は、はい」

叫んで他の人に二人きりで狭い部屋にいたことを知られるのも非常に困るんですけどね。

去っていくアルフリード様を見つめながらそうツツコミ入れる私でした。

それともしかして気をつける云々はグリード様への牽制なのでしょうか。

……牽制になればいいと、期待します。

だってこれでまたグリード様と二人きりになってしまったわけですから。

私はアルフリード様が乱入する直前にキスされそうになっていた事実を思い出し、胃のあたりに冷たいものが溜まるのを感じました。また同じことが起こるのでしょうか。

貞操の危機、再び？

何となく殿下の牽制などこの方にとっては屁でもない気がしますし。

このまま私は逃げ出すべきでしょうか……？ 人がたくさんいる場所に。

でも、そんな公衆の面前でキスされたりしたら、もうそこで終わりのような気がします。

外堀が完全に埋められてしまいます。内堀ですら埋め立てられそうです。

諦めという名の土で。

そう思いつつ、私は扉から振り返りました。

そしてさっきまでの無表情とは打って変わったような煌びやかな微笑みを目にする事になったのでございます。

私はギョツとしました。

なんですか、その使用前使用後のような変わりようは！ 怖いじゃないですか！

……勇者様一行が大騒ぎする気持ちがわかりました。

デフォルトの無表情からいきなりのコレは確かに引きます！ ドン引きです！

慄く私を尻目に、グリード様は微笑みながら言いました。

これまた予想外のことを、です。

「アルフリード殿下には気をつけてください」

「——は？」

「彼は『隠密』のスキルを持っています」

「……は？」

アルフリード様が『隠密』のスキル持ち？

そんなことはこの六年間で聞いたことがない私はビックリです。ですが——『隠密』のスキルを持っているなら、あの存在感のなさも領けるというものです。なにしろ『隠密』スキルは気配を消して存在を気付かれないようにするスキルですから。

つまり隠密王子は本当に隠密王子だったわけですね。

でも——。

スキルは気軽に取得できるものではありません。修行する必要がありますし、相性もあるから必ず得られるものでもありません。

そしてこれが一番重要ですが、取得したスキルを使いこなすのに魔法が必要なのです。

私なんぞは魔力ゼロですから、スキルなんて夢のまた夢、遠すぎて欲しいとも思わないですね。

そして、アルフリード様にも魔力があるなんて話は聞いたことがあります。

ファミール様も言っていましたもの。王族で魔力があるのは王妃様と第一王女のマリアージュ様、そして第二王女のルイーゼ様だけだと。

つまり——女性だけしか魔力を持っていないです。それだって、魔法使いになるには全く足りない、普通に毛の生えた程度の魔力のレベルです。

男性陣に至っては微々たる力も感じられないとか。

そんな私同様魔力を持たないはずのアルフリード様がどうやってスキルを使いこなすというのでしょうか。

そもそもどうやってスキルを取得できたのでしょうか？

「生まれつきですよ、彼のは。隠しスキルといってもいい。だからファミール殿も気付いてないと思います」

「う、生まれつき？」

「はい。たまにいます、生まれつきスキルを持っている人間が」

つまり、アルフリード様は生まれたときから『隠密』のスキル持ちだったということになります。

「生まれつきスキルを持っている場合は、常に発動しているか、普段は沈黙していて何かのきっかけで発動するかのとっちなります。殿下の場合は前者で常に発動状態になっているようです。それでも普通は成長と共に魔力でそのスキルもコントロールしていきけるようになるはずなんですが……殿下には魔力がないので制御不可能になってますね」

なるほどと私は納得しました。

つまり、魔力がないアルフリード様は持って生まれた『隠密』スキルをコントロールできなくて、常に垂れ流し——いえいえ発動し続けた状態になっているのですね。

だから常に存在感が薄いのです。

だって隠密ですもの、そういうスキルなんですもの。

「彼もうすうすは感づいていると思いますよ、自分の能力に。それを利用してわざと護衛の目から外れたりして誰にも知られないように行動している時があります」

そこまで言ってグリード様はうつすらと酷薄な笑みを浮かべました。

「気付かれないのをいいことに、夜中に部屋を訪れて眠る貴女を見つめていたりとか、ね」

……。
……。
……。

——なんですと!？

私はあんぐりと口を開けました。

隠密王子の秘密？（後書き）

ちなみにアーリアの『ツツコミ』スキルも生まれつきで、常時発動しています。

どっちに気をつければいいのでしょうか

アルフリード様がその『隠密』スキルを使って誰にも見られないように真夜中にこの部屋を訪れて、気付かないで爆睡していた私の寝顔を見ていったと。

そう言ってるんですね、グリード様！

そ、それって、それって……アブナイを通り越してヤバイのではないのでしょうか！ 主に私が！

「そ、それは本当ですか！？」

私は慄きながらグリード様に尋ねました。

そんな私に、グリード様は頷いて、

「女神と聖剣に誓って本当のことです」と、言いました。

勇者様が女神どころか聖剣にまで誓われるってことは、嘘でも冗談でもなく、真実だということですよ。

だけど……嘘であって欲しかったです！

アルフリード様、モブ顔で無害だと思っていたのに！

下手をすれば夜這い一直線じゃないですか！ 恐あ！

危ない人は勇者様だけだと思っていたんですが、実は身近にもすでにいたのですね。

……地味にシヨックです。

「……それはいつのことですか？」

「ルイーゼ姫が攫われた次の日の夜のことです」

私はああ、と理解しました。

さつき勇者様が仰っていたのは、これのことだったのですね。
そしてアルフリード様はそれに対して思いっきりうるたえて『別にやましい思いで来たわけではない』ような弁解していたわけですか……。

アルフリード様、ここにいないけど突っ込ませていただきます。
侍女とはいえ女性の部屋に勝手に侵入しておいてその弁解は……。

「姫のことで落ち込む貴女を心配して様子を見に来たようですね。
そして眠っている貴女を起こすのは可哀相だから……と自分で自分に言い訳しながらノックもなしに部屋に入っていききましたよ」
くすりと笑いながら言うグリード様。でも目、笑ってませんよね？
それに、その場面を見てきたように仰るそんな貴方も十分恐いのですか……。

だって、ルイーゼ姫が攫われた次の日って、勇者様はまだこの国に来ておりませんでしたよね？

王様が勇者様に使者を立てる前のことですよ？

例の『分析』&精霊の力で過去が見えるのでしょけど、それでも恐いですから！

知っている理由が判っていても恐いですから！

「幸い寝顔を見るだけで彼は満足して帰って行きました。でも次がどうなるかわかりません。だから精霊に彼が貴女に会いに行こうとするのを邪魔させたのです。貴女を守るために」

「……アリガトウゴザイマス」

私はぐったりしながらお礼を言いました。

守ってもらって感謝はしているのです。

人畜無害に見える——本当は無害ではなかったわけですが——アルフリード様だって、まかり間違って私なんぞに襲いかかりなくなることもあるかもしれないですから。

会わないでいるのが一番安全なのでしょう。

だから感謝はしているのです。ありがたいと思っっているのです。

ですが……どうしてでしょうか“どっちもどっち”という言葉が思い浮かびます。

そしてどっちも遠慮したい気持でいっぱいです。

「ですが今日はちょっと油断しました。どうやら不幸続きなのでファミール殿に言って“護り”を強化したようですね……全くよけいな事を。妨害しきれずにここまでたどり着かせるなんて不覚です」笑顔でそう言っただけのグリード様。しかも、更になにっこり笑って言うには――。

「でも大丈夫です。あんな護りなどいつでも破棄できますから。大勢人がいるところならともかく、二度と人気のない場所で会わせたりしません」

「お、お待ちください。護りを破棄して……」
私は慌てました。

思い出すのは、マツチヨ魔王が来た時のこと。

城の結界を破壊し、姫様を攫う際に、ファミール様がかけた護りの魔法をねじ伏せた魔王。

自分の掛けた魔法をねじ伏せられたファミール様は人事不省に陥り、最近ようやく復活したばかりだというのに。

アルフリード様にかけて魔法を破棄したら、またもやファミール様が……。

「安心して下さい。ファミール殿には何も起こりません」

私の言いたいことが分かったのでしょうか、グリード様が優しく微笑みます。

……笑顔は優しいのです。優しいのですが――。

「気付かせません。護りの枠はそのままに、中身を若干“修正”するだけです。貴女に近付こうとする時だけ無効となるように、ね。大丈夫です、その際にもファミール殿に気付かせるへまはしませんから」

「そ、そうですか」

何かサラッとすごいこと言ってますグリード様。優しい笑顔とのギャップが激しいです。

先にも言いましたが、ファミール様は国付きの魔法使いの中で一番の実力者なんですけど……。

そのファミール様に気付かせずに彼の魔法を“修正”するだなんて、どこまで反則なんですか、勇者様。

「でも、アーリア。貴女自身も気をつけないといけません」

「え？」

いつの間にかすぐ目の前に立っていたグリード様が私の手を取りました。

ギョツとする暇ありませんでしたよ。

何しろ脳が状況を理解する前に手を取られていたのですから！

思わずのけぞり、グリード様の顔を見上げる形になった私に、覗き込むような形で彼は言いました。

「アルフリード殿下に油断してはいけません。いいえ、彼だけではなく、他の男にもです。二度と……あんな笑顔を他の男に向けない

で下さい」

……グリード様の私を見下ろす目が、昏い光を湛えていました。無表情のあのガラスのような目とはまるで違う感情を含んだ目。なのに、どこか昏い昏い深淵を思わせるその目は、なぜかあのガラスを思い起こさせます。

なぜこんな目をなさるのでしょうか。

……はつきり言って恐いんですが！

恐さのあまりに返事をしない私に、グリード様はその昏い焰を宿した目をすうつと細めて言いました。——小さな低い声で。

「でないと私は自分を抑える自信がありません」

私はその言葉にヒヤツとしました。

とっさに何かがヤバイと思ったのです。おそらく本能でしょう。

そしてその防衛本能のせいでしょうか、反射的に口にしておりました。

「向けません、向けません、他の男には向けませんとも！ グリード様だけです！」

——と。

あ、何かスイッチ押したかも、と思った時は遅かったです。

「アーリア」

勇者様の声の名前呼ぶ声が聞こえた瞬間には胸に抱きしめられておりました——。

ノオオオオオオ！！

私は馬鹿か！ 学習能力は無しか！

暖かな体温に包まれながら、私は自分で自分にツッコミせずには
いられませんでした。

どっちに気をつけねばいいのでしょうか（後書き）

危ないのはどっちもどっち……。

外堀が埋まっていくな音がします

アルフリード様からはグリード様を守って下されます。

ですが、グリード様からは誰が私を守ってくれるのでしょうか。

答え——いないです。皆無です！

ですから私はこの再びの貞操の危機？を自分で切り抜けねばなりません！

私はもがきました。

ですが、さすが勇者様、びくともしません。ぎゅうぎゅうに拘束されております！ ヤバイです！

この際、アルフリード様でもいいです！ 戻ってきてください！

そう心の中で思った時でした。

コンコンというノックの音が響いたのは。

ですが、助かった！と思いかけた私の耳に届いたのは——

「アーリア、入るわよ、具合どーお？」

同僚である侍女Bの声でした。

そして言葉が終わるや否や、こっちが応える前に扉がガチャッと開いたのです。

ノックの意味はどこ行った！とツツコミ入れる間もない突然の出来事でした。

「姫様がアーリアの具合を気にされていたから様子を見にきた……の……」

侍女Bことベリンダ・アースワーズ男爵令嬢は、そう言いながら

入ってきて——そして私たちを見て固まりました。

私は冷汗をかきながら、運が悪いことは続くと、そう思わずにはいられませんでした。

ベリンドは私より一つ年下の侍女仲間です。

ピンクがかったふわふわな髪と淡い水色の瞳を持つ美人さん——でも姫様には劣る——で、先日そこそ羽振りのよい子爵家の長男と婚約&結婚退職が決まってウハウハ、なのにすっかり広間では勇者様に黄色い声を上げていた同僚です。

困惑している私の空気を読まずに、

『おめでとう、アーリア！ あの前勇者様に求婚されるなんてすごいわ！ もちろんOKするのよね？ 結婚式には呼んでね！』

などともうすでに決まったことのように祝福してくれた友人でもあります。

あ、言っておきますが仲はいいんですよ？

ですが——おしゃべりなんです。それが玉に瑕なんです。

ついでに人の話を聞かない時があります。頭の中に生やしているお花畑のせいかもしれませんね。

固まったままベリンドの視線が私に移り、私を抱きしめている勇者様に移ります。

そしてなぜか私たちの横のあるベッドに視線が移りました。

勇者様に拘束よろしく抱きしめられているのでなければ、私はベリンドの肩を掴んでゆさぶってその視線の意図を問いつめていたことでしょう。

呆然と私たちに無遠慮な視線を送っていたベリンドの顔に不意に

理解の色が浮びました。

これまた勇者様に拘束よろしく抱きしめられているのでなければ、私はベリンダの頭を引っつかんでその頭で何を考えていたのか問いつめていたことでしょう。

「お邪魔しましたわ。オホホホ。消えますからごゆっくり！」

わざとらしい笑いを浮かべたベリンダは、こつちを熟知り顔で見やりながら後ろ脚で後退していきます。

そして部屋の外に出ると、入ってきた時とは逆に静かに静かに扉を閉めていきました。

「では失礼します」

などと言いながら。

パタンと小さな音を立てて扉が閉まりました。

直後聞こえてきたのは、バタバタと廊下を走り去る足音。

私は終わった、と思いました。

さっそくこの話は城中に知れ渡るでしょう。

私と勇者様が二人きりの部屋で抱き合っていたと――。

非常に嫌な予感がします。

ベリンダ……ベッドは綺麗なままで、使った形跡がないことを頭にしっかりと叩き込んでおいて欲しいです。せめて。

そして、勇者様、いつまで抱きしめていますか！

「グリード様、離してください！」

私はもがきました。

このまま流れてベッドに……とかになったら非常に困るのです！

ところが私の抵抗なんぞものともしないでがっちり抑え込んだま

ま、グリード様は抵抗している事実そのものをスルーしてこんなことを言いました。

「魔族の残党を始末したら、一度エリューシオンに帰ろうと思ってます。その時には——貴女と一緒に連れて帰りたい」

「——は？」

一瞬何を言っているのかわかりませんでした。
だってこのもがいている状況に見合った台詞ではないのですもの。
混乱して抵抗することをやめた私に、尚もグリード様は続けた。

「リユファスとルイーゼ姫も結婚が決まりそうなので、彼女も貴女と一緒に来ることになりそうです。姫も慣れない国で一人よりは心強いでしょう」

「ちょ、ちょっとお待ちください!？」

エリューシオンにつて……何か求婚を受け入れた前提の話ですよ
ね、それ!？」

私は受け入れたつもりはこれっぽっちもないのですけど！

私は危機感を覚えました。

このまま流されたら、こう、なし崩し的に婚約が成立してしまう
のではないかと。

……いえ、気のせいじゃないです！

外堀が埋められているのを感じます！ ザックザックと埋められていく音が脳内で聞こえます！

ここは膝を詰めてよく話し合わないといけません。手遅れになる前に！

「あのですね、グリード様、私はまだ返事をしたわけでは――」
「それと、これお守りです。嵌めていてください」
「無視かい！」

と思わずツツコミ入れる私を完全スルーし、勇者様はいつ間にか手にしていた金色の腕輪を私の左手首に嵌めたのです。

片手で私を拘束しつつ、もう片方で器用にも力チリと。

……はい？

私は呆然と自分の手首を見下ろしました。

そしてその間に、私から手を離れたグリード様は腰のポケットから取り出した銀色の腕輪を手にとってご自分の左腕に嵌めました。

私はそれにすら気付かず、じつと自分の左手首に輝く見事な細工の腕輪を眺めておりました。

それは光の女神レフェリアの花と呼ばれるリーリスの花をモチーフにした腕輪でした。

幾重にも重なる花弁と葉の模様が見事に彫金されています。名のある細工師の手によるものでしょう。

その腕輪の内側には文字が彫りこんでありました。

私とグリード様の名前と、祝福の詞ことばが。

私はこの腕輪が何であるか悟って頭が真っ白になりました。ツツコミの言葉すら思い浮かびませんでした。

のろのろと顔を上げてグリード様の左手首に輝く銀色の腕輪を見つめます。

闇の神アーティラードを象徴する月光花と呼ばれるラティスの花をモチーフにした腕輪。四枚の花弁を持つ小さな花が連なるように彫られたその細工も見事なものでした。

おそらくその銀の腕輪の内側にはグリード様と私の名前と祝福の詞が彫られているでしょう。そういう伝統ですから。

光の女神レフェリアと闇の神アーティラード、その夫婦神それぞれを象徴した腕輪。

対の腕輪。

——将来を誓い合った男女がその証に嵌める腕輪。

……それがなぜ私の腕にあるのでしょうか？

——私が慄然自失の状態で腕輪を見ていた頃。

姫様の部屋ではルイーゼ姫とベリンダのこんな会話がなされていました。

「大変です、姫様！ 勇者様がアーリアの部屋にいてベッドを前にして抱き合っていましたわ！」

「ええ！？ 何かの間違いではなくて？ それにお兄様は？ 二人きりにしてはアーリアの評判にかかわるとか何とか言いながら部屋に向かったと思ったのだけど……」

「アルフリード様の姿は見えませんでした。いつものようにすれ違

ったか見過ごしたかもしれませんね。でも、アーリアの部屋で二人が抱き合っていたのは確かです！ きつと求愛を受けていたんですよ！」

「本当？ アーリアはグリード様にドン引きしていたハズなので、そう簡単に受けるとは思えないのだけど……」

「でも、抱き合った理由が他に思い浮かびません！」

「……それは確かにそうね」

「ですよ！ 姫様とアーリア。リユファス様と勇者様の婚約でこれから忙しくなりそうですね！」

「そうね。でもエリューシオンにアーリアが付いてきてくれるのなら心強いわ。……本当に抱き合ってたの？」

「女神様の名にかけて本当です」

——知らないところで外堀が埋まっていつてるようです。

ジョブチェンジ

この世界では結婚の約束を交わした男女は、光の女神レフェリアと闇の神アーティラードを象徴した対になる腕輪を身につけます。

指輪ではありません。

指輪は主に装飾品が、魔具として使われるものですから。

魔具は魔法を閉じ込めた装飾品の総称で、鍵となる呪文を詠唱することで閉じ込められた魔法が発動するようになっていて、大変貴重なものです。

多少の魔力があれば発動できる便利なものなのですが、基本的に魔法使いにしか作成できない代物ですし、彼らは主に自分の為に魔具を作るわけですから、恐ろしく高価になるわけです。

魔法使いが魔具を作る理由は簡単。

魔法を発現させるには詠唱が必要なのですが、それを簡略化させるためです。

魔法をいざ使おうとした時、いちいち長い詠唱をするは大変ですからね。

だから彼らはそれぞれ自分が必要だと思っ魔法をあらかじめ特殊加工された装飾品に込めておくのです。使う時には魔具に触れながら発動の鍵となる簡単な詠唱を唱えるだけで済みますから。

だから魔法使いは成金貴族よりも指輪を身につけている場合が多いのです。

ここだけの話、ファミール様もいっぱい持ち歩いているようです。

もちろん、持ち歩きにも腕輪より指輪の方が楽です。

それに、発動させるには触って詠唱する必要があるのですが、もし腕輪が魔具として頻繁に使われるようであればジャラジャラ何重にも

身につける必要がありますよね。それだと、必要な魔法を使うのに間違ったりする可能性もあるわけです。

それを防ぐ意味でも、魔具は指輪の方が都合がいいのです。だって少なくとも10本は付けられるわけですし。

だから魔具は指輪。

そして、腕輪が結婚を象徴するものとなっているため、紛らわしさを避けるため、腕輪の魔具はめったに作らないそうです。

要するに、何が言いたいかというと——腕輪をするのは結婚腕輪として売約済みであることを証明するため身につけるか、完全に装飾品として身につけるかどちらからかだということです。

そして、装飾品の場合、未婚なら必ず右腕につけます。左腕に嵌めるのは既婚者のみ。

そう。つまり——左手首に嵌めるのは、売約済みと世間様に向かって宣言しているってことなのです！

「な、な、な、な！」

私は左手首に燦然と輝く腕輪を見下ろして叫びました。

「なんですか、これは！！！」

「魔具です。お守りがわりですよ」

あっさり答える勇者様。

って、違うでしょう！？

「これは婚約腕輪じゃないですか！ わ、私は返事をした覚えありませんけど！」

「いえ、魔具ですよ。私のと対になるように細工師に頼んだから、

勘違いされてこんな形になってしまっただけです」

うわあ、嘘くさい言い訳をにこやかな笑顔で仰っていきやがりますよ、この野郎——いえいえ、この方！

「でも怪我の功名というやつですね、この形なら誰もこれが魔具だとは思わないでしょう？」

「は、外してください！」

魔具だろうがお守りだろうが、こんなものを嵌めた日には——

血の気が引く思いです。想像すると泣けてきます。

私は腕輪を右手で探って腕輪の合わせ目を探しました。

さつき力チリという音がしたので、どこかで外れるようになっていくはずです。

ところが——何度手で探っても、目で見てもどこにも継ぎ目がありません！

こうなったら無理矢理外すまで！と手をすばめて腕輪を抜こうとしたら——腕輪の輪が急に狭くなってキュツと手首に密着するじやありませんか！

どうやら伸縮性のある腕輪のようですね——って、違う！
抜けないように魔法が掛けられているってことです！

呪いの腕輪か、これは！？

「グリード様、外して下さい！」

私は私は左腕をにかけてグリード様の前に翳しました。
ですが——グリード様は首を横に振ります。

「だめです。これは貴女の身を守るためですから」

「そんなのっ……！」

「聞きなさい」

不意に笑顔を消した勇者様が真剣な眼差しで私に言いました。いえ——・命令です、これは。

私は——思わず口を閉じてしまいました。

だって、そこに居たのは私に求婚したやさしい笑みを浮かべた青年ではなく、魔王と戦い討ち取ったまぎれもなく“最強の勇者様”——女神に選ばれた人間としてのグリード様だったのですから。

グリード様は王ではありません。一介の村民として生まれたれっきとした庶民です。

なのに——国王陛下にですら感じたことのない、従わずにはいられない威圧感のようなものを感じたのです。

いえ、威圧感とは適切な表現ではないですね。

思わず従ってしまうような、しかも嫌々ではなく自ら頭を垂れてしまうような神々しさに溢れた引力を感じたのです。

その強烈なカリスマ性に一介のモブには太刀打ちできようハズがございませぬ。

いますぐ「ははー」と土下座したい気分になるのを止められませんでした。

だけど、それはぐつと堪えました。

たかが侍女A、されど侍女A。モブにはモブなりの引けない理由があるのです！

ここで流されるのは簡単です。

ですが、これは自分の将来に関わることです。状況的に断れないのは確かですが、それでも勝手に決められるのはいくらモブでも許せませぬ。

え？ 外堀がもう埋まっている？
いいえ、まだ内堀残ってますから！ この堀は死守させていただきますとも！

私はぐつとひれ伏したい思いを堪えてグリード様を見上げました。
もしかしたら——睨んでいたかもしれない。

ですが、そんな私にグリード様は真剣な眼差しで言いました。
「貴女は今後狙われます。魔族に、そして人間に。——貴女は自分が考えている以上に重要人物なのです。それを自覚して下さい」
「——は？」

いまモブにはあり得ない言葉を聞いた気がします。
狙われるとか、重要人物とか。
いや、そんなまさか、ねえ？

「もうすでに狙われているかもしれません。『勇者タイムズ』の記事のせいで、貴女が存在が全世界に知れ渡ってしまったから。本当はこの腕輪だって、貴女のことを確認してから渡すつもりだったのですが、そんな悠長なことはしていらなくなっただけ」

——『勇者タイムズ』の記事。

思い出した私は勇者様の言おうとしていることをおぼろげながら理解しました。

そして、自分の顔から血の気が引いていくのを感じたのです。

そうです。あの記事のせいで勇者様の求婚が全世界に知れ渡ってしまったのです。私の存在も名前も。

勇者様は世界の“守り”。どこの国でも勇者様の力を、その政治的価値を欲しがってます。

そのグリード様に影響力を与える存在として——各国が私を利用

しようと考えてもおかしくないのです。

それに、魔族にしてみたら、魔王を屠った勇者様に復讐する手段として、こんな恰好の相手はいないでしょう。

つまり——私は狙われるのです。人間からも。魔族からも。

「だからこれはお守りです。私の腕輪と対になっているので、貴女がその腕輪で私を呼んでくれればすぐにでも貴女の元へ行けます」

そう言いながらグリード様は私の左腕を取って、金色に輝く腕輪をそつと撫でました。そのグリード様の左腕に輝くのは対になる銀色の腕輪です。

「貴女は——必ず私が守ります。魔族からも、人間からも」

「グリード様……」

「だから、その腕輪は必ず身につけていて下さい」

「……わかりました」

私は頷きました。

頭の片隅で『あれ？ 私が狙われるのもすべて勇者様が原因じゃ？ 私に公衆の面前で求婚なんてしなければ狙われることもなかったのでは？』などとツツコミ入れながら。

ですが、私を大切に思っていて、守ろうとしてくれる気持は十分に伝わりました。

そして、それが少しうれしくも感じました。

だって私も一応乙女ですから。守るという言葉に弱いのです。

その上、こんな美形に『必ず守る』だなんていわれたら、胸がきゅんとしなないわけにはいかないのです！

——後から考えれば、このキュンのおかげで油断していたとしか言いようがありません。

だって、この腕輪を嵌めるといふことの重要さをすっかり失念していたのですから！

次の日、姫様の部屋に行った私を待っていたのは、婚約が成立したかのような騒ぎでした。

なぜか——いえ、噂の出所は分かっています——私の部屋で二人で抱き合っていたなどという危惧した通りの噂がすっかり広まっていたところに、女神レフェリアの腕輪を身につけた私が出勤してきたわけですから、そりゃあ勘違いするのも無理はありません。

お守りだ、魔具だと言っても誰も信じないのも。

——ですが、ですが！

この腕輪がもつと違う風に作用するだなんて、夢にも思ってたのです！

侍女仲間の大騒ぎの中、必死に弁明する私に、部屋に飛び込んできた女盗賊のミリー様が放った言葉がトドメになりました。

「アーリア、あの腕輪受け取ったのね！ おめでとう！ さっきグリードに『分析』させてみたら、ジョブチェンジしてたってさ！」

「——は？」

「ジョブチェンジよ。職業変わったわよ、アーリア。いや、正確に言う追加された？」

「は？ 追加？」

私は訳がわからなくてポカーンとしました。

職業？ 私の職業は侍女Aですが、それに何が追加されたと？

呆ける私にミリー様は満面の笑みで言いました。

「『勇者の婚約者』が追加されたわよ！ おめでとう、アーリア！」
「……『勇者の婚約者』……？」

……。
……。
……ゆ。

——勇者様の婚約者！？

あー、……アレですか、この腕輪が原因ですか……。
そりゃあそうですね、魔具や勇者様曰く『お守り』としての役割が与えられたとはいえ、元は婚約腕輪ですもの！

身に付けてればそりゃあ、婚約成立したものと見なされますよね！
……アハハ！

ハハハハハハ……ハ……。

私は脱力してその場にがつくりと膝と両腕をつきました。

私の名前はアーリア・ミルフォード。十八歳。
職業はルイーゼ姫の侍女A。

ですが、どうやら今日から『勇者様の婚約者』にジョブチェンジしたようです——。

ジョブチェンジ（後書き）

ついにジョブチェンジしちゃったようですorz

これで『勇者様求婚する』の章は終了です！

小話（もしくは閑話）を入れた後、新章に入ります。

勇者様パーティのその他のメンバーもようやく本格的に登場の予定。

小話 勇者が恋をしたけど微笑ましさは皆無（前書き）

小話です。勇者様一行がルイーゼ姫救出に出発した直後の頃のこと。三人称にしてみました。

小話 勇者が恋をしたけど微笑ましさは皆無

グリードが恋をした。

それを彼らは天変地異の前触れだと思った。

「少し出掛けてきます」

城を出発し、シュワルゼ国の東にあるミアナと呼ばれる大きな街に來た勇者グリード率いる一行は、高級でもなくみすばらしいわけでもない中級の宿に部屋を取った。

そこでこれからの方針を話し合ったり、旅の準備をするのかと思いきや、リーダーであるグリードは宿に着くなりそう言ってひとり宿を出て行った。

その無表情で淡々とした口調はいつものグリードだった。

残されたメンバーは示し合わせたわけではないのに、宿の食堂の一角に集った。

まだ食事時ではないため、泊り客も外からの食事客もない。話し合う環境としてはまずまずだ。

だが、誰も重い口を開けようとはしない。

その上、みな一様に戸惑ったような表情だった。

実はここまでの道中も彼らは同じ有様だった。いや、正確に言うくと、シュワルゼの王城に着いた時からそうだった。

王や重臣たちの前では取り繕っていたが、かなり困惑していた――いや、混乱していたといったほうが正しい。

彼らは先ほど自分たちの目で見たものが信じられなかったのだ。

実をいうと今でも信じられない。

グリードが、女性にあんな風に微笑みかけるなんて、あんなやさしい言葉をかけるなんて。

しかも抱きしめていた——これが驚かなくて何に驚くというのだ。

普段とまるで違うグリードの態度。

あれはもしかして、もしかしなくても——恋だろうか。

そう思った彼らの頭は混乱でいっぱいになった。

恋！

……あのグリードが？

無表情、無感動。

まるで人形めいた男が、恋？ 鯉？ 故意？

……彼らの思考はここでそれ以上考えるのを拒否した。

それにまだ本人の口から聞いたわけじゃないのだ。何か理由があるのかもしれないし。

そう考えた彼らだったが——城を出てからのここまでの道中も、グリードを、ちらちらと窺うだけで聞きたいのに聞けないといった有様だった。

だってグリードが恋なんてありえない！

でもそのあり得ないことが起きていたらどうしよう？

それぞれ微妙に言い回しが違うものの、全員内心思っているのは同じことだった。

そして一行に奇妙な緊張感を生み出している原因が目の前から消えて、ようやく彼らはそのことについて話をする機会に恵まれたのだった。

「やっぱりあの女性に恋をしたんだろうか……」

難しい顔をして魔法使いのリユファスが重い口を開く。

「信じられないけど、そうとしか思えないわ！ 何あの笑顔！ 世界の終末が来たのかと思ったわ！」

と女盗賊ミリーが言えば、女戦士のファラが頷く。

「ああ。芝居や演技とは思えなかったしな。信じられんが……本気で恋をしたのかもしれん」

「……私としては不確定要素を囲いたくないので、気のせいであつてほしいのですが」

重いため息まじりに言つたのはエルフのルフアーガだった。

「残念ながら——」

空に視線を向けていた神官のレナスが言った。

「グリードが彼女のことが好きなのは確かなようだよ。精霊たちがそう言っている」

神官であるレナスは精霊の加護を持っていた勇者の子孫であるため、精霊の声を聞くことができる。

グリードほどはつきりと姿が見えたり明解な意思疎通ができるわけではないが、彼らの言っていることはわかるし、その気になればこちらから働きかけることもできるのだ。

それで精霊に問いかけたらしい。友人である彼らよりグリードの心の動きに敏感な精霊たちなら分かると思つて。

「今だって、彼女に贈る腕輪を注文しに出かけたらしい。このミファナには名工がいるんだってさ」

「腕輪……」

彼らの間に衝撃が走った。

「もう贈り物攻勢か!？」とリュファス。

「いや、でも展開早くないか？ 出会ったばかりだろう?。」とフラ。

「しかも、件の女性とはちょっと話をしただけだったわよね?。」

とミリーが言えば、レナスは遠い目をして、しかもアハハと乾いた笑いを浮かべて言った。

「どうもそれが対の腕輪らしいんだよねー」

「……対の腕輪!？」

彼らの言葉がハモった。

そして直後、いっせいにドン引いた。

出会ったばかりの女性に、対の腕輪——すなわち婚約腕輪を用意する男。

恐い。恐すぎる。

何か思惑があるのかもしれないが、それにしたって恐すぎる!

色々なことをすっ飛ばし過ぎだ! 主に相手の気持ちを!

「もうこれで決定ですね……」

疲れた顔をしてエルフのルフアーガが断言した。

どこか怯えている風でもあった。

いつも超然とした態度を崩さないルフアーガですらこんなのだ。普通の人間である他の面々は文字通り戦慄していた。

グリードが恋をしたことではなく、それによって明らかになったグリードの性質の一端にだ。

何に対しても感情が持てないグリード。

何も執着もしない。特別な思いを抱かない男。

それが誰かに特別な思いを抱いたとたん、思いつきり斜め後ろに方向転換したらしい。

「なあ、もし彼女が既婚者だったり恋人いたりしたらどうなるのかな……」

レナスが顔を引きつらせながら言った。

全員が一瞬にして青ざめた。

そのいるかどうか分からない旦那か恋人が、闇にまぎれて消されるであろうことは確実だったからだ。

腕輪を用意したということは、何が何でも彼女を手に入れるつもりなのだろう。

そしてそんな彼を止められる存在はこの世にはいない。

なんか、ゴメン。すごくゴメン。

相手の女性（と架空の旦那or恋人）に、彼らは心の中で謝罪した。

これからのことを想像すると、そうしないではいられなかった。

あんな勇者でゴメン、と。

——そして、彼らのその想像という名の嫌な予感が現実にな

るのはそう遠いことではない。

小話 勇者が恋をしたけど微笑ましさは皆無（後書き）

『ゆうしゃ（のぞく）いつころはこんらんしている』

——みたいな感じです（笑）

次も馬鹿馬鹿しい小話が続く予定。

小話 勇者の好きな人ってどんな人？（前書き）

勇者様一行から見たアーリア？の話。

小話 勇者の好きな人ってどんな人？

ひとしきり名前も知らないその女性（と架空の旦那or恋人）に謝った一行は、そこでふつとあることに気付いた。

誰も彼女の容姿を覚えてなかったのだ。

「えっと……茶色の髪だったわよね……？」

ミリーが首を傾げながら言う。

「精霊が言うには瞳も濃い茶色をしている、らしいよ」

とレナスが何かを確認するように視線を空に動かす。

「グリードが抱きとめた時の身長差から言えば、小柄のようですね」とルファアガ。

「広間にいた時にルイーゼ姫の侍女だと言っていたな」

そのファラの言葉に頷いたのはリュファスだった。

「ああ。姫の第一侍女で魔王に姫が攫われるのを目撃したのも彼女だ。だが……」

言葉を濁すリュファス。

彼の『だが……』に続く言葉は言わなくても分かった。

よく覚えていない、だ。

そうなのだ。あまりにグリードの態度に仰天したせいなのか、誰も彼女の容姿をはっきりと思い出せないのだ。

確かに見たのに。

思い出すのはぼやんとしたおぼろげなものばかり。

彼らはバカでも忘れっぽいわけではなかった。むしろ記憶力はいい方だ。

なのに、誰ひとり明確にグリードの想い人を思い描くことができ

ないとは……。

「と、とにかくすごく普通っぽかった」

とレナスが冷汗をかきながら言った。

思い出そうとしても、顔がおぼろげで思い出すのはイメージばかりだ。

「そうそう。あ、普通の女の子と思ったのよね」とミリー。

「そう、普通に、あまり特徴なかったような気がする」とリユファス。

「不細工というわけではなく、可もなく不可もない目立たない感じの容姿だったと思います」

とルファアガ。

「あれだな、特徴がなさすぎて覚えてないのだと思うよ。太っているとか痩せているとか、目が大きい、小さいとか何かしら特徴があればマイナスイメージであっても記憶には残っていると思うが、彼女は……」

ファラが眉を顰めながら続けた。

「そのどれでもなくて、すべてにおいて平均。だから残らないのかもしれない」

ある意味誰の記憶の端にも明確に残っていないのはすごいことかもしれない。

彼らはそう思った。

だが、それはそれで大問題だ。彼らにとっても重要な人物なのに、顔が思い出せないとは。

彼女は——グリードの初恋の相手なのに。

——初恋。

その単語を脳裏に思い浮かべた瞬間、何か精神に地味なダメージ

を受けたのは気のせいだろうか。

グリードと初恋。

なんて似つかわしくない言葉だろう。

神官であり勇者の幼馴染のレナスは失礼にもそう思った。

いや、今はグリードの想い人の問題の方が先だ。

世界の命運をある意味握っているかもしれないのに。それなのに

。

「ヤバイよ、僕、次、会った時にわかるかどうか怪しい」

とレナスが頭を抱えて言えばリュファスも頷いた。

「下手をすれば、すれ違ってわからないかもしれない……」

影が薄いわけではない。

彼女が言ったことや魔王の証言なんかは覚えているし、ちゃんと耳に残っている。

だから声を聞けばわかるかもしれない。だが……。

「顔が明確に思い浮かばないのが辛いな。別人と間違えそうだし、まいったという風にファラが肩をすくめた。」

そう。あまりの特徴のなさに、そこらへんにいる街娘が彼女だと言われればそうだと思ってしまうだろう。

それはマズイ。どう考えても。

グリードにあまり知られないように接触を図ろうと思っているのに、人違いなんてしたら目も当てられないではないか。

——その時だった。

一同のやり取りを出歯亀していた精霊の一人がくすくす笑いながらレナスに告げたのは——。

「あ、風の精霊が教えてくれた。名前はアーリアだそうだ。独身で恋人もなしだつて。……よかった」

そのレナスの言葉に一行は安堵の息をついた。

これで罪なき人が闇夜で葬り去られることはなくなったのだ。

あとは、彼女に何が何でもグリードと一緒になってもらうだけだ。

人権無視？

いや、それより世界の平和だ。

「それにはまずは顔を把握しないと」

リュファスの言葉に全員頷いた。

「いくらなんでもグリード本人は分かるだろうから、次のときは絶対に覚えておこう」

これにも全員が頷いた。

——魔族に恐れられている勇者一行とは思えない会話が交わされているが、彼らは本気も本気だった。

ルファーガが眉を顰めて言った。

「それにしても、私たち全員が覚えてないなんて。もしかしたら彼女はその手の特殊スキルを持つているのかもしれないね」

「『隠密』とは違う、もっと別の形で認識を鈍らせるスキル、か？」
リュファスも難しい顔になる。

彼らはスキルに関しては詳しい方だが、それでも全部を知っているわけではない。

中には非常にマイナーで一般的ではない、あっても無いに等しいスキルがそれこそ山のようにあるからだ。

「とてもスキル持ちには見えなかったが、そうでなければ説明はつ

かないだろうな。さすがグリードが選んだ人というわけか……」
ファラが納得したように頷く。

「顔で選ばないところがグリードらしいわね」

とミリー。

「そうだな。普通に見えて、普通じゃない侍女さんか……」

レナスも頷いて言った。さつきから可笑しそうに精霊たちがくすくす笑っているのを怪訝に思いながら。

——顔を見ただけよく覚えていない。

実はそれはモブとしての特徴なのだが、準主役系の彼らはそれを知らなかった。

先日泊った宿屋の主人を覚えているか？

食料を買った店の主人を記憶しているか？

食堂で給仕してくれた女性の顔は？

答えは——NOだ。

彼らの顔を一度は見たハズなのに、記憶に残っていない。なぜならそれは彼らがモブだからだ。

そして実はそんなのは日常茶飯事に起こっていたことだったが、悲しいことかモブに個人的にほぼ無縁の彼らはそれに気付いていなかった。

——こうして妙な勘違いを孕みつつ、彼らはグリードの初恋という嵐の只中に飛び込んでいくのであった。

小話 勇者の好きな人ってどんな人？（後書き）

もちろんアーリアにそんな特殊スキルはありません。ツツコミオンリー。

次回から新章に入りますが、そのうちまたグリードの斜め後ろなストーリーカーぶりにドン引きする＆怯える一行の話を入れたいと思っています。

“死が二人を別つまで”

グリード様に嵌められた婚約腕輪は、実は呪いの腕輪でした――

外せないだけではありません。

いえ、その祝福効果に比べたら、抜こうとすると外せない仕様になっっているなんて可愛いものです。

私が腕輪に魔法で込められた効果とやらを知ったのは、グリード様に腕輪を嵌めさせ――いえいえ頂いた次の日のことでした。

強制的に『勇者の婚約者』にジョブチェンジさせられていたことを知った私はグリード様のところに抗議に向かったのです。

もちろん、グリード様にと整えられた私室になんぞには行きません。さすがの私でも同じ間違いは二度と犯しませんよ。

個人の寝室ではなくて、勇者様一行が気兼ねなく集まれるようにと彼ら専用に与えられた居間に向かったのです。

侍女たるもの礼儀は忘れるわけにはいきませんから、どんなに飛び込んでいきたくてもグツと押えて、居間の扉をノックしました。
「どうぞ」

と中から聞こえたのはグリード様の声です。どうやらここに居るのは確かなようです。

私はお腹にぐつと力をいれて臨戦態勢のまま居間に足を踏み入れました。

その時、そこには勇者であるグリード様、魔法使いでエリユーシ

オンの皇子リュファス様、そして女戦士であるファラ様がいました。ですが、私の目に映っていたのはグリード様だけです。

もちろん、色気や甘酸っぱさのある理由ではありません。標的確認。照準合わせる的な非常に好戦的な理由からでございます。

「グリード様！」

私は挨拶もそこそこに、グリード様に向かってズカズカと迫りました。

「なんでいきなり婚約者になってるんですか！ それにこの腕輪、魔具なら左腕でなくて右であってでもいいはずですよね！？」

左手首を掲げながら、そう言い終わった時のことです。

グリード様との距離が3アクバル（＝3メートル）くらいになった途端の出来事でした。

腕輪をつけた手首が何かの力にぐいと引かれて、体勢が崩れた——と思ったら足が浮いたのです。

浮いて——そのまま私の体は腕輪にかかった奇妙な引力で引っ張られて——気付いたらグリード様の胸の中へ飛びこんでいました。

胸に飛び込む。

そう聞いてどんな光景を思い浮かべますか？

ふわりと足が浮いて、ふよーんと移動してグリード様の胸に行き着いた？

いえいえ、とんでもない！

効果音を挙げてみるならば、“ビッターン”という感じでしょうか。

足が浮いたと思ったら弾丸のように勇者様の方に飛び込んでいたんですよ！ ビッターンって！

——まるで磁石のように。

これにはリュファス様もファラ様もびっくり仰天しておりました。もちろん私もです。どこことなく満足気な勇者様の腕の中でポカーンとしておりました。

それにしてもさすが勇者様。私が文字通り胸にダイブしてもビクともしませんでした。ビッターンなのに。

筋肉すごいみたいです。細マッチョなんでしょうか。

……予想していて待ち構えていたから、というものであるでしょうけど。

って、問題はそうじゃなくて！ いえ、それもあるけど！

——今の現象は何でしょうか！？

ビッターンって磁石のように吸い寄せられましたけど。

察する所によると——いや、十中八九腕輪のせいなのでしょうけど！

「うむ……」

呆然とする私を他所に、衝撃から立ち直った様子のファラ様が首をかしげて言いました。

「私はこういう色恋沙汰には縁がないから知らないが……昨今の婚約腕輪にはずいぶん面白い仕掛けがしてあるものなのだな」

「そんな訳ないだろう」

すかさずそう突っ込んだのは——なんとリュファス様でした。私が内心ツッコミする間もないほどの即答でございました。

今、どうやら私の目の前でファラ様とリュファス様のポケットコミが展開されたようです。

……何か悔しい気がします。そこはかたく負けたような……。何なのでしょうか、この敗北感は。

それにしても、女戦士のファラ様、実は天然ですね？

今のやり取りで判りましたよ。

さっきの台詞、わざとでも冗談でもなく本気で言っていましたよね？

美人で強くて、でも天然だなんて……なんて美味しいキャラなのでしょう！

勇者様はじめ、見目麗しい人物揃いの一行の中でも遜色ない容姿を持つファラ様。

すつと通った鼻筋に、切れ長の目。長い睫毛。

流れるような黄金の髪に、落ち着いた印象を与える青灰色の目を持つ麗人。

だけどその言葉遣いとあいまって非常に中性的な印象なのです。要するに凛々しいのです。

武装を解かれているグリード様と違って、いつでも常にアーマー姿で。そのくすんだ金色の甲冑姿で颯爽と歩く姿は女性とわかっていても見惚れてしまうほど。

だからでしょうか、実は侍女仲間の中でも非常に人気が高いです。きつと天然であることが知れ渡っても「キャー。素敵、可愛い！」って感じで受け入れられるでしょう。おそらく熱烈に。

「今のはレナスの神聖魔法だ。神聖魔法は専門外だが……“祝福”の一種だと思う」

言って、リュファス様は私を抱きとめたままのグリード様にうろんな目を向けました。

「その腕輪をレナスに“祝福”させたな、グリード」

「ええ」

とあっさり頷くグリード様。

「対の腕輪ですから、神官の“祝福”は付き物でしょう？」

“祝福”とは、神官たちが儀式の時などに使う一種の呪いのようなものです。

気休め程度のものかどうかは神官の力量によって変化します。

例えば『無事に目的地まで着けますように』と神官が祝福を授けたとしましょう。

これがあまり力のない神官だったら気休め程度にしかありません。ないよりはマシという程度の。

ところがこれが力のある神官の“祝福”であつたなら、掛けられた人が無事に目的地までたどり着ける確率がぐんと上がります。盗賊や魔物に遭遇してしまうエンカウント率が大幅に下がるわけです。目に見えない魔法ですが、地味にすごいと思いませんか？

レナス様はもちろん勇者様の旅に同行するくらいですから、力のある神官なのでしょう。

そのレナス様が与える“祝福”。

強力なものであるのは聞かなくても分かります。ええ。分かりますとも。

分からないのは——この意味不明の祝福の内容です！
なんじゃこりゃ！って感じですよ！

「その“祝福”に何か意味があるのか？」

私の聞きたい事をリュファス様が口に出されます。

「レナスの神聖魔法だけじゃないな。何か手を加えただろう。お前の魔力が交じってる」

「“死が二人を別つまで”っていい言葉ですよね」

グリード様はリュファス様の質問には答えしないで私を見下ろして微笑んでそう言うと、リュファス様に視線を向けました。

だけど、その時にはきれいさっぱり笑みの表情はなくなっており

ました。

「この仕掛けは必要なものです」

淡々とした口調。何も窺い知ることのできないあのガラスのような目をリュファス様に向けてグリード様は言葉を続けます。

「いつかは分かりません。ですが、コレが必要になる時がきます」

「『天啓』か……？」

眉を顰めるリュファス様。

「そうです」

私にはお二人が何を言っているのか分かりませんでした。

天啓。

恐らくスキルのことだと思いますが、どういうスキルであるかはわかりません。多分一般的ではないものなのでしょう。

さすが勇者様、いろいろなスキルをお持ちのようで……。

——って、問題はそんなことはありません！

この怪しい現象が問題なのです！

「コレは何なんですか！ 説明して下さいーい！！」

私の絶叫交じりの声が居間に響きわたりました——。

“死が二人を別つまで”（後書き）

予知能力までお持ちの勇者様……（笑）
次回も腕輪の話が続きます。

祝福の……いや、呪いの腕輪でした

そうして説明を受けたことには。

これはレナス様が授けた“死が二人を別つまで”なんていう訳分からぬ祝福の一種で。

腕輪に二人を引き合わせる性質を持たせたものらしいのです。

それは祝福どころか呪いの腕輪では？

そう思った私を誰が責められましょうか。

なんというはた迷惑な“祝福”。

恨んでいいですか？ いいですよ？

だってとんでもない仕掛けだったのですよ！

なんでも、私と対になる腕輪を持つグリード様の近く——約3アクバル（3メートル）の半径内に入ると自動的に引き寄せられる仕掛けになっているとか。

実はどっちに引き寄せられるかは、魔力の値によって変化する代物らしいのですが、皆無の私と膨大な魔力持ちである勇者様の場合私は私が一方的に勇者様に引っぱられることになるのだとか。

これがつりあう魔力の持ち主同士だとお互いに引力が働くのでピタッとはないそうです……。

ついでにこの腕輪自体も魔力がある程度ありさえすれば簡単に抜けるようになってるのだとリユファス様は言われました。だからグリード様は簡単に自分の腕輪の取り外しがきくのです。ですが私は……。

つくづく魔力がないのが恨めしい状態です。

今までは必要ないと思ってきましたが、今切実に思います。魔力欲しかった……。

ちなみに、勇者様の半径1アクバル内は引き合う力が磁石のように反発しているため、無効になっていくらしいです。まあ、そんな至近距離で無効になっていても少しも嬉しくはありませんが……。ただ、幸運なことにはこの引力が発動される時には数瞬の間があるので、それまでに3アクバル以内から脱出すればビッターンはないそうです。

もちろん、それを聞いた瞬間に私はグリード様の手を振りほどき猛ダッシュで離れさせていただきましたとも！
確かにビッターンはありませんでした。

つまり、要するに、忌避すべきビッターンの範囲はグリード様から半径1アクバル〜3アクバルの間ということです。

そうなるとグリード様に近付かなければいい話だと思いますよね？
ところがこれで腕輪の効果は終わりではなかったのです。

227

勇者様とある一定の距離以上離れるとある仕掛けが発動するらしいのです！

とある一定の距離って！？
とある仕掛けって！？

鬼気迫る勢いでリユファス様に尋ねた私ですが、さすがの最強クラス魔法使いでも専門外の神聖魔法についてはわからなかったようで、謝られてしまいました。

「申し訳ない。何しろレナスの“祝福”をグリードの魔法が干渉している状態なので特に解析しずらくなっている……」

私、一国の皇子に頭下げられています。侍女なのに。
すごいです。そして落ち着きません。

皇子としてではなく勇者一行の魔法使いとしてなのでしょうけど、皇子様にしては腰低すぎやしませんか、リュファス様。

侍女意識が染み付いている身としては非常に居心地が悪いです。

むしろ私が謝りたいです。

主君の婚約者に頭を下げられるなんてあつてはならないことです。王族ならふんぞり返ってもいいんですよ。

「いえ、リュファス様のせいではありませんから、謝る必要はありません」

むしろ謝罪すべきなのはこの部屋にいるもう一人の方ですよ？

そしてそのもう一人の方はリュファス様が説明してくださっている最中も今も、私と静かな攻防を繰り返しております。

3アクバル以内に近付かないようにしようとする私と、近付こうとするグリード様のじりじりとした攻防戦です。

一步グリード様が近づこうとするたびに、私が一步下がる。そんな感じです！

「グリード……」

リュファス様は呆れ顔です。

そして女戦士のファラ様は傍観を決め込んで、さつきからソファに座ってお茶を啜りながら目の前で繰り返される出来事を眺めております。

「微笑ましい光景だな」

「微笑ましい？ 私は必死です！」

でも私は必死ですが、勇者様は楽しそう……と言うより嬉しそうです。

にっこりではなくて、今はにこにこ笑って私との距離を縮めよう

としているんです。

相手はもちろん勇者様ですから、私と距離を縮めようと思ったら簡単にできると思うんですよ。でもそれはしないで、純粹に追いかけて楽しんでいるようなんです。

一見猫がネズミを甚振っているかのよう……。ですが、なにやらワンコが尻尾を振ってジャレっているかのような印象を受けるのは気のせいでしょうか？

「二人の腕輪を触れ合わせることで、腕輪の効果を一定時間相殺することができるようだ」

私とグリード様がじりじりとした攻防戦を繰り返している間も、リュファス様が腕輪に掛けられた魔法を『解析』して下さってます。だが私に分かるのはここまで。後は直接レナスに聞かないと……」

申し訳なさそうにリュファス様が言いました。

決してこの方のせいではないのに、この気の配りよう。実はリュファス様って苦勞性ではないだろうか、頭の片隅で思った瞬間でした。

そしてこの苦勞症の主な原因は間違いなく勇者様……。

私の心の中にリュファス様への同情の念が湧くのを押えられませんでした。

もっとも、勇者様一行の同情やら憐憫の念を一心に向けられているのは私に違いありませんが！

「分かりました。あとはレナス様に直接聞きにいきます」

私は扉の方にじりじりと下がりながら言いました。

丁度いいです。この呪いの腕輪の“祝福”について文句の一つも言いたいところですから！

「それでは失礼します！」

じりじりと目的地にたどり着くと私は急いで扉を開け放ちながら
言いました。

そして返事も聞かずにボタンと侍女としてあるまじき勢いで扉を
叩き付けるように閉めると、犬に追われた猫のごとく猛ダッシュし
てそこから離れました。

だから――。

安全地帯（姫様の部屋）に向かって走り去る私には、扉の向こう
でこんな会話がなされていたことなど夢にも思いませんでした。

「グリード。楽しそうだな」

ファラ様の声。

「……楽しい？ ……そう。これが“楽しい”という感情か……」

「ああ、ようやくお前も人並みの感情が芽生えてきたってことだな」

「……彼女のおかげですね。色々なものをもたらしてくれる」

「グリード」

緊張を孕んだリュファス様の声。

「あの腕輪の仕掛けは、対魔族用か？」

「ええ」

「本当に『天啓』なのか？」

「ええ。漠然としたものですが……恐らくそんな遠くないうちに」

「やっかいだな」

ため息をつくリュファス様。

この時私はまだ知りませんでした。

彼らの戦いがまだ終息してなかったことを――。

祝福の……いや、呪いの腕輪でした（後書き）

次回はレナスのターン。

土下座は異文化

「レナス様。お話があります。コレのことについて！」

安全地帯（姫様の部屋）に逃げ帰った私は、そこにミリー様と一緒に姫様を尋ねてきていたレナス様の姿を発見し、『標的確認、照準合わせろ』的な非常に好戦的な気持で左手首を示しながら件の人物に迫りました。

挨拶もそこそこに客人に向かっていく私を、ビククリした様子で姫様や侍女仲間が見ているのが目の端に映りましたが、気にしてはいられません。

だって死が二人を別つまで、ですよ？

愛を誓い合った二人ならともかく、強制的に嵌められた腕輪にそれって……。

しかも何だかその“祝福”の名称からいって、どちらかが死ぬまで継続しそうな気がして仕方ありません。

しかも外れないなんて、まるでどこぞの呪いのアイテムみたいじゃないですか。

女神に仕える神官がそれでいいのでしょうかと、声を大にして言いたいです！

「それは婚約腕輪だね。そう、そういえばまだ言ってなかったっけ。婚約おめでとうございます」

にっこりとレナス様が笑いながら言いました。

が、私の左手首に嵌っている腕輪に視線を向けたレナス様の黒い瞳が一瞬怯んだのを私は見逃しませんでした。

それはそうでしょう。何しろ自分が祝福を与えた魔具なのだから！

私は婚約云々の台詞は完全にスルーし、いかにも取ってつけたような笑顔を向けて言いました。

「もちろんお話というのは、この腕輪の“祝福”についてです、レナス様」

おそらく私の目が笑っていないことに気付いたのでしょう、レナス様の笑っていた口の端がビクツと引きつりました。

——後から姫様に聞いたところによると、この時の私はにこやかに微笑んでいたにも関わらず、背中に黒いオーラを背負っていて非常に恐ろしかったとか。

どうもこの時、無理矢理腕輪を嵌めさせられたこととか『勇者の婚約者』にジョブチェンジしていたこととか、諸々のことの鬱憤がピークに達していたようなのですよね。

本来抗議するべき人が違うのではという気がしなくてもないですが、当人の所に抗議に行った先で“ビッターン”だったので予先を失った感情の吐露が向かったといえますか……。

まあ、要するに八つ当たりなのですが、この時の私は目の前に抗議しなければという思いでいっぱいでした。

その私の黒いオーラを見て、きっと幼馴染の身が危険だと思ったでしょう。ミリー様が慌てて言いました。

「アーリア、どうどうどう。落ち着いて！」

勇者様の一行の一員である神官様に、どうして一介の侍女である私が危害を加えられるのか、という問題はさておき、私を宥めた方がいいと判断したようです。

「これにはマルワナ海溝より深い訳があるの！」

ちなみにマルワナ海溝とはチャレンジャーという魔法使いが偶然見つけた世界で一番深い海の底の地点のことです。

「深い訳？」

「そう。聞くも涙、語るも涙な、ふかーい訳が」

聞くも涙語るも涙。

……それは聞きたいかも。

そう思った私は多少終わっているかもしれませんが。

ですが、私は矛を収めることにしたのです。

気をきかせた姫様が人払いをしてくださり、部屋には私と姫様、ミリー様、そしてレナス様の四人だけになった直後。開口一番、レナスが仰った台詞はこうでした。

「えっと、土下座させてください」

「——はい？」

いきなり土下座！？

私と姫様が仰天したのは言うまでもありません。

「レン・シロサキの著書によると土下座は究極の謝罪の方法だそうです。それに倣おうと思って。本当はタタミとかいうイグサを敷物状に編みこんだものの上でするのが正式なやり方らしいけど、ここにはないから地面で……」

そう言いつつ、レナス様は地面に両膝をついて跪こうとしています！

それを止めるでもなく面白そうに傍観しているミリー様。

そしてあんぐりと口を開けている姫様。

慌てたのは私です。

魔族以外のすべての者が——妖精族^{エルフ}、精霊は言つに及ばず、全ての人間が——信仰している女神レフェリア。

その女神を祭っている神殿に仕え、女神レフェリアの威光を伝えるために各地に配置されている神官は、女神神殿——ひいては女神

様の代行者とされている尊い方。

その神官様が土下座！

……させているのは私ですよ、そうですね？

しうと言ったわけではありませんが、結果的にそうなりますよね？

その事実には私は青ざめました。

これが知れたら私は神官様に対する鬼畜な所業として神殿から睨まれる＆石を投げられるに違いありません。

「や、止めて下さい。土下座なんて！ しなくていいです！」
私は慌てて止めました。

土下座をするほど酷い“祝福”を与えたんかい、と頭の片隅でツッコミ入れながら――。

土下座は異文化（後書き）

区切りのいいところまでなので、短めです。

白の司祭

勇者様の仲間は美形揃い。

なので、その仲間である神官様——レナス様も当然美形です。

襟足に着くくらいの長さの、ややウェーブがかった柔らかそうな薄い緑色——翡翠色の髪。黒曜石のような黒い瞳。

グリード様のような神々しさすら感じれる美しさとも、リユファス様の高貴さを感じさせる優美さともまた違った感じの美しい容姿をお持ちです。

強いていえば、全体的に柔らかそうな、そんなイメージ。

いつもにこやかに微笑んでいる姿は、白い神官服とあいまって包容力を感じさせます。

それは女神の代理者である神官様だからでしょうか。

神官様と一般的に言いますが、実は神官という呼称は、女神神殿に仕えている聖職者たちの総称です。レナス様の役職を表す呼称ではないのです。

レナス様の役職は、『勇者タイムズ』によると司祭。それも白の司祭です。

神殿での神官様たちの役職は大きく分けて司教・司祭・助祭の三つ。

その中でも司祭は中核を担う重要な役どころで、女神の威光を遍く伝えるため各地に派遣されます。

そうなるにそれほど高い地位ではないように思えますが、その上の役職である司教様の数がそんなに多くないことを考えると、司祭の中で上の位についているものは神殿の中でも高い地位だといえるでしょう。

そう。実は司祭の中でも細かく分かれた位があるのです。それは身に纏っている神官服に表されるそうです。

レナス様の神官服は白。

それは——司祭の中でも最高位の色です。

だから司祭の中でも特に力をお持ちなのです。司祭の位が高くなればなるほど強力な神聖魔法を使えるという証なのですから。

この腕輪に掛けられた阿呆のような“祝福”がその証拠。

でも、今日の前にいるお方はこう申してはなんですが、偉い地位にある司祭としてはずいぶん、その……神秘性も威厳も感じられません。

だって、私の要請で土下座をやめた後の第一声が、
「ごめんよ」。僕もあの“祝福”はヤバイだろうと思ってただけ
ど、グリードがさあ」

という言い訳に始まったのですから！

口調軽！と思ってしまった私は、徐々にこの方に対する神官としての尊敬の念が磨り減ってきているのを感じました。

そして肝心のその言い訳の中身なのですが——。

勇者様たちが姫様を救って帰ってくる道中、シュワルゼ国第二の都市ミファナに立ち寄った時のこと。

宿についた早々、グリード様は皆様に、

「注文していた品物を取りに行ってきます」

と言って外に出て行ったそうです。

それが何であるか知っている皆様——姫様除く——は、その言葉に青ざめました。なぜならそれはグリードの恋の相手——つまり私——の意思を全く無視して注文した婚約腕輪だったのですから。

それを聞いて私は内心やつぱり！と思いました。

グリード様は勘違いされて婚約腕輪になったみたいなのを言うておりましたが——確信犯じゃないですか！

絶対わざと細工師が勘違いするような依頼の仕方をしたに違いありません。

それに、右でもいいものを左腕に着けたのも絶対わざとです！

……おのれ。

密かに怒りを燃やしつつ、私は話の続きに耳を傾けました。

——ミファナでのその夜、ミリー様と部屋でイチャイチャしていたレナス様のところにグリード様が突然やってきました。

……って、話の途中でまたまた失礼しますが、ミリー様とレナス様ってそういう関係だったんですか！？

聞いてませんし、気付きもしませんでした。

いえいえ、もちろん神官職は妻帯も大丈夫ですし、ミリー様とは幼馴染ですから、そういう関係を結んでもおかしくはないのですが！

何かすごく意外です。お二人が恋人同士だなんて。

例の『勇者タイムズ』では載っていませんでしたし。

……でも、まあ、それならミリー様がレナス様をかばう訳ですよ。若干腑に落ちないのが土下座を止めもしないで面白そうに眺めていた部分ですが……何かお二人の関係の一端を見てしまったような

そうでないような……。

おっと話を戻しましょう。

部屋にやってきたグリード様はイチャイチャを完全スルーしてレナス様に腕輪を示して言ったのだそうです。

「これに“祝福”を頼みます」

と。仰天したのはお二人です。

といってもイチャイチャ場面に乱入されたことではなくて、腕輪に神官の“祝福”を授けると言われたことに対してです。

というのも、普通、婚約腕輪に“祝福”を授けるのは神官様の前で男女二人が結婚の誓いを行った時。『幸多からん事を』みたいな気休めな祝福を授けるものだからです。

ところがグリード様が依頼した“祝福”の内容は――。

まずはあのビッターン。

そして。

「100アクバル以上離れると、自動的にその腕輪が対になる腕輪の持ち主――つまりグリードに現在の居場所を教える仕掛けなんだ」

「――はい？」

「そんなことしなくたって、グリードは精霊使っていつだって君の居場所を把握しているんだけど」

「――はい？」

「精霊の力が及ばない場所でも君の位置を把握できるようにするためらしい」

「――はい？」

「あ、それと」

「はい？」

「その腕輪、位置を知らせると同時にぎゅっと縮まって防衛モード

に入るから」

「……は？」

「グリードと100アクバル離れたってことがすぐそれで分かるよ。お知らせ機能付きなんだ」

「……すみません、どこから突っ込んだらいいのか分かりません」
私は顔を引きつらせながら言いました。

というか、全てにツツコミどころ満載で「うわああ！」と叫びたくなりましたよ！

100アクバル以上離れると私の位置を教えるとか！
グリード様が精霊使って常に私の位置を把握しているだとか！
防衛モードって何だ、とか！

お知らせ機能つきって！とか。
色々です。全てツツコミしたいです！

だけど、とりあえず一番この場でツツコミしたいのは。
目の前にいる『僕っていい仕事した』みたいな得意げな、達成感
すら感じられる良い笑顔をしている方にですよ！
さっきの土下座は何だったのさ、と私は言いたい！

いえ、それよりも言いたいのは――。

「私の人権はどうなるんですかあ……！！！」
「ぐえっ！」

気がつくつと、白い神官服の襟元をきゅうつと締め上げている自分
がおりました。

小話 勇者、ですよ？ その1（前書き）

レナス視点の小話です。

相変わらずバカっぽい話ですw。

小話 勇者、ですよね？ その1

部屋を出て食堂に向かったレナスは、通りかかったグリードの部屋から声がしているのに気付いた。

だがそれはグリードの声ではない。……精霊の声だ。

常人には聞こえない、精霊の加護を受けた人間と、その加護を受けた人間の血を引く者しか聞くことのできない声なき声。

その彼らの声が、グリードの部屋から聞こえていたのだ。

かなりの数の精霊がいるらしく、レナスの耳には非常ににぎやかに聞こる。だが、実際は物音ひとつしてない静寂の空間だ。

この声を聞けるのは、加護を受けたグリードと、勇者の血を引く自分と、精霊と人間の合いの子と呼ばれるエルフ族のルフアーガだけだった。

だけど、いつも精霊はグリードに群がって話しかけてはいるが、この数は多すぎる。

怪訝に思ったレナスはグリードの部屋の前で足を止めて、中の会話にそつと耳を傾けた。

シュワルゼを発つて三日後、勇者一行はシュワルゼの東側に隣接した国、ローゼンの首都にいた。

ここには大陸中に網をはっている有名な情報屋がいて、まずは彼から魔王に関しての情報を得るために訪れたのだ。

午後遅くに都にたどり着いた彼らは、件の情報屋には明日出向くとしてひとまず宿を取って休むことにした。

一息ついた後、宿に隣接した食堂で情報収集でもしようと思立ったレナスは部屋を出て、そしてその光景にぶち当たったのだった。

『あのね、彼女はお茶を入れるのが得意なのよ。姫様はいつも美味しい美味しいって言って飲んでるの』

『非番の日はいつも街に繰り出して、お茶の葉を買い求めているらしい。街娘のふりをして値切るのが得意だ』

『値切りに成功した時は、今日もいい仕事したわ、モブ万歳ってよく呟いているよ』

『一番仲の良い同僚はベリンダって子。婚約と同時に退職が決定してるからアーリアは寂しがってるみたい』

『そのうち自分も結婚退職することになるのねえ』

などという会話が聞こえてきて、レナスは中で何が起きているのかを理解した。

つまり、グリードは精霊を使って初恋の相手の情報を収集しているのだ。

恋をすれば相手のこと知りたくなるもの。

今まで誰にも無関心だったグリードだが、ようやく人並みの感覚を身につけたのだな。

そう思ってレナスは嬉しくなつて扉の外で笑顔になった。

だけどその笑顔が凍りついたのは直後のこと。

『あのね、アーリアのスリーサイズはね、上から○×なの!』

一瞬、我が耳を疑うレナス。

スリーサイズ……!?

『もう少し胸と身長が欲しいってよく言っているわ』

『姫の胸を見てこっさりため息ついているときがあるぞ』

『貧乳ってわけじゃなくて、それなりにあるのにね胸のサイズ。まあ大きくはないけど』

『グリード、頑張って彼女の胸を大きくしてあげてね！』

なんだか会話があやしい方向に行き始めている。

グリードの役に立とうと必死な精霊の報告がどんどんエスカレートしていつてるのだ。

これって……ヤバイのではないだろうか。

レナスは冷汗をかきながら思った。

例の彼女だつてスリーサイズやらの個人情報がこんなところで曝露されていたと知ったら……。

ドン引くか激怒するかどっちかだ。

これを知って嬉しいが女は居ない。

現に今自分だつて引いちゃってる。

……だがこれでももちろん終わりではなかった。

『あのねえ、アーリアの初潮は十一歳の時なの』

その言葉にレナスは固まった。

『そうそう。龍弦月の十日目だった！』

『血が出ているのを知って真っ青になってお母さんの所へ飛んでいったのよね』

あああああわとレナスは扉の外側で一人焦っていた。

なんちゅー会話を……！

これを知ったら例の彼女は卒倒するか、最悪憤死するかもしれない。

いずれにせよ、グリードの想いに応える可能性はなくなるだろう。それは人類の為にならない。止めなければと、レナスは使命感に燃えた。

それにこちら辺で止めないと、人間として大切な何かを失う気がする。自分もグリードも。

そう思ったレナスが扉に手を掛けた時だった。
別の精霊の声がまたもや問題発言をかましたのは――。

『グリードに取っておきの情報教えてあげる！ あかねえ、アーリアのこと好きだという男性いるんだよ。彼女のすぐ近くに！』

レナスは扉に手をかけた状態で再び固まった。
冷汗が噴出してくる。じっとりとした嫌な汗だ。

オイオイオイ！ 人類のためにそんな情報はいらないから！
楽しい話題だけ持ってきてくれればいいから！
空気読んでお願い！

そんなレナスの必死の願いも虚しく冷たい声が部屋に響いた。
「……誰ですか、それは」

小話 勇者、ですよ？ その1（後書き）

魔王降臨？みたいな（笑）

長くなったのでまだ続きます。

阿呆な話ですいません。

夜久珠姫様がまたまたイラスト描いてくれました！

今回の主役の白の司祭のレナスです。

アドレス等は「何も聞いてません。知りません。分かりません」の
回のあとがきに載せてありますので、ぜひぜひご覧になってくださ
いませ。

小話 勇者、ですよ？ その2

ここで初めてグリードの声がした。

今までずっと無言で精霊の報告を聞いていたのだが。

……恋敵がいると知ったとたんに反応するとは。

そしてその反応がレナスには恐かった。

精霊がグリードの問いかけに答える。

『シュワルゼ国の第二王子だよ！ ちょっとばかり影が薄い人』

——その答えに衝撃を受けたのはグリードではなくて、レナスだった。

王子！？

一国の王子の想い人なのか、あの彼女は！

普通の侍女かと思っていたのに……予想以上に重要人物らしい。

それなのに、自分たちは顔すらおぼるげとは……。

なんとなくシヨックを受けるレナス。

「彼女は彼の気持には……？」

恋敵の身分は完全スルーして尋ねるグリード。

どうやら彼にとっては恋敵がどんなに高貴な人間だろうがド庶民だろうが、そんなものは気にもならない事柄らしい。

彼が気にするのは、恋敵の思いを彼女が知っていて、それに応える可能性があるかどうかの一点だけだった。

『全然気付いてないわね』

『妹の第一侍女だからついでに声を掛けられていると思ってる』

『そうだね。若干ヘタレなのかガツンと迫ることもしないからね、

あの王子は。あれじゃ気付くことはないだろう』

『アーリアは自国の王子としての好意は持つてるけど、恋愛感情ないよね』

その精霊たちの口々の情報にホッと安堵するレナス。

どうやら第二王子は完全に片思いらしい。

それならグリードだって気に留める必要もないだろう。

そう思っただけとした。……ホッとしていたのに。

またもや要らぬことを言った精霊が居たのだ。

『あ、だけど、姫が攫われた次の日の夜、あの王子様、彼女の部屋に不法侵入して寝顔をジッと眺めていたよ！』

……不法侵入に、寝顔……？

それにグリードがどう反応を示すか考えて、レナスはくらくらと眩暈がするのを感じた。

だがここで自分が気を失ったら取り返しのない事態が起こってしまうかもしれないと堪える。

これ以上はお願い。やーめーてー！

必死になってレナスは念を飛ばしたが、精霊の言葉は止まらなかった。

しかもあるうことかその時のことを微に入り細に入り語ってみせたのだ。

『姫の誘拐にショックを受けたアーリアを心配して様子を見にやってきたものの、呼びかけても返事がないものだから、扉の前で延々と悩んでた』

『そう。で、様子が気になるから見るだけと自分に言い訳して部屋に入っただけだよ』

『アーリアは泣きつかれてすやすや寝入っていたんだけど、その寝顔をじっと見つめてた』

『あー。なんかちよつと顔に触れようとしてたわね。起こすとマズイから途中で止めたけど』

精霊から続々と情報が入るたびに、心なしか部屋の中から妙な冷気が扉を通して流れてきているような気がした。

本当に気のせいなのがいいが、気のせいじゃなければその冷気の出所は明らかだ。

焦るレナスだが、その頭の片隅では『その第二王子様、なんかちよつとヤバイ人？』などとも思っていた。

不法侵入したあげくに、寝顔をじっと眺める王子。

……なんかヤダ。

その彼女だつて起きていたら絶叫ものだったろう。

どうやらうちの勇者といい、その王子といい、彼女は何かとんでもないものに好かれる傾向があるらしい。

グリードの想い人というだけでレナスは彼女に同情していたが、今の精霊の報告で同情度が更に上がった気がした。

「……今、過去を視ました」

淡々とした、だけど冷たい声がした。

グリードは精霊が過去視たものを彼らの力と共に自分の内に取り込んで視ることができる『過去視』のスキルを持っている。

そのスキルを使って第二王子のオイタの場面を直接自分の目で視たのだろう。

騒々しかった精霊のざわめきや声がピタッと止んだ。

それぞれがグリードを窺い、彼の言葉を待っているかのような、そんな息を飲むような雰囲気の中で。

中心人物が呟く——断罪の言葉を。

「……抹殺しますか」

『『『分かった、サクツと殺^ヤってくる』』』』

「わー！！ ストップ！ ストップ！」

レナスは慌てて部屋に飛び込んだ。

「抹殺ダメ！ 君たちもあっさり殺るなんて言っちゃダメでしょ！」
「レナス」

『『『分かった。じっくり殺^ヤってくる』』』』

「違うから！ それ違うから！ 殺^ヤっちゃダメえええ」

「止めるなレナス。彼女の寝顔を許可なく見るなんて許しがたい」

無表情だがどこか惘然とした面持ちで言うグリードに、レナスは必死になって言った。

「グリード、相手は仮にも王子だよ。死因を調べようと国付きの魔法使いが出てくるに決まってるじゃないか！ もし万一勇者の命令を受けた精霊の仕業だと知れたら……」

「そんなヘマはしない。こっちの仕業とは分らないように綺麗さっぱり亡くなくてももらいます」

「綺麗さっぱり殺^ヤれるとしても、ダメ！」

「……チツ」

グリードが舌打ちをした。無表情でだ。

舌打ちなんてそんな人間らしいことをするのは初めて見たレナス

だったが、それに驚くより先にどつと疲れを感じてしまった。

……過去の出来事とはいえ、その彼女の寝顔をグリードも見たいということには変わりないのではというツツコミが頭をよぎったりもしたが、それは口にしない方が賢明だろう。

「分かりました。……精霊に言つて第二王子を彼女に近づけさせないようにするだけで我慢します」

グリードは目を眇めながらそう言つと、部屋にいる大勢の精霊に言つた。

「そういうわけで、アーリアにあの王子を近づけないように守って下さい」

『『『うん。まかせてグリード』』』』

「王子なら国付きの魔法使いの護りを受けているだろうから、多少乱暴なことをしても死にはしないでしょう」

『『『そうだね。手加減なくて大丈夫だよね』』』』

「運悪く逝つても黙認します」

『『『分かつた、殺^ヤる気で……』』』』

「だからダメだから！ 殺る気になつちゃダメだから！」

慌てて諫めたレナスは直後に再びグリードの「チツ」という舌打ちを聞いた気がした――。

膝突き詰めて、王子を抹殺してはいけないと精霊とグリードを諭しながらレナスは頭の片隅で思った。

——グリード、お前、本当に勇者……だよな？
と。

小話 勇者、ですよね？ その2（後書き）

別名勇者様ドン引きシリーズの小話「勇者、ですよね？」の神官編はこれで終わりです。

意外に苦勞人なレナス神官w。

またそのうち別のメンバーでお届けしたいと思っています。

『天啓』(前書き)

本編再開です。

『天啓』

「その辺で許してあげてよ、アーリア」

私がキュウキュウとレナス様の神官服の襟元を締め上げていると、のんびりとした声が掛かりました。

ミリー様です。

「レナスは断れなかったんだよ。アーリアの人権を無視したわけじゃないくて、天啓がらみだつて聞かされて」

私はその言葉を聞いて手を緩めました。

天啓。その言葉に聞き覚えがあったからです。

リュファス様がグリード様に言っていた言葉も確か『天啓』でした。

どうやら腕輪のこの仕掛けはその天啓とやらが原因のようです。

「とりあえずアーリアは落ち着きなさい」

姫様が言いました。

「まだお二人にお茶すら差し上げていないの。だから、いつもの美味しいお茶を入れて頂戴？ その間にあなたも落ち着くでしょう」

「……はい。分かりました」

姫様にこう言われては私は断れません。

それに姫様は私のために言われているのです。趣味であるお茶を入れている時間が私の安らぎタイムであることを知っているから。

その間にいつもの私に戻れと言ってくださっているのです。

こう言われて私はいつにないいきり立って興奮している自分に気付いたのです。

いくら腹を立てていても、神官様の襟首を掴むなど侍女にあるま

じき行為です。しかもレナス様は正式なお客様。不敬罪とみなされてもおかしくないのです。

私はお茶を入れながら猛烈に反省致しました。

100%自分が悪いだなんて思ってはおりませんが、興奮してレナス様の首を絞めるなんて侍女としては失格です。これは反省すべきです。

詰め寄るとかしないで、もっとこう、静かに怒るべきでした。

例えば——そう。レナス様のお茶に世界一辛いと言われるリンガル産の辛子のエキスを入れるとか……？

なんてことが頭にふっと浮かび、私は慌てて首を振ってその誘惑を退けました。

私の神聖なお茶に異物混入だなんてとんでもないことです！

辛子エキスだとか雑巾の絞り汁入りのお茶なんて……お茶なんて

……。

い、いえいえいえ、ダメダメダメ！ 誘惑ダメ！

こればかりは譲れませんよ、私！

葛藤の末、異物混入のないまっとうなお茶を入れた私が姫様の部屋に戻り、おいしいと皆様に褒められて溜飲を下げ、異物混入しなくてよかったと内心安堵した後。

お客様用のソファに恐れ多くも私も腰を下ろさせていただいて、お二人による説明が始まりました。

——グリード様は『天啓』というスキルをお持ちなのだそうです。

まあ、そんな気がしてましたけどね。

スキルいっぱい、そしてそのスキルを発動出来る魔力をお持ちで羨ましい限りです。ケツ。

……おつと話を続けましょう。

『天啓』とは読んで字のごとく、天（女神様）からの啓示。でもそれは言葉のようなものではなく、不意にもたらされる断片的な未来への啓示で、グリード様曰く「そんな予感がする」といったかなり漠然としたものらしい。

だけどそれを彼らが重要視するのは、ほぼ外れたことのない警告だからです。

同じように先の出来事を知るスキルで『予知』というものがあるのですが、それは不確定要素が多くイマイチ精密ではありません。予知したことによって、そしてそれを口にするることによって不確定要素が絡み、回避可能になる性質のものだからです。

未来に起こる可能性の一つを挙げているだけで、予知したことによる分岐の未来が発生して……とか難しいことを仰ってますが、モブの私に難しいことは理解不能です。

とりあえずスキル『予知』で知ることのできる未来視は、正確ではないし、その通りになるとは限らない。そう覚えておくことにします。

このように『予知』は外れることもあるのですが、『天啓』で知る断片的な未来はそれとは別ではほぼ回避不能なもののだそうです。グリード様が「そんな予感がする」と言ったことは100%の確率で現実に起こるし、起こってきたらしいのです。

だから、勇者様一行はグリード様の天啓を重要視するのです。

そして。

私の腕輪に関しても、その『天啓』があつたのだそうです。

あのビッターンと、グリード様から離れたら発動する今どこお知らせシステム&防衛モードとやらが必要になると。そんな気がしたのだそうです。

……あのー、それって適当に言ってるんじゃないですか？

どう考えても今どこシステム&防衛モードはともかく、あのビッターンに需要があるとは思えないのですけど？

私と追いかっこしている時の楽しそうなグリード様を見てしま
うと、とても女神様の啓示には見えませんよ？

私はそう思ったのですが、レナス様たちはグリード様のその天啓
による予感とやらを信賴しているため、難色を示したものの、結局
は言われるまま腕輪に例の“死が二人を別つまで”の祝福を授けた
そうです。

「いや、君に恨まれるとは思ってたけど」

「恨みますよ！」

「だって絶対必要だって言われたらやるしかないでしょ？ 相手は
グリードの天啓だもの」

「私の人權はどうしてくれるんですか！」

「……………」

「ちょ、どうして何も答えないんですか！ そして、どうして視線
を逸らすんですか、レナス様！」

ちなみに、防衛モードとは何のことか聞いてみた答えは――。

「ゴメン、その辺はグリードの管轄なのでわかりません」
でした。

……神官様へのなけなしの尊敬の念が一気に消え失せた瞬間でも
ありました。

——本当はこの時、私もうすうす気付いていました。

だからこそ、普段であつたら聞いていたはずのことを尋ねなかったのです。

そして、レナス様もミリー様もそれを口にすることはありませんでした。

——どうして、そんな腕輪の仕掛けが必要になるのかという部分を。

そして。

腕輪の防衛モードは何に対して備えられたものであるのかということ——。

勇者様の事を知りましょう

おかわ
お代りしたら異物混入。
おかわ
お代りしたら異物混入。

そう唱えながら、私の入れたお茶を飲む皆様を見守ります。
え？ 誰のお茶に異物混入するかですって？
それはもちろん言わずともお分かりでしょう？ うふふふふ？

「アーリア、目が据わっているわよ？」

お茶を優雅な仕草で飲み干し、カップを皿に戻した姫様が私に言われました。

さすが我が主人です。私の様子に何か不穏なものを感じたらしく、
やんわりと窘められました。

どうやら異物混入は無理のようですね……ちえ。

その私の異物混入の標的である神官のレナス様は、私のお茶を堪能し、だけど何かを感じたのかお代りを要求することもなく飲み終えた後、にこにこ笑顔のままこう切り出されました。

「ところで、アーリアとグリードはお互いを知り合いましたという事になったわけだけど……」

—— お互いを知り合う。

それは私が広間で言った『ザ・先送り』のための表向きの理由です
ね。

……でもなぜそれがここで出てくるのでしょうか？
もしかして先送り&嫌々なのがバレバレなので、嫌味でも言うつもりでしょうか。そしてそう考えてしまうのは被害妄想なのでしょう

うか。

「アーリアはグリードのことをどの程度まで知っているのかい？」

おつと嫌味ではありませんでした。被害妄想だったようですね。やはり精神的に疲れているのでしょうか……いろいろな事が立て続けに起きましたからねえ。

思わず遠い目になってしまふ私です。

それはそうと質問には答えねばなりません。ですが——ここ数日、まともな接触というかまともにお互い知り合えるような会話を交わしたでしょうか……？

答えは否です。これでは質問に答えようもないではないですか。仕方なしに私は知っている範囲のことを言いました。

「ええと、『勇者タイムズ』に載っていたことくらいは知ってます。年齢とか出身地とか……」

グリード様の年齢は十九歳。ちなみにミリー様とレナス様とリュファス様も同じ年齢だそうです。

出身地はエリューシオンの南方にあるラングレアという村。

これは『勇者タイムズ』に載っていたことですし、広間で勇者様が名乗った名が『グリード・ラングレア』だったことからわかります。

ちなみにミリー様の名前も『ミリー・ラングレア』です。これはミリー様とグリード様は実は夫婦だったとか、兄妹だったとかいうわけではありません。

実は姓を持っているのは王族と貴族だけなのです。

私は、曲りなりにも貴族だからミルフォード姓を名乗っているわけですね。

そしてグリード様やミリー様たちは貴族ではないため、姓名を持

ってはいないのです。

ですが、狭い村社会の中では名前だけでも問題なかったでしょうが、村の外に出ればそうはいきません。どこの。。。さん、という識別が必要になるのです。でないと名前が被る人続出ですから。

外で名前を名乗る場合は、大抵の場合、出身地の名称をつけて名乗るのが一般的。だからグリード様の場合は『グリード・ラングレア』。つまり“ラングレア村のグリード”となるわけですね。

予断ですが、都市に住む庶民はちよつと事情が違います。

出身地＋名前だと、大きな街では当然同姓同名が多数になってしましますから。

ですから、街に住む人は主に職業や役職を表す単語を付けて名乗るようです。

ミルズ（粉屋）や、ポッター（陶器職人）とかがそれですね。

例えば粉屋を営むルーベントという名前の人がいたとしましょう。その人はこう名乗るのです『ルーベント・ミルズ』と。つまり“粉屋のルーベント”ですね。

ちなみにレナス様はレナス・レフィードと名乗っているそうです。レフィードは光の女神レフェリアと闇の神アーティラードの名前からいただいた、神に仕える者——つまり神官——を表す言葉。

そして神官はすべからくこの名を付けて名乗ると決まっております。

都市部に住む庶民と同じようでありながら、少し違うのが神官職です。特殊な職業だからでしょう。

同じようにギルド名をそのまま名乗る例もあります。

例の『勇者タイムズ』の発行元、新聞ギルドの記者たちは聞くとこちらによると『ニュースペーパー』と名乗っているらしいです。

その某・ニュースペーパーさんたちが私の名前を挙げて何やら嗅

ぎ回っていると、いくつかの筋から聞き及んでおります。今のところ姫様の緘口令と、自身のモブ属性のおかげで詳らかに^{つまひ}はされてないようです……。

面倒なのでこれ以上紙上に私の名が出ないことを切望します。ええ、心から願いますとも！

…… おおっと大脱線ですね。今は勇者様の事です。勇者様について知っていることです。

私はグリード様の麗しすぎる顔を思い浮べました。

グリード様について知っていること……他に何かありましたっけ？

…… ああ、ありましたね。知らなければよかったことが！

「そういえば、歩く天災で最終兵器でしたっけね……」

ため息混じりに言う、レナス様はにっこり笑いました。

「おお、さすがグリードの選んだ人。もうそれを受け入れているんだね……！」

「受け入れてなんていませんよ！」

「ところで、グリードについて知っているのはそれだけかい？」

「……無視かい！」

軽いボケツツコミ。でも本人は至って真面目です。少なくとも私の方は、ですけど。

その私の軽いツツコミをスルーして、レナス様は腕を組み頷きながら言いました。

「ふむ。やっぱりアリアにはグリードについてもっと知って欲しいな。グリードの持つ君についての情報量と比べて差がすぎる」

あのー。今何かツツコミ入れたくなるような事を言いませんでしたか？

私のついでの情報量とか！ 差がありすぎるとか何とか！

「ただどあいっはなかなか自分のことについては語らないだろうから、僕とミリーが代わりに答えるよ。君にはグリードを理解して欲しいんだ。何でも聞いてくれ」

「そうそう。私たちよりグリードについて詳しいのなんて精霊くらいなものよ？　じゃんじゃん聞いて！」

グリード様を理解するなんて永遠にできそうもありません……。なのに、レナス様もミリー様もさあとばかりに私を見ます。なんでしょうか、その期待するような目は。

質問しないわけにはいかないじゃないですか！

ですが、グリード様についての質問とか、知りたいことなど……特に思いつきません。

え？　スリーサイズ？

私知ってどうするんですか。知りたくないです、そんなものは！　それは万一血痕——おおっと、結婚です、結婚——してしまった場合に知ればよろしいのです。洋服を仕立てる時に必要になるんですから。

仕方なので、私は見合いの席の初顔合わせで聞くような事柄を口にしてみました。

「ええと……グリード様の趣味は何でしょうか？」

非常にオーソドックスな、定番な質問です。
なのに——。

「……え、趣味？」

いきなり困った顔する勇者様の幼馴染二人。二人で顔を見合わせ
て眉を顰めたりしてます。

……もしかして、知らない？
「えーと、趣味はなし？」

……その疑問符が付いているような返答は一体なんでしょうか……。

「それじゃあ……グリード様の好きな食べ物？」

私は気を取り直して別のことを聞きました。けれど――

「……え？　好きな……食べ物？」

またもや困った顔して二人顔見合わせてますよ！？

「き、嫌いな食べ物でもいいんですが……」

と、つい付け足してみたのですが……。

「……嫌いな食べ物……？」

ああ、更に困った顔です！

そして困った顔のまま、言いました。

「ええっと、嫌いな食べ物はないよ。好きな食べ物も……なし？」

……だからどうして最後に疑問符が付くのでしょうか、レナス様……。

そして突っ込ませてよろしいでしょうか。

――知らないのかヨ！

趣味なし、好きな食べ物も嫌いな食べ物もなしだなんて……何か普通はあるでしょう？　なくても何か捻り出せるでしょうが！

例えば勇者らしく、剣の腕を鍛えることを趣味にしているとか。嫌いで食べられない物がなくて結構ですが、好きな食べ物の方は

過去に美味しいと言ったとか、お代りした食べ物があるでしょうに！
このようにいくらでも捻り出せるもんなんですよ、斯く言う私も
趣味を捻り出して『お茶を淹れる』事にした口です。

それなのに、捻り出せもしないなんて……本当に幼馴染なのでし
ょうか。疑いたくなってきましたよ。

さっきの“何でも聞いて”的な言動は一体なんだったのでしょうか。

「ちなみに……私がどういう質問をすると想定してたのですか？」
思わず聞いてしまいました。

そしてその質問にレナス様がサラッと言った事は――

「グリードの貯金額」

……。
……。

「……は？」

私はポカーンとしてしまいました。姫様もポカーンです。

予想もしなかったことを言われてしまいました！

どこをどう突っ込んだらいいやら、です。

レナス様の言葉をミリー様が継ぎます。

「いや、ほら、結婚するなら相手の収入って気になるじゃない？

財産とか生活力とか。お嬢様育ちのアーリアと違ってグリードは庶
民だし。不自由なく暮らしていけるか知りたがるかと思って……」

どうやらレベルが……質問のレベルが違いすぎていたようです。

私はごく初歩の、知り合っただけに知るべき事柄を口にしたので
すが、彼らは、結婚を前提とした突っ込んだ質問を想定していたの

です。

というか、貯金額って——ぶっちゃけ過ぎですよ！
いきなりそんな質問をするだなんて——んなわけあるかい！

まったく、お二人は私をどういった目で見ているのでしょうか。

……そのうち膝を突き詰めて話し合う必要があるかもしれないね。

「ちなみに、グリード様の貯金額はおいくらくらいなの？」
姫様が興味津々に聞いてきます。

その質問に、レナス様が口にされた金額に、私と姫様は目を剥きました。

——どうやら勇者様は大金持ちのようです。

勇者様の事を知りましょう（後書き）

ちなみに、グリードはアーリアの貯金額はとうに把握済み（笑）

勇者様の生い立ち

レナス様が口にした金額は、我がミルフォード家の収入の何十年分にも相当する金額でした。

いくら依頼を受けて魔族を討伐して報酬を得ているといっても、これはありすぎなのではないでしょうか。

とにかく、勇者様とはいえ一介の村民が持つにはあまりにも多すぎる金額です。

「な、何故そんなに……？」

まさかとは思いますが、何か後ろ暗いことをやっているわけではないですよ……？

そんな私の疑惑を知ってか知らずか、

「だからグリードの所にお嫁に来て、路頭に迷うことはないからね、アーリア」

親指を立てて、片目をバツチンと瞑って『安心してね』と続けるレナス様。

……サクツと殺意が湧くのを感しました。

今まで一度たりとも勇者様と結婚後のお財布を心配したことなどありませんよ！

それどころか、勇者様との結婚生活すら思い浮かんだことがないんです！

……まったく、お二人の中で私は一体どういう風に思われているのでしょうか。後で膝突き詰めて——（以下略）

「グリードだけじゃないの。実は私も小金持ちなのよねー」
ミリー様が満面の笑みで言いました。

——ミリー様によると、人間を襲ったり攫ったりする中級程の魔族の中には、人間の持つている物を収集するのを好む者も多いそうです。

宝石であったり、貴重な魔具であったり、陶器であったり。その種類は人（魔？）によりますが、一様に言えるのは、彼らはやたらと目利きだということ。いずれも貴重な、価値のあるものばかり集めるのだそうです。

で、勇者様たちは依頼を受けたりしてその魔族を倒すわけですが……。

「お宝はもちろん、頂くわよ？ それも報酬の一部だもの」
だそうです。つまり、魔族が人間から奪った貴重なお宝をその魔族を倒して横取り……いえいえいえ、回収するのだそうです。

もちろん、持ち主が分かるものはちゃんとお返しするらしいですが。

だけど、中には持ち主がおおっぴらに手を挙げられないものもあるそうなのです。

……恐らく盗品とか、横流しとかで闇のルートで出回っていたものなのでしょう。

回収したお宝は、一旦神殿預かりになります。

だから真つ当な正当な持ち主は神殿に申請して取りに行けば手元に帰ってきます。が、そういう後ろ暗い人は当然手を挙げられるわけはありません。

結果——持ち主のいない貴重なお宝が勇者様一行の手元に残るわけです。

「お宝は神殿が売って大陸通貨にするの。神殿側は手数料が手に入るし、私たちは現金が手に入るからどっちも損はない取引なのよ」
「……す、すばらしいギブ&テイクですね」

勇者と女神神殿は古から切っても切れない仲だとは聞いていますが、まさかこんな金銭的な観点からも結びついていたとは……驚きです。ついでに神殿に対する清貧なイメージも台無しです。

そりゃあ、神殿だってお金必要ですよー。司祭を養ったり派遣したり、各地に神殿を建てたり維持するのにだってお金がかかりますものねー。

寄付だけではやっていけないでしょう。お金はいくらあってもいいに違いありません。

でもそんな世知辛いお話はできれば永遠に知りたくなかったです……。
トホホ。

おっと、私の嘆きは置いておいて話を元に戻しますと、勇者様たちはそうして得た現金を全て山分けにするのだそうです。

ところがここで一つ問題が発生します。

——そう。ミリー様以外、誰もお金を少量しか手にしたがらないという問題が。

レナス様は神官なので、お金は必要最低限しか受け取りません。リュファス様は皇子でお金に不自由してないので、これまた最低限しか受け取りません。

ファラ様は、装備を整える以外は全くお金に執着しないため、受け取ったり受け取らなかつたり。

ルファール様に至っては、人間のお金を手にしても仕方ないということでびた一文も受け取ったことはありません。

つまり、お金が余るのです。

そして肝心のグリード様はというと——お察しの通り、お金には全く興味なし。必要金額以外は「ミリーの好きにして下さい」というだけで受け取らずだそうです。

まあ、あの浮世離れた美貌で守銭奴だったりしたら、何か終わってる気がしてしまいますけどね。『お金？ 何それ美味しいの？』と言っている方が遥かに似合ってますから！

で、ほぼ全員そんな感じで、さりとて自分だってそんなにお金が必要としない庶民育ちなミリー様は、途方に暮れた拳句——余ったお金を全てグリード様の貯金として冒険ギルドや神殿に預けるようになったそうです。

「だって、私の好きにしろって言ったもの」

目が全く笑ってない笑顔を浮かべてミリー様が仰います。

どうも自分以外のメンバーがあまりに無欲すぎて腹立てているようです。

きつと、きつちり山分け分を受け取っている自分がまるで欲まみれみたいに思えてしまうからでしょうね。

正当な報酬なのに、なんで罪悪感抱かなきゃならないの！といったミリー様の心の声が聞こえるようです。ええ。

そして、そんなミリー様の八つ当たりな措置のおかげで膨らむ一方のグリード様の貯金。

旅の途中、ふとしたきっかけで知り合った商人に『必ず返すから開店資金として少し貸してくれ！』と言われてあげるつもりで貸したら、商売大当たりで倍になって返って来たり。

グリード様がふと手にした藁しべが、物々交換していったあげくに宝物にグレードアップしたとかいうツツコミ所満載なエピソード

があつたりして。

うなぎ登りで右肩上がりに増えているそうです、今現在もグリード様の貯金は。

「グリード、村の両親に送金するくらいしかお金使わないからさ」
レナス様がにこにこ笑顔で言います。

「まあ、僕は彼らには受け取る資格はないと思うんだけどね」

……笑顔でさくつと毒を吐きました、レナス様。

空耳かと思いきや、ミリー様まで、

「そうよね。彼らもよくもまあ、平気な顔して受け取れるわよね。
グリードも放っておけばいいのに。妙に律儀なんだから」

などと笑顔で毒を吐きます。二人して笑顔でその会話は恐いです！

……もしかしてグリード様のご両親は訳ありなのでしょうか。

私はふと思いました。だって、お二人の口調はグリード様のご両親に対してなにやら含むところが多々あるようですもの。

私がそう思ったことに気付いたのか、ミリー様が私を見て苦笑しました。

「気を悪くさせたらごめんね。だけど、私たちに言わせるとあの二人は親の資格はないに等しいのよ」

「そう。最後の最後に、グリードにいらぬ思い込みをさせたことにも、僕らは憤りを感じているんだ」

レナス様は頷き、今まで浮かべていた笑顔を消して真剣な眼差しで私に向き直りました。

「アーリアに話したかったのは、このことなんだ。グリードは絶対に自分からは言わないから。だけど、アーリアにはぜひ知っておい

てもらいたい」

いつも笑顔のレナス様の、そのいつにない真剣な表情に気圧されるように私は頷きました。

「事の起こりは——グリードが生まれて間もない頃、僕の父親であるライエル司祭が偶然にラングレア村に立ち寄ったことにある」

レナス様が静かに話し始めました。

「その当時、村には小神殿も司祭もいなかったから、そりゃあ歓迎されたらしい。そんな中、父さんはある夫婦の相談を受けた。彼らは戸惑い、怯えて、どうしたらいいかわからない様子だったらしい——それがグリードの両親だ。彼らは先日生まれたばかりの息子がおかしいと訴えた。泣く度に家の中が嵐のようになると。魔に取り憑かれているのかもしれない。どうか見てもらえないかと。その言葉に彼らの家に出向いた父は、あらゆる種類の精霊の気配を感じて仰天したらしい。その精霊たちの関心は一身に赤ん坊に向いていた——もちろん、それがグリードだ。生まれた時から全種類の精霊の加護を——過剰とも言える加護を受けていた。普段は冷静なハズの精霊たちが、グリードが泣く度に取り乱すほどに。……まあ、彼らにすれば『グリードがおなかすいて泣いてる！』……どうにかしてあげて！』っていうくらいのもものだけだ。だけど、精霊の姿も見えず、声も聞こえず、気配も感じられない両親にしてみたら、恐怖以外の何者でもない。恐れて怯えて、ともに育児もできなかった。そんな二人に父さんは言った。『この子は魔に取り憑かれているのではない。精霊に大いなる力と加護を受けている稀有な子だ。女神に何

かの使命を与えられて誕生したのかもしれない。心して育てて欲しい』って。父さんにしてみれば、怯える両親を安心させようと思っ
て言った言葉だった。だけど——父さんは後々、この自分の言
った言葉を後悔したよ。今も後悔している。グリードの両親はそれ
を受け止める器じゃなかったんだ」

レナス様はそこで言葉を切って、私に苦笑しました。

「彼らは良くも悪くも普通の村民で。だから、自分たちに生まれた
子供に力があるということは受け入れることができない事だったよ
うだ。彼らはグリードに畏怖し、どう接していいか、どう育ててい
ったらいいのか分からなかった。目に見えない精霊の力に怯え、そ
の加護を受けているグリードに怯え——近付くことすらできなか
ったんだ。心して育てる——なんて出来ようはずがない。むしろ彼
らにとつては重荷になる言葉なだけ。普通に接することすら——声
を掛けることすらできなくなった。結果、彼らは——育児を放棄し
たのさ」

レナス様が吐き捨てるように言いました。

「確かに食事は作っていた。だけど、抱き上げてあやして、それを
与えようとはしなかった。恐くて近寄れなかったんだそうだよ。泣
く度にグリードの周囲が嵐のように吹き荒れるからって。だけど、
それは世話を促す精霊の知らせのようなもので、決して人を傷つけ
る種類のものじゃない。だけど、一度だってその嵐をつつきってグ
リードを抱上げたことのない彼らには分からなかったようだ。そん
な彼らに代わってグリードの世話をしたのは、誰だと思う？ 精霊
だよ。実体のない、意思と力だけの存在である彼らが赤ん坊の世話
をしたのさ。村人も恐ろしがって近付かなかったからね。……グリ
ードの両親は食事さえ作っておけば、精霊が世話をしてくれること
に安堵したし、また都合がよかった。だけど、彼らは思いも寄らな
かっただろうさ。意思を表示する前に彼の欲求を察知することので

きる精霊が世話をする——弊害なんて」

面白くもなさそうな笑いを浮かべるレナス様に、私は言葉もツツコミもありませんでした。

聞かされた話に、その内容にショックを受けていたからです——。

「数年後、再びラングレアに立ち寄った父さんが見たのは何だったと思う？ 笑いも泣きもしない、言葉も話さない、無表情に見返すだけの——まるで人形のような子供さ」

——グリード様の過去は、私が思っていた以上にハードでした。

勇者様の生い立ち（後書き）

なんで藁なんて手に持ってたんですか、勇者様？

——と、後半のシリアスな空気に耐えられなくなったので、主人公の代わりに突っ込んでおきます。

精霊の加護

私という時は大部分が笑顔でも、ふとした瞬間にガラスのように何も映さない瞳と表情になるグリード様。

とてもそうとは思えませんでした。あれがデフォルトの状態なのだとあなたが言っていました。それは——多分本当のこと。

ずっとずっとあんな表情をしていたんですね。

無表情で硬質で——まるで精巧に作られた人形のようなグリード様。

赤ちゃんの唯一の感情の吐露であるハズの泣く事すら失ってしまった——哀れな子供。

私はなぜか沸々と胸の奥で怒りが湧き上がってくるのを感じました。

彼の両親に。レナス様のお父様に。そして精霊に。

私の父も兄も思いつきりミルフォード家気質の面倒くさがり屋で、事あるごとに『面倒くさい』と言う言葉を連発する何か終わっちゃった人たちですが、愛情を示すことを面倒だなんてことは決して言いませんでした。

私は愛情を持って育てられえたことを知ってます。だからこそ、時々ライツとさせられても縁を切ろうとは思わないでしょう。根っここのところで肉親の情で繋がっているのがわかってるから。

もちろん、全ての親が必ず子供を愛するだなんて幻想は抱いてはおりません。世の中には子供を捨てる親だっています。そういうのを見聞きしたこともあります。

それに、貴族の中では歪な親子関係を築いているものも少なくありません。ここの王族はその点非常にノーマルですが、同じ館に住

んでいるのに顔も合わせない、子供を政治の道具としか考えてない高位の貴族は案外多いのです。

だからグリード様だけが特別不幸だとは思いません。曲りなりにも両親が揃い、衣食住の不自由はしてなかったそうですから……親に捨てられて孤児院にいる子供たちに比べたら恵まれているでしょう。

だけど——それでも私は沸々と湧いてくる怒りを押えることができませんでした。

親に無視されるどころか、それを悲しいとも辛いとも思う感情すら与えられなかった子供。

愛情を求めることすら——知らないのです。それがどういうものであるのか分からないのですから。

確かにただの村人AとZに全精霊の加護を受けた子供は荷が重過ぎます。混乱するだろうし、恐いしパニックにもなるでしょう。その気持ちはわかります。同じモブですから！

でも相手は赤ん坊です。無力な——とはちよつと言い難いですが——独りではなにもできない赤ん坊なのです。

それを育児放棄？ 食事の用意はしていたとはいえ、そんなのは誰だってできます！

彼らは精霊が世話しているのをいいことに、楽な方法を選んでいただけ。

——罪悪感からの免罪符として。

本当に必要だったのは抱きしめること、ぬくもりを与えることだったのに。

それを怠ったなら——親として失格です。

だからこそ腹が立つのです。そこに居たのに、一歩踏み出せばよかったのに、彼らはそれをしなかったから。

それに——これは想像ですが、精霊がグリード様が泣く度に局地的嵐を起こしたのは両親が世話しなかったからなのではないかと思うのです。

だって考えても見て下さい。加護を与えるくらい精霊はグリード様を愛しているのですよ？

それが泣いたからといって、いきなり局地的な嵐を起こすものでしょうか？ 赤ん坊の世話をする人間が必要だとわかっていないのに？ 多分、初めはほんの小さなお知らせ程度のものだったと思います。風が吹くとか、机の上のものが揺れるとか。

それを恐がって世話をしなかったから、ますます精霊による警告が激しくなっていくたのではないでしょう。想像でしかないのですが、そんな気がします。

結果、ますます両親は恐れを抱いてしまったのでしょ。

……って、あれ？

何となくグリード様の全ての不幸の原因が精霊にあるような気がしてきましたよ……？

精霊の加護がなければ、グリード様の両親も育児放棄はしなかったと思うし、そしたらモブの村人にしては美形すぎる村人として普通？に育っていったと思うのです。

きっとモテモテの人生だったでしょうね——って、今も同じですけどね！

精霊の加護がなければグリード様だって普通に笑って普通に怒ったり笑ったりする人として育ったに違いありません。

少なくとも歩く天災とか、最終兵器などと呼ばれることはなかったと思います。

精霊は世界に彼らの司る力が遍く流れるように精霊王が生み出した存在。この世を構成する自然の力そのもの。

実はなく——まさに意思だけの存在。

彼らは非常に気まぐれで、時に残酷で、時に慈悲深く——ある時は老成した大人のようであり、ある時にはまるで子供のようにわがままになるのだそうです。彼らの精神構造は人間には理解できないというのが、広く知られている事実です。

見えない私たちにとっては存在するのかもしれないけど、身近なようでいて遠い存在。それが精霊。

そんな精霊の加護を受ける人間は稀有で、特別で、非常に幸運なことだとされています。

例にもれず私もそう思っていました。

ですが、今話を聞いて初めて『精霊の加護』が決して幸運なことではないのだと分かりました。

グリード様が望んで加護を受けたわけではないのです。また望んだからといって得られるものでもないでしょう。

昔は精霊の力をほとんど使わなかったという以前のミリー様の話から分かるように、グリード様が精霊の力を望んだことは一度もないのだと思います。……まあ、今は開き直っておおっぴらに使っているようですがね！

精霊の加護は、僥倖。

だけど同時にそれは奇禍きかでもあるのでしよう。そんな気がします。グリード様の運命を狂わせたのも精霊なら、彼を守り育ててきたのも精霊。

それこそがまさに『精霊の加護』の本質を表しているのかもしれない。

私がつらつらそんなことを頭の片隅で考えている一方、レナス様の話は続きます。

グリード様の現状を知ったレナス様のお父様であるライエル司祭様は、神殿にラングレア村に小神殿を建てること、そして自分をこの神殿付きの司祭に任命するように願いました。

当時ライエル司祭は特別な任務に就いていたこともあって、神殿側はかなり渋ったのですが、彼の熱心さに負けて結局ライエル司祭様をラングレア村に派遣することを許可したのだそうです。

そして、ライエル司祭様はラングレア村に移り住むことになりました。妻と幼いレナス様を連れて。

——グリード様を影ながら支えるために。

……つて、とてもとてもいいお話ですが、ツツコミ入れていいですか？

そもそもグリード様の不幸に一役買っているのは、レナス様のお父様ですよ？

ただでさえ怖いっている両親に『女神に何かの使命を与えられて誕生したのかもしれない。心して育てて欲しい』なんてプレッシャーを与えたから、さらに萎縮しちゃったんですよ？

それに、そのお言葉は具体的なアドバイスに欠けていると思われます。

どう心するんですか!？

心するだなんて抽象的な言葉で子育てができたら世話ないと思うんですよ！

まったく、これだから男は……！

なぜか先日受け取った私宛の書簡に書いてあった文面などが不意に頭に浮かんでしまい、ツツコミから怒りヘシフトする私です。

ああ、伝えておりませんでしたね。実は先日、ファミール様から私宛の書簡を受け取ったのです。

どうも王様の使いで例の勇者様の書簡を我がミルフォード子爵邸

に送って返信を持って帰る際に、父に私個人宛の手紙を託されたいのです。

父とは顔見知りなファミール様はその書簡の中身を知っていて、私に渡すかどうか悩んだ末、やっぱり……ということでした。先日、手渡しにわざわざ私の部屋まで届けにいらしてくれました。

で、その書簡に書いてあった文章がこれですよ。

『まあ、とにかく頑張れ！』

たった一文。よりによってこの文面！ しかも、最後に付けられた疑問符が更に私の苛立ちを増大させました。

イラつとした私が、その場で手紙をクシャツと丸めて部屋のゴミ箱にポイツと捨てたのは言うまでもありません。

前言を翻すようですが、親子の縁を切ってやりたいと切実に思った瞬間です。

ファミール様もファミール様です。こんな文面の手紙は渡さんでよろしいですよ！ 私に見せる前に燃やしてくれていればよかったんです！

これだから男は……！

おおっと、思わず脳内の話が思わぬ方向に行きそうになってしまいました。

今はグリード様の話が先です。ライエル司祭のことで、私はどうしても聞きたいことがあるのです。

それは――。

「レナス様、お父様はどうしてグリード様の両親が精霊の加護を持った人間を育てる器ではないと分かっているのに、神殿に引き取るうとはしなかったのですか？」

わざわざ小神殿を建てさせてまでグリード様を見守ろうとした理由が分かりません。

親に値しない人たちだと分かっているながら、そのままグリード様を両親の元に置いたままだったのは、なぜでしょうか。

神殿に付属の孤児院があるのですから、そこに預けるとか、自分の家でレナス様と共に育てるとか、もしくは司祭仲間の方に養子に出すという選択肢もあったと思います。

少なくとも彼らは精霊の扱い方を知っているのですから、両親に預けているよりはグリード様にまじな環境を作って上げられたでしょう。

なのにどうしてだかライエル司祭は、あの村で、あの両親の元でグリード様を育てることに固執していた……としか思えないのです。

私の当然の疑問に、レナス様は少し苦しい微笑を浮かべて言いました。

「時期が悪かったんだ。普通の時なら父さんはグリードを引き取って自分の息子として育てただろう。けどあの時はそれはできなかった。正確に言うと――グリードが勇者に選定されたあの時まで。なぜなら、グリードは勇者候補だったからだ」

――勇者候補。

その響きは、なぜだか私には『精霊の加護』同様、グリード様に嵌められた枷のように聞こえたのでした。

勇者候補も楽じゃない（前書き）

説明部分が多いです。

勇者候補も楽じゃない

——話は二十年前に遡る。

当時、神殿に使える神官の中で『予知』のスキルを持つ者が魔王の出現を予言した。

ある一定の周期で出現する“魔王”。

代々の勇者が身につける伝説の鎧や聖剣を保管する神殿は勇者と縁が深く、先代の魔王の出現から百八十年近く経って魔族の脅威の記憶が一般の人々の中から消えても、神殿に所属する神官たちだけは違っていました。

近い将来に必ず魔族の侵攻があると、教皇様はじめ司教様たちは考えていたようですし、その準備もしていました。

そこに出た予知です。おそらく『ホラ来た！』と思ったに違いありません。

彼らは兼ねてから計画していた通りに、精霊の気配が聞こえる、もしくは精霊の声が聞こえる司祭を密かに各地に送り込みました。

——勇者候補を見つける為に。

レナス様のお父様であるライエル司祭様もそんな中の一人でした。

「うちは五代前の勇者の子孫だね。精霊の加護こそ受けてないが、代々精霊の“声”が聞こえる人間が多いんだ」

五代目の勇者様。勇者物語を全巻制覇している私はもちろん知ってますとも！

確か農家を営んでいた純朴青年だったハズです。

両親を幼くして亡くし、祖母に育てられたという方で、ちょっぴ

り押しに弱いけど勇敢な好青年だったようですね。

ちなみに押しに弱いと思われるのは『俺が勇者なんて不相応だ』という弱気なんだか謙虚なんだか分からない事を言って洩っていたのを、気が強くてちょっぴりツンデレ属性がある王道幼馴染に『あんなならきつと出来るわ！ 私も一緒に行つてあげるから、みんなの為に頑張ろう！』と半ば押し切られる形で勇者になったからです。あんななら出来る、の根拠はよく分かりませんが、とりあえず五代前の勇者様、幼馴染の女の子にいいところを見せようと思ったに違いありません。物語では勇者様、その女の子にちよつとホの字っぽかったですからね。

で、その幼馴染の女の子は治療師^{ヒーラー}としての力があつたらしくて、パーティーの回復役として常に勇者様の傍らにいたそうです。

勇者様テンション上がりまくりですね。そりゃあ頑張るわけですよ。

途中、幼馴染の女の子がお約束のように魔族に攫われるというイベントがあつたり、勇者様に気があるどこぞの姫君の横槍が入ったりもしましたが、二人の絆は深く、お互い励ましあい、勇者様は魔王を無事討伐して大団円。

最後に二人は手を取り合つて故郷の土を踏んだと結んでありますので、おそらくくつついたのでしょう。

レナス様はその二人の子孫にあたるってわけですね。

でも———— 気の強い幼馴染の女の子と、押しに弱い青年。

ふと浮んだフレーズに、私は向かいに座るミリー様とレナス様を思わず交互に見てしまいました。

腕輪のことでグリード様に押し切れたことといい、レナス様も充分押しに弱いようです。

——血、ですかねー。

生ぬるくなつた私の視線に気付くことなくレナス様は話を続けま
す。

「なぜ父さんのように精霊の声が聞こえたりする人間が勇者候補を
探すのかといえば、歴代の勇者は例外なく『精霊の加護』持ちだろ
う？ あれって一般的に言われているように、勇者になったから加
護が与えられるんじゃないで、元々勇者になる人間は精霊に好かれ
ていることが多いんだ。だからそれが判断基準になる」

なるほど私は思いました。

つまり、精霊の加護を受けている人・精霊に好まれている人＝勇
者候補というわけです。そしてそんな人を探すにはもちろん精霊の
声が聞こえたり気配が分からなくてはなりませんよね。

だからレナス様のお父様が選ばれたわけですか。

「そうして各地を旅して——出会ったのがグリードだ。生まれなが
らにして『精霊の加護』を持つ子供。それも全属性ときてる。勇者
になる可能性が高かった。だけど、父さんには勇者候補には関われ
ない、ましてやその子の親にだってその子が勇者候補だと言えない
理由があつた。……魔族から守るために」

私はその言葉にハツとしました。

なぜ、レナス様のお父様がグリード様を引き取れなかったか判つ
たからです。

魔王が誕生していないからといって、魔族がこの世にいないわけ
ではありません。彼らだってバカではないですから、勇者が勇者に
なる前に探して消そうとするでしょう。

神殿が大々的にでなく、密かに探し出そうとした理由はそこにあ

ったのです。

大袈裟に動いては、勇者候補がここにいと教えるようなもの。知ったが最後、彼らはその候補を殺そうとするでしょう。

いくら精霊に好かれていたり、加護を受けているとしてもそれだけで魔族に抵抗するのは難しいのです。ましてや雑魚ではなく、上級の魔族相手ならば――。

だから司祭様たちは本当に密かに探して、そして探し当てても彼らと積極的に関われなかったのです。

「神殿からは勇者候補と深く関わってはいけないと厳命されていた。候補を探し当てても所在を確認するだけで速やかにその地から立ち去れと――」

――『女神に何かの使命を与えられて誕生したのかもしれない。心して育てて欲しい』

思えばそれがライエル司祭様が言える精一杯のことだったのかもしれません。おそらく本来であれば、その親とも接触を持つてはいけなかったのでしょうか。

時期が悪かった。そうレナス様が言った訳もわかりました。

『予知』の前だったら、貴重な『精霊の加護』持ちの子供を神殿は喜んで引き取っていたでしょう。ただどグリード様が実際勇者の宣託を受けるまでの約二十年間、神殿は『精霊の加護』持ちの人間とは関われなかったのです。

でも――ふと疑問に思いました。

勇者候補に関わってはいけない――それなのに、結局ライエル司祭様は村に小神殿まで建てて、自分がその司祭に納まったのです。これは充分深く関わってしまったとは言えないでしょうか……？

その疑問を口にした私に、レナス様は苦笑されました。

「父さんがどうしてもってねじこんだっていうのもあるけど、その時には奇しくもあの両親のせいでグリードは候補ではあるけど、勇者になる可能性は低いと判断されたんだよ。だから神殿も渋々ではあるが許した」

「両親のせいで……？」

「そう。グリードが勇者になった今は笑い話にしかないけど、その当時は両親がグリードを育てるのに失敗したからグリードは勇者にはならないだろうとされたんだ」

「——はい？」

私がバカなんでしょうか……レナス様の言っていることがよく分かりません。

育てるのに失敗したから勇者にはならない？

なんじゃそりや、ですよ！

「つまりね、神殿はこう考えたんだ。勇者の両親になるなら、彼らには【勇者の両親】としての役割が与えられているはずだ。なのに、明らかにグリードを育てるのに失敗しているし、総合的に考えて勇者の肉親としての器に欠けている。だからあの二人の子供であるグリードはおそらく勇者ではないだろう、ってね」

「——は？」

私はポカーンですよ。

笑い話に……って、ちつとも笑えませんが！ 現に勇者はグ

リード様じゃないですか！

何でしょうか、そのメチャクチャな発想は。

勇者様の親はすべからく人格者でなければならぬのでしょうか？ というか明らかに村人A～Zのモブ属性満載の人物の子供じゃ、勇者になれないと……？

「いやあ、今までの歴代の勇者の親——育ての親含んでだけど、たとえば勇者が周囲とは明らかに違った力の持ち主であっても、例外なくそれを受け入れてかつ普通の子のようにわけ隔てなく育てる器量があつてね。だからグリードが勇者に選ばれるまでは、親のそういった気質をも含んで判断規準にされていたんだ」

私は開いた口がふさがりませんでした。

隣で姫様もポカーンとしてます。気持ちと同じようです。

前例なんてものは破るためにあるんですよ！ そんな不確かなものでグリード様の人生が左右されたなんて……不憫すぎます。

だけど、そういう神殿側の思い込みがあつたなら、ライエル司祭様がグリード様と両親を離さず見守るだけしかできなかったのも無理はありません。

恐らく神殿側としては勇者になる可能性は低くても精霊の加護を受けている以上、グリード様は勇者候補のままであることには変わりはなく、彼の安全の為に両親と引き離してグリード様をライエル司祭様が引き取るなんてことは認めることはできなかったのでしょう。

だから村に小神殿を建てて、事情を知っているライエル司祭様を送り込んだのは、神殿側にとってはギリギリの譲歩だったに違いありません。

そして全てを知るライエル司祭様は神殿とグリードの間に板ばさみになりつつも、出来る範囲内で彼を見守ることを選んだのです。過度に関わらないように、でもグリード様が道を外さないように。罪悪感と積極的に関われないジレンマを抱えながら。

何ていうか……全てがギリギリのところで動いていた感じです。

そして、その犠牲者は間違はなくグリード様。

自分が勇者候補であるとは知らされないまま、ただただ周りの事

情に振り回され普通の子供のように育つ機会を失ったのですから。

「まあ、勇者にはならないうちと思われていたグリードに勇者の宣託がされたことで、神殿は親を判断規準にするのを止めた様だけだね」

「当然です！」

そりゃあ、親がアレだから勇者にはならないうちと思っていたグリード様が勇者に選ばれたのだから、神殿はビックリ仰天でしょうよ。

きっと自分たちの間違っただけだと思い込みを忘れて、両親のことも『これも女神が勇者に与えた試練だ』なんて言葉で片付けてしまったに違いありません。

——勇者に与えられた試練。

勇者物語においてしばしば現れるその言葉が、これほど腹立たしく感じたことはありません。

たった一文ですが、試練を受けている当の勇者さまにとってはそんなに軽いものじゃないんですね。

今初めて分かりましたよ。

いつかグリード様の話が勇者物語で語られた時、両親との関係が“勇者に与えられた試練”なんて詞で結ばれてしまうと思っただけ——何かムカムカします。

某・ニュースペーパーさんたちには是非ともその表現を改めてもらいたいものです。

それにしても——なんだか今まで聞き流してましたけど、ここに来て急に気になったのは神殿が勇者候補を探す理由です。

神殿が何もしない方が勇者候補たちは安全だと思うのは私だけで

すか……？

当の勇者様に女神の神託が下るまで、神殿は何もしないで通常運転していた方が世の中の勇者候補たちのためのような気がして仕方ありません。

だって、確か大神殿には女神様から勇者選定の神託が下るはずですよ。誰が勇者に選ばれたかそこで分かるのだから、その時になつて迎えにいきましょう。

——つて、あれ？ 候補を挙げる必要がそもそも感じられないのですけど？

私がそう言つたとたんに、レナス様が困つたように笑いました。

「あー、そう言われてるんだけどねえ。……これ、機密だから姫もアーリアも誰にも言っちゃダメだよ？ 実は大神殿に下る女神の神託は、勇者が選定されたつて事実だけで、誰が勇者なのかさっぱり分からないんだよ」

「——はい？」

私と姫様の台詞が見事にハモりました。

「大神殿の奥深くにある『勇者の間』と呼ばれる、鎧や聖剣などが収められてる部屋の封印が解けるから勇者が選出されたつて分かるだけでね。誰が勇者なのかさっぱり分からないのが現状だ」

「……………」

「精霊に聞いても、大神殿で聖剣や鎧を受け取るまでは勇者の身の安全のことを考えるのか、誰が勇者になつたか教えてくれないしねだからぶっちゃけ、名乗り出てくれないと——」

「あー、レナス様、みなまで言わなくてもいいです。大体わかりましたから」

私はこめかみを押えつつ言いました。

つまり、神殿が分かるのは勇者が現れたぞーという所まで。

実際誰なのかは、その勇者様が名乗り出てきてくれないと分からないということです。

そして、勇者になりたいと思っている人ならともかく、普通は勇者に選定されたってすぐに『よし、みんなのために魔王を倒そう』だなんて単純に思うはずありません。

勇者様が無理だと思って沈黙したら、そこでジ・エンドです。人類の滅亡まっしぐらといったところでしょう。

だからどうあっても神殿は勇者に勇者様になってももらわないといけないのです。

勇者候補を見つけるのはそのため。誰が女神に選ばれたか速やかに把握するためです。

で、もし勇者様が躊躇されていたら、人間を守るために勇者として起って欲しいと説得するでしょう。

唾をつけるというか、勇者様とつながりをつける意味もあるかもしれない。そうなれば勇者様は神殿を無視するわけにはいきませんものね！。

ああ、そう考えてしまうと、なんだか神殿への幻想がガラガラ崩れていきます。

神殿の神託が勇者様の装備の封印が解けるだけだなんて、思ってもみなかったですよ。

アレですか？ 大神殿はただの保管場所ですか？

……なんだか、そう信じていたことと、事実はいろいろ違う気がします。

夢は夢のままにしておいた方がいいと思うのですが。

だけど、これからも知らなくていいようなことを知ってしまつて予感がひしひしとする私なのでした。

絆されました

「父さんがまず最初にしたことはグリードに言葉を教えることだった」

レナス様の話は進みます。

「それから彼を外の世界に連れ出すこと」

グリード様はライエル司祭様が赴任してくるまで、ほぼ引きこもりの状態だったそうです。

だから近所の村人たちはグリード様の存在は知ってたし普通の子供とは違うことは認識してはいたのですが、実際に彼の姿を見ることはなく家の中でそんな状態になっていたことを知らなかったらしいのです。

恐らく、おかしいと思ってても面倒なことに関わりたくないという意識が働いたのでしょう。

「父さんと僕に手を引かれたグリードを見て、みんな驚いていたのを覚えてるよ」

そこまで言ってレナス様はクスクス笑いました。

「一応あの両親は食事と共に服も差し入れていたんだけど、実際に測って用意したものじゃないから、身体に合っていないぶかぶかの服でね。何とか体裁整えて、靴も用意して外に連れ出したけど、髪も長かったしあの容姿と相まってどう見ても女の子にしか見えなかった」

どうやらグリード様の美貌は幼少の頃からのようです。

ぶかぶかのシャツを着て長い髪の毛をそのまま垂らした、どうみても女の子なちまっこいグリード様が、手を引かれてよちよち歩いている姿が脳裏に浮んでちょっと萌えそうになった私です。

「ちようどうちの一家が村に越してきたのもその頃よ」

ミリー様が不意に口を挟みました。

ミリー様は元タルーエンという比較的大きな街で生まれたのだそうです。

だけど、父方の両親——ミリー様にしたら祖父母——の具合が思わしくないということで、父親の故郷であるラングレア村に一家揃って越して来たとのこと。

ちなみにミリー様のお父様は物品取引の仲介業をなさっているようで、長期間家を留守にすることも多いらしいのです。おそらく治安に不安のある街より、鍵もかけないで夜眠ることができる故郷の方が妻子の為にいいとの判断もあつたのでしょうかね。

私はこの三人が幼友達でいつも一緒に居た理由が分かるような気がしました。

レナス様もミリー様も閉鎖的な村にあつては新参者です。特に子供たちなんかは新たに入ってきた二人に警戒して遠巻きにしていたことでしょう。

グリード様は村出身ですが、今まで没交渉だったのだから、当然、村の子供たちにとっては新参者同然、仲良くできるはずもありません。必然的に三人で一緒にいることが多かったのでしょう。

それに……、と私はこっそり付け加えました。

この三人の容姿の華やかなこと。それが他の子供たちには気後れして近付きたくない原因の一つになったに違いありません。

平凡顔でモブな私には村の子供A＼＼の気持ちがかかります。傍に居たら引き立て役にかなりませんものね！ 近付きたくないわけですよ。

……ちなみに、私の今の状態もそんな感じです。

国一番の美女と言われているルイーゼ姫様と、美形カップルのミ

リー様とレナス様に囲まれてますからね！

ですが、私はもう大人ですから、気後れはしても忌避はしません。それに、なんといえますか、この状況に慣れつつあるようです。ここ何日も美形に囲まれることが多かったから、免疫ついたのでしょうか。

美人は三日で飽きるって言いますしねっ！——って、何か違う気がします！

と、一人で内心ノリツツコミをした後、私は気に掛かっていたことをレナス様たちに尋ねました。

「レナス様のお父様が村に越してきてから、グリード様のご両親はどうなさったのですか？」

二人が語られたのは、自分たちが村に越してきてからのグリード様の様子ばかりです。ただで一切グリード様のご両親のことについては言及されておりません。

ライエル司祭様が村に來たのだから、アドバイスを受けるなり説教を受けるなりして、多少歩み寄りがあると期待したのですが……。ですが、私の言葉に顔を見合わせた後、遠い目になったお二人に私は淡い期待がはじけるのを感じました。

「うーん、改善されたといえば、改善されたんだけど……」

レナス様がため息を付きながら答えました。

ライエル司祭様の助言というよりも、レナス様やミリー様や、そのお母様たちが平気でグリード様に接したり触ったりしているところを見て、ご両親はグリード様に対する恐怖をようやく和らげたそうです。今まで別々だったところを、同席して食事をしたり、話しかけるようになったとか。

——だけど、すでに絆を取り戻すには遅かったのです。

一見、普通の親子関係になったかのように見えたものの、グリード様の中で親に対する親愛の感情は芽生えず、またご両親も恐怖は薄らいだものの、畏怖の念は残っていて腫れ物を触るような接し方だったそうです。

「そして最悪だったのは、今まで隔離されていてグリードの前では言わなかった事を、彼の前で口にするようになったことだった」

『なんでこんな力を持って生まれたんだろう』

『何か意味あって生まれてきたに違いない。でなければ、私たちにお前のように力をもった子供が生まれてくるはずはないのだから』

——その言葉はグリード様にとって自分を否定しているかのよう
うに聞こえたに違いありません。

「グリードがいつだったか自分のことを『何か理由があつてこそ存在するのであつて、その理由がなければ生まれる必要もなかった』
と言っていたことがあつてね。どうしてそう思つたか聞いたたら——
どうも両親が言った言葉でそう思うようになったらしいんだ。違つて否定したけど、今でもそう思っている節がある。親愛の感情はないけど、自分を産んだ親から言われたことだから、グリードにとつてはやっぱり影響があるんだろうね。実はうちの父さんが心底後悔しているのはそこだよ。自分のかつて言つた言葉が両親にそう言わせ、それが巡ってグリードにそう思わせたのだと考えて」

——『何か理由があつてこそ存在するのであつて、その理由がなければ生まれる必要もなかった』

……なんて哀しい言葉でしょうか。

この言葉を聞いたとたん、心臓が掴まれたように一瞬痛みが走り

ました。

力があるというだけで、そこにただ存在しているのではダメなのでしょうか。力をもった理由がないと存在意義がないのでしょうか。精霊の加護と巨大な魔力を持ったグリード様が、ただのグリード様であつてはいけないのでしょうか。ただ在るだけでは認められないのでしょうか。

そして――胸が痛いのは、自分も彼を“ただのグリード様”ではなく“勇者であるグリード様”としか見てなかったからなのでしょうか。

……多分そうでしょう。

勇者であるとか、精霊の力とか、天災とか最終兵器とか、そんなことばかりが頭にあって、グリード様の中身をよく知ろうとしなかったのは私も同じです。……ご両親を責める資格なんてないのです。

レナス様が顔を顰めて言いました。

「グリードが勇者として宣託を受けた後も、彼らは『女神が魔王を倒して地上に平和をもたらすために力を与えてくださったんだ。それがお前が生まれた意義に違いない』と言ったんだ。村から送り出すときの最後の言葉だつて『女神様から授かった力とお役目だ。できると信じている。そのためにお前は私たちの元に天から下されたのだから』だ。グリードの身を心配する言葉は一切なかった。ただ、頑張りなさいというだけだった」

その時のことを思い出したのでしよう。レナス様の表情がだんだん険しくなっていくます。

「うちの両親やミリーの両親の方がよっぽどグリードを心配していたよ。もう二度と会えないかもしれないというのに」

「あの時は腹が立ったわね。だけでももっと腹が立ったのは、その両親の言葉のせいで、グリードが魔王と魔族を倒すのが自分の存在理由だと思い込んでしまったことよ!」

ミリー様が苛立たしげにテーブルに拳を叩き付けました。

「あー、腹立つ！ グリードは勇者として選ばただけであって、勇者になるために生まれてきたわけでも、ましてやその為に存在するわけでもないってのに！」

——魔王を倒すのが存在理由。

あああ、なんかこう胸がギュウギュウ痛いです。

そんな風にずっと思ってた戦ってきたのでしょうか。理由があつてこそ存在するのだと思い込んで育ってきて、そして勇者に選ばれたばかりに、魔王を倒すのが自分が生まれた意味だと考えて——。

……それはあまりに悲しすぎます。

そうでないのだと言つてあげたいです。いえ、おそらくレナス様たちが口をすっぱくして言っているでしょうけど……。

存在理由なんて必要じゃない。グリード様がただのグリード様でいいと考えている仲間たちがいるじゃないですか、って。

——勇者様という目でしかグリード様を見れなかった私には、言う資格はないのかもしれませんが……。

「だからね、僕達はアーリアに感謝しているんだ」

いきなりレナス様が私に微笑みを向けて言いました。隣ではついさっきまで激昂していたはずのミリー様まで、やさしい笑顔を浮かべて私を見えています。

「君を好きになることで、グリードは魔王を倒すこと以外に生きる意味を見出せるようになったから」

「アーリアの存在が両親の言葉の呪縛からグリードを救ってくれたの。すごくすごく感謝してるわ」

「い、いえ、そんな……」

私はうろたえました。

本当、何にもしてないんですけどね！

だから感謝されても正直困るといいうのが感想です。

それに、私を好きになったことで別に生きる意味を見出したと言われても、なんかすごく重いような気がするのには私がモブだからでしょうか……。

受け止めるだけの器量がないのかもしれませんが。

だから、ね。実はグリード様のご両親の気持ちも少しは分かるのですよ。戸惑い、畏怖する気持ち。なんで自分なんだろうと思ってしまう気持ち。

でもその反面、グリード様に“力をもった理由がないと存在意義がない”なんて思っていて欲しくないのです。

矛盾してますか？

あああ、なんか思考がグルグルです。ぐるぐるぐる。

いろんなことを知って思考と感情が追いつかない状態です。

そんな私の状態がわかったのでしょうか、姫様が突然言いました。

「アーリアはどうやらもういっぱいいいよ」

だからそろそろお開きにしましょう？　そういうニュアンスを言外に含んだ台詞と口調です。

その姫様の言葉に私を見やってミリー様とレナス様は微笑を浮かべました。

「いろいろなことを喋ったものね」

「僕らからの話もだいたい終わりだ。あとはアーリア自身がグリードをもつとよく知って判断して欲しい」

私は自分さえの感情がおぼつかずに思考がぐるぐるしているものの、レナス様の言葉にこくりと頷きました。

「ようやく人並の感情が芽生え始めたところで、あいつ自身もそれ

に慣れてない。だから、アーリアを戸惑わせたりするかもしれない。だけど、決して悪い奴じゃないんだ」

こくりと頷きます。

勇者ではない部分のグリード様が決して悪い人じゃないのはどうにか分かってますから。

「あいつは決して君を傷つけたりしない」

私はこの言葉にもこくりと頷きました。

心のHPはざっくり削られるものの、グリード様が決して私を傷つけることはないと分かっています。……だって、私に触れる手はとも優しいのですから。

思えば最初からそうでした。

最初に姫様を助けて欲しいと、城に到着したばかりのグリード様に縋った時にだって、宥めるように私に触れた手はとても優しく、気遣いに溢れていました。あの時は夢中でしたけど、後になってなんて優しくて素敵な方なんだろうと思ったものです。

……すっかり最近では忘れそうになっていましたけどね！

ただどあの時に芽生えた好意は胸の奥底では決して忘れてはいなくて、だからこそ求婚に困惑しているのに、根っここのところではあの方の好意をきっぱり撥ね退けることができないのでしょうか。

勇者様だからとか、国のこととか、周りからの圧力とか、そんな理由ばかりではなくて……私の内にもグリード様に応える好意が確かにあるからだったのです。

……困りました。非常に困りました。

拒否しきれない好意。だけど、それは好意であって、決して恋情ではないから。

……と思うのです。……そうですよね？

いえ、恋をしたことがないからよく分からないのですが、好ましいと感じるのと、好きと感じるのは別だと思っんですよ。……物語の受け売りですけど。

——恋愛物語のヒロインのように、グリード様を前にしてドキドキする？

私は自分の心に問いかけました。

……ドキドキしますね！ でもそれはときめきの類ではなくて、次何するつもりなんだろうか、何をされるんだろうかというドキドキですけど！

——いつもいつもグリード様の事を考えてる？ あの方がことが頭から離れない？

……離れませんか！ ええ、たしかによく考えていますとも！

私の今現在の悩みの原因は全部グリード様ですから！

——って、……アレ？

私は自分で自分の心にどうツツコミ入れていいやら途方に暮れてしまいました。

……どっちなのでしょう？

好意なのか恋情なのか、自分の心が分からない——だなんて王道恋愛物語のベタなお話ですけど、何かそれとは違う気が……。

……どうやらヒロインにはなりきれないようです。

だけど、ただ一つ分かっているのは——自分が絆されつつあるということですよ。

好意なんだか恋情だかわからない天秤が、確実にグリード様に傾いているのが分かります、ええ！

最初に力やら天災やら兵器やらを聞かせて脅しておいて、次に涙
ちよūdあいの話聞かせると、何か妙に謀略臭いものを感じさ
せるわけですが……。

——レナス様とミリー様の一連の説明が『アーリア絆し作戦』だ
ったりしたら、間違いなく大成功です。

絆されました（後書き）

それ恋情ちがう……とツツコミ入れておきます。

だけど、レナスとミリーの『アーリア絆し作戦』が成功して、ようやく少し主人公がヒーローに絆されてきてくれました（笑）
ここらで一氣に二人の距離を縮めたいと思います！

氷の宰相

客間に戻っていくレナス様とミリー様たちを見送り、その後、ぐるぐるあれこれ考えつつ姫様の世話をしていた私が、仕事を終えて部屋に戻ろうと思った時でした。

王様に呼び出されたのは。

長い一日が終わって疲労困憊していた私はしばし沈黙し、わざわざ姫様の部屋まで呼びに来た宰相様に思わず言ってしまった。

「明日にするわけには……」

「いきませんね」

笑顔で否定ですか……。けんもほろろとはこういう事を言うのでしょうか。

「わかりました……」

私はどつと疲れを感じながら頷き、姫様に退出の挨拶をすると宰相様と一緒に王様の執務室に向かいました。

気分は屠殺場に連れて行かれる家畜のようです。

だって王様の話なんて決まっています。……勇者様と私が婚約したという噂がおそらく耳に入ったので、確認しようとしてもいうのでしよう。

婚約なんてした覚えもない私は当然否定するしかないわけですが、それを告げることを考えると非常に憂鬱です。

だって、期待しているでしょうから！

鬱々とした気分になりながら廊下を歩く私は、半歩前を進む宰相様に思わず声を掛けました。

「あの、宰相様？ 私と勇者様が婚約したとかいう噂は噂にすぎませんからね？」

だから見逃して欲しいとニュアンスを込めてみました。そういう行間を読むのはこの方は大の得意なのです。

ですが――

ふと足を止めて私を振り返った宰相様はにっこり笑って言いました。

「それは陛下の前で言いなさい。ですがね、アーリア、一言言わせてもらうと、君がいくら時間稼ぎをしようとも、断る権利はありませんからね？」

ひいひいひい！

王様ですら言わなかったことを、ザックザック言ってくれちゃってます、この方！

知ってはいますが、本当、容赦ないです……。

一介の侍女Aにすら敬語で話す、このインテリ臭のするルース・ハイリングラム宰相閣下は宰相暦十年というキャリアを持つ、眼鏡の似合うオジサマです。

が、オジサマという言葉がまったく似合わないくらいにその容貌は若々しいです。二十代後半か、せいぜい三十代の前半にしか見えません。でも実はファミリー様と同世代なのです。

お二人は仕事柄よく一緒にいるのですが、どこから見ても渋い中年であるファミリー様とでは、歳の離れた兄弟か上司と部下にしか見えません。これで本当は四十歳越えているというから、まるで詐欺のようです。

この若々しさについては、魔族の呪いでは？、はたまたエルフの血が混じってるだのいろいろな意見と見解があります。が、彼の部下は胃をやられ、更に頭が薄くなっていく率が高いことから、宰相様が彼らの若さを実は吸い取っているのではという説が有力視されているようです。私もその意見を支持してます。

真っ直ぐな栗色の髪に、琥珀色の瞳。眼鏡に隠されているとはいえ、スツと通った鼻筋といい、酷薄なうすい唇といい、切れ長の目といい、まるで精巧な像のように美しいパーツに彩られています。細面のその顔はモブ率が高いこの城にあつては、当代随一の美形と言えるでしょう。

ですが、その美しさは“氷のような”という言葉をつけ加えるのが相応しいものです。

いえ、勇者様のように無表情だというわけではありません。この方の怖いところは笑顔にあります。笑顔で——氷のような言葉を吐くのです。

氷の彫像のような顔に浮ぶのは柔和な笑顔。宰相様の整った顔に気後れする方にとつては、その笑顔はまるで冬の最中の春の兆しのように感じられることでしょう。ですが、その笑顔にホツとするのもつかの間、弧を描いた唇から漏れるのは氷の刃——。

その氷の刃は容赦なく対象物の心を切り刻んでいくのです。そう。今の私に投げかけた言葉のように！

それは王族でも例外ではないとか……。

だからついたあだ名は“氷の宰相”。

女性には恐がつて近付きません。完全に観賞用です。しかも普段はそのなかなか美形なお顔を眼鏡に隠してしまうのです。まあ、一部の侍女の間ではその眼鏡姿でのSっぷりが良いとウケているようですが。

ですが、眼鏡属性も腹黒鬼畜属性もない私はこの方が苦手なのでなるべく近付きたくないのが本音です。

宰相様は眼鏡の奥でその琥珀色の目を眇めながら、更に言いました。

「陛下は優しいので、グリード殿の言葉通りに君に強制することは

ないでしょう。ですが、君も一応、曲りなりにも貴族です。己の事情や感情より優先させなければならぬ義務があるのは分かりますね？」

まるで聞き分けの無い子供に言い聞かせているような、諭しているような口調。ですが、行間を読むと“つべこべ言わずにとっと嫁に行け”って言うてますね、宰相様？

そしてツツコミませていただくなら、一言言わせてもらって——それ一言じゃないデスヨネー？ 思いつきいろいろ言ってますよネ？

さらに宰相様の『一言』は続きます。

「避けられないことを後回しにしても仕方ないと思いませんか？ それとお互いを知ろうなどという時間稼ぎもそれほど長く持ちませんよ。何しろ新聞ギルドが君のことをやっきになつて探ろうとしているのだから。彼らに君が勇者との結婚を渋っているなどと書かれてもしたら、諸外国に口出しをする機会を与えることにもなりかねないのは分かりますね？ そして、そうなる前に——私が君の身元引受人としての権利を行使することもあり得るのだということも、ね」

ね、と言いながらにつこりと深くなる笑顔が恐いです！

私は思わず顔を引きつらせてしまいました。この方ならやりかねません。……いや、確実にそうするでしょう！

——実はこの方、城に勤めるにあたって、私の身元引受人になってくださっているのです。正確に言えば——ファミール様と共同で、ですが。

若々しいけど四十代な宰相様とファミール様とうちの父は、どういふ縁があつたのかは知りませんが、友人同士なのです。

合理的がモットーの宰相様と面倒くさがりのうちの父とはどう考えても水と油ではないかと思うんですが……まあ、交友があるのは事実です。

ですから城に私が行儀見習いを兼ねて侍女として上がる時に、後見人というか引受人になつていただいたのですよ。

普段私も宰相様もすっかりそんなことは忘れている事実ですけどね！

だから本来であれば結婚となると、父がここにいない今は宰相様とファミール様に相談すべきことなんでしょう。ですが私はそれをしませんでした。

いえ、意識からわざと逸らしていたのです。

だって、この台詞から分かるとおり、国益の為に勇者様と私を結びつけようとする急先鋒は間違いなくこの方ですから！

相談なんかに行ったら最後、絶対結婚強制で終わるに違いありません。恐ああ！

「だいたい考えてもみなさい。あなたのように平々凡々な人に求婚してくれる物好きな相手はこの先いなくてもいいんですよ」

……ぐっさりと氷の刃が刺さりました。ええ、もうザクザクでございます。

「身分は平民ですが、見目麗しい上に将来性もあって万々歳じゃないですか。それに私としても、一石二鳥です。そのうち私があなたの相手をみつくるってあげないといけないだろうと思っていたので、手間が省けて」

……ええっと、言い換えれば私が自分では結婚相手を見つけれないだろうということですね？

……たとえそうじゃないかと自分では思っているても他人に指摘されると傷つきます。

じ、自分だつて未だに独身のくせに……！

——だけど恐くてとてもそんなことは口にできません。何倍にもなつて返つてきますから。私は小心者なのです。

「さて、陛下がお待ちなので、こんなところで立ち話をしている暇はありませんよ。さつさと行きましょう」

そっけない口調でそういうと、宰相様は再び歩き始めました。

が、数歩進んだところでふと立ち止まり、またしても私を振り返ります。

「そうそう、言い忘れていました」

怪訝そうに見上げる私に、微笑む宰相様。

……何やら非常に嫌な予感がします。この方の笑顔にはいい思い出がありません。

「あなたとグリード殿の婚姻が決まったあかつきには、勇者一行に支払うことになっている姫様の救出の報酬がチャラになることがすでに決まっていますから」

「——はい？」

「豊かとはいえ小国のわが国の財政状況はそれほど明るくはないので、願ったり叶ったりです。あなたは結婚相手ができるし、国の財布はいたまないし、一石二鳥とはこのことですね」

眼鏡の眉間のブリッジ部分を人差し指でくいつと押し上げ、宰相様は言いました。

「私が言いたいのは以上です。さあ、では陛下のところに行きましようか」

啞然とする私を尻目にとつと踵を返して廊下を歩き出す宰相様。それをポカーンと見送るだけの私です。

私が求婚を受ければ、勇者様一行に支払われるハズの姫様救出の報酬がチャラ……？

全額……ですか？

——一介の侍女Aの金額にしては高額ですネー。だってもともと勇者様個人の報酬として私が挙げられたんですものねー。

それを合計するとわが国ってはいくら得をしたのでしょうか？

ふ、ふふふふ……ふ……。

「……………」

……売られた。

——国に売られてしまいました、私！

氷の宰相（後書き）

存在だけは既出の宰相閣下登場。

美形腹黒敬語紳士でSという作者趣味丸出しの人物です。

おかげでちよつと出てくるだけが、長くなること長くなること……。

この人が出てくるとヒーローの影が薄くなりそうだったので、今頃登場（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4278u/>

勇者様にいきなり求婚されたのですが

2011年12月7日02時58分発行